

ふしは、こうまんもいふそふさ、それを友だちがに
くがつて、どうぞ一チ度たれぞにふらせて、此末かう
まんをいはせぬやうにしてやりたいといふ咄を、野
風が聞てゐて、わたしがところへつれてきなせへし、
おもひれふつて見せやしやうと、ふとうけやつたか
らさいわいにして、二三人ですゝめてつれてきたの
さ、先さかづきがひとをりすむと、そのきやくが
つね／＼はげこだそうだが、どう云氣か茶わんでさ
けをはじめて、野風にさしたのさ、野かせもかねてた
くんで居る事だから、たべやせんといつたばかり、う
けつけねへでてらしたのを、むりにしているつて、つ
いそのきやくが銚子をひつくりかへして、野風が着
物へぐつりさけをかけたのさ、きりたての八丈の
むくもうちかけも、黒びらうどの帯も、さけだらけに
なつたが、さすが野風だから、へい氣ですつとたつ
て、又きらびやかにきかえて來て、そふかふするうち
床もおさまつて、一チ座のきやくは、いよ／＼こんや
は、とんだめにあふだらうと、となりのまわし座敷に
聞てゐると、思の外野風が大ぼれにほれたやうで、と
んだもてるから、一チさの客があつくなつて、野風を

よび出して、やくそくがちがつたとうらみをいつた
のさ、野かせが云にやア、なるほどあの客人は、女
郎かひにみやうをえた人でござりやす、おまへがた
のさそひやうでさつたかして、さつきさしきで、
さけをわたしにかけたのは、そ、うのふりでしたき
やうげんでござりやす、それはなせと云に、こんや
わたしに振れても、あの女郎はとんだけちな女郎だ、
をれがそ、うでかけたから、そのゐしゆにふつたの
だ、酒をかけねへとふられやアしねへと、ぬけ句にす
るつもりでござりやす、わたしもまた此宿では、ま
つぎかたれと、とをり名を付られたふしやうには、
名がだいいじだから、手だとしりながら、どうも今夜は
ふられやせん、それだからこんやは、ぐつとほれたか
ほで、うらやくそくをしてかへしやす、そうしてう
らにきたとき、おもしろくふつてみせやしやうとい
つたから、みんな野風がはつめいをかんしんして、そ
のあさはかへつたのさ、それからやくそくの日に、そ
の介といふきやくのところへ、そのいちざがいつて、
けふはせひあゆびやれとすゝめたら、そのときその
人のいふには、こんやうらに行と、あの女郎はたし

かにふるから行まいと、見ぬいたやうにいつたとき、
そのことを野かせが聞て、その手にほんとうにほれ
てきて、たび／＼ふみをやつて、よびたがりやした
が、とんとそののちはきやしなんだ、お世、深川に黒さ
んといふきやくがあつたがね、とんだじやうなしで、
そのくせぶ男さ、仇名をびわえうとうとも、能のめ
んともいひやした、あんまり情なしがとをつて、だれ
もとりとめて出たものがねへのさ、ふつとお鷹とい
ふ子が、わつちがよんで見せやうといつて、黒さんに
出たものさ、そふするとお蝶といふ子も、よんで見
せやうといつて出たのさ、それをおたかが聞て、ぐつ
としらぬかほで、おてふにいふにやア、モシわつちや
ア、おてふさんおめへときやうでへぶんになりたふ
ごせいと、いひ出したものさ、おてふがいふにやア、
わつちやアどうもおめへと、きやうでへぶんになる
わけはごせへせんとはねたのさ、又おたかいふに
やア、そのわけといふは、黒さんの事でごせへやす、
ぬしはわたしがせんでごせへやす、それをうつくし
くおめへに、黒さんをかしてをくから、見事によび
とげねへ、そふするには、兄弟ぶんのよしみがなく

つちやア、かす事もならねへから、さつきこのやうにい
ふのさと、おたかもさるものだから、おてふをしば
りにかけて、たか見でけんぶつをしやうといふあく
しんさ、それからおてふは、黒さんをよんでいふにや
ア、おめへといふものア、わからねへものでごせへす、
わつちやアおたかさんをよびなつた事はしりやしね
へが、どふもこふなつた日にやア、此うへおたかさ
んをよびなつちやア、わつちがたちやしねへから、お
たかさんをきれなせへしときめたのさ、黒さんがい
ふにやア、どふもてめへにやア、忠といふきざがつい
て居るから、いやだといふから、なるほど忠さんと
言きやくもごせへすさ、ごせへすがそれが氣にくわ
ざア、忠さんをきれやしやうといふうち、八まんさん
のをひだしがなるから、ぐつとせきこんで、なんでも
あさなをしにして居なせへし、このかたをつけて
見せやしやうといつて、その忠と云きやくのところ
へ手がみをやつて、けふはなしてへ事がちつとある
から、こいといつてやつたから、忠がきたといふやつ
さ、それから忠は、はをりを二三／＼めへかつたり、何
かしてさわいで居ると、おてふがしやくがいたいと

か、なんとかいつてたつたものだから、忠がぐつと
 かんしやくで、これへなんのこつたへ、用があるのし
 まつてゐるのと、よびによこしやアがつてをいて、し
 やくがいてへの米がたけへのと、とんだやつじやア
 ねへかと云と、おてふはこゝがみすりといふもの
 だから、モシ忠さん、あんまりてへそふなこはいろを
 つけへなさんな、いんばぬまじやアねへが、あとでう
 まるめへによとつらみをいふ、忠はなをく、あつて
 なつて、ム、そんならうまるめへとは、きれると云
 事か、これへわれときれたといつてな、他所いきにき
 せるをもたねへほども、ふしやうじやアねへわへと、
 いひつをつたから、おてふはさいわいにして、つき
 だしてしまつたのさ、それが忠はいろおとこ、黒さ
 んはぶおとこだが、おたかがめへのたてひきばつか
 りで、そふしたのさ、それだから深川といふところ
 は、客人のあすびに、でへぶあんばいのある所さ、い
 ろ男にかえても金にかへても、子どもどうしのたて
 ひきを、おもにする所さ、およしよしはらでも、今は
 とをり名を付て、たいそうにして居る女郎衆が、みん
 な子どもさ、そしておしよくの女郎と、二まいめの女

郎とは、どこのうちでも中カのわるいものさ、今では
 んじやうなのはひなづるさん、きしやうのいゝのは
 すがはらさん、さまへど手をとつた女郎衆は、松賀屋
 のはつ島さんさ、いろきやくがくら前からまいりい
 したが、あるときくら前のきやくのやくそくのばん
 に、かねてためになるさる大盡の客がまいりいた
 のさ、くら前のほうへは心やすだてをして、その大盡
 をざしきへ入れたものさ、河東ぶしなぞでしやれて
 居る所へ、くら前のがきて見た所が、やくそくだに座
 敷にきやくがあるから、ぐつと大がんしやくで、ざし
 きへふんごんで、その大じんをさんく、あつこうし
 たのさ、大じんもやくそくだ居た事をいはずに、ざ
 しきへ入れられたものだから、まわしかたややり手
 をよんで、おふをうどうになりいたが、はつ島さん
 はぐつとへい氣で、その大じんのまへ、いつて、モシ
 イ、こんやはせんでへ、くら前のきやく人のやくそ
 くでおりましたが、くるまでもまづざしきにおきま
 うそふとおもひして、ざしきへ入るまふしいしたが、
 やくそくの事をいひしないのは、わつちがわるふを
 した、ぬしもあのきやく人にあつこうされなんして

は、たちいすまひから、これでぬしのかほをたつて
 おくんなんしと、ゆびをきりいたのさ、そのひや
 うしに、ゆびがどこへかこんで、見えなくなつたの
 さ、これではきがすみせんと、又ひだりのゆどをき
 らうとする所を、しんぞうやたいこもちがよつて、も
 ふそれで心の中は見えやしたと、やうくとめいし
 たのさ、それでの大じんもとくしんして、さかんにな
 つてまいりいたが、それではくら前のきやくが、は
 らをたつてきそうもないものだに、是もやつぱりそ
 のまへよりも、けつくしげくきにきいて、それほど
 のそふどふも、しづまつたのさ、どつちかひとりし
 くじるのだが、なるほど手のある女郎しゆだ、大じ
 んのきげんのなをつたはきこえたが、くら前のがよ
 くだまつてくると、ひやうばんしいした、あとでき
 けば、ゆびを切たとき、なくなつたふりで、しんぞう
 といひ合て、そのゆびをかくして藏前のきやくの所
 へ、もたせてやりいたのさ、はつ島さんがうけられ
 ていきなへすとき、ぬしのくちからはじめてあかし
 ておはなしなした、それでわかつたのさ、ヲヤさん
 か、はやかつたの、下女さん、たゞ今かへりました、お仲

「ホンニもふあぶら屋がきた、もふ日がくれるそう
 だ、お品、わたしどもうちでも、もふかへるだらう、
 およながのしたくでもしやしやう、○女といへる文
 字を三つ書て、姦とよむもむべなるかな、予ひと、せ
 池魚のわざはひにあひて、此新道にかり居せしとき、
 此三人の物がたりをき、はべりしを、今そのまゝに
 こゝにしるしぬ、

作者 山東 京傳
 関 同 けいこう

「きすすなくのべがねのきせるは、はい吹をた、い
 て、かんしやくのつけびやうしとなり、おもひにはど
 うしたはなのさくらばりも、くびをながくして、名代
 のきやくのごとし、合、今はりわけし三ツのさ、すい
 つけたばこのすいなるも、あげさせるのやにこきも、
 とをるとをらざるたがひは、たゞくわんせよりの
 一すぢに、たのむはほかにないぞへ、テツンシヤン、
 きやう傳みづからばつす

古契 三 娼終

男倡新宗玄々經序

佛告阿難、誹謗男倡宗門者、死而墮豺狼中、又優婆塞戒經曰、男倡をにくむ者は、ながく滯下の地獄に落るとかや、此たいげ地獄と云へるは、八大地獄の外にありて、其嗅氣たゆべくもあらず、おそろしき地獄なん、爰に空海の跡をたれ給ひし峯をくだりて、櫓太鼓の音近き里に、たうときひじりのおはします、年七十有餘歳にして英氣さかん、折に尺八を吹けども、林に竹をさらす、行法をなさんとては、日に三度狂水を咽に手向け、口に新之歌を讀誦して他念なく、一字も學ずして、てつべいから不立文字と説給ふ、予此徳をしたふ事年あり、そも男倡宗門のたふとき事は、どふした拍子のひやうたんど問ふ事しばく、或日から風呂のうちに三日三夜こもりて、ひそかに此教を説しめし給ふ、其旨を墨して紙に寫し、衆生界に投じて、自他平等に法味をさとし、あいともにそゝり遊ばん事を願ふ、

男倡宗門の行者

男倡新宗玄々經

鐘西翁著

古人後庭華と稱したるは、此男倡の事にして、其いさを讚美したるの名也、夫若衆道に二品あり、劇場童かけ子のたぐひの、治郎といへるものを第一とし、地若衆を第二儀とす、其治郎のおいたちを見るに、八才にして始めて三絃の棹にとりつかせ、いまだ夜のあけざるに起されて、五色の聲を發す、又霜の夜の寒彈、土用の大ざらへ、しばらくも油斷させず、是を種といひて、くわいのやうなあたまして、折には近き所の小づかひにも出、もつばらつとめる若衆の、樂屋入りの供について、舞臺の格を見習ひ、とかうする中衣裳を切り込み、舞臺へ押出し、相應に太夫のかぶろ役、セッフ太夫さん文持つてゆくぞへ、アイ引、といふを一人前のせりふにして、芝居を戻り、暮方から座敷をつとめて、おそろしき山法師、或は在郷の熱鐵坊にも出合ひ、いげちなきうきめにあふ事也、床のうちのとらさばきはもちろん、客へのいきぢつよき中に、きつすいと云ふまことの情をこめたり、けわひか

たは女も及ばぬほどに仕立て、艶なる事又たぐひなし、是則釋尊のむかし、あら、仙人の若衆となり、薪を樵水を汲み、夜ルの殿をつとめ給ひしにも彷彿、此難行苦行を経たる所なれば、若衆は治郎にまされるはなく、是大乗の衆道也、又地の若衆のうちにも、官舎寺に小姓といへるは、いきぢも粧ひもあい劣らぬものありて、第二の衆道也、さもなくて何の情もなき小童小丁究のたぐひを、腕づくにてまじわり及ぶものあり、是は唯其犯す事を好むものにして、衆道を愛するはあらず、このともがらには、狼に前髪かづらさせてあてがうても、一穴だにあらば満足すべき事也、古詩に、山礬是弟梅是兄とあるは、山谷の作也、これ常の兄弟の事にはあらず、山礬は七里香といひて、今の沈丁花にはあらずして、色香ふかき花なり、是を梅にならべて、かの念者と若衆の情のうるはしきにたとへたり、古今來唐も和も、衆道を愛する人多し、周の穆王の菊花童は、枕をこへたが意外じやとあつて、請人にあづけられしと也、若衆は折に思ひ切つた不行儀も、かへつて愛すべき所なれば、ツイしかつてもすむ事を、かくせられしはよつほど短氣者、穆

王も今少皮のとれぬ故なるべし、又衛の靈公、彌子瑕といへる若衆を請出しておかれしが、あれなじみたるのちに、彌子瑕が親の常醕酏、河豚にあてられたとの知らせにおどろき、ことわりなしに、靈公の車に乗り、親の所へ行きたるを靈公聞いて、孝心なりと云ひてとがめず、又彌子瑕或日桃を食ひて、あまり風味がよさに、一口喰ひたる跡を靈公へさし出し、是くわんせとすゝめたり、公ほゝゑみて曰、おれを大切に心得ばこそ、此うまさ物をわけたりと悦び、二度ながら黒う出て濟メラれしに、びしか廿七八にもなりし頃、思ひもよらず婆のうらみ云ふやうに、はるか跡の事をくり出して、車の事も桃の事も不届慮外千萬、弓矢八幡かんにんならずと、大きにげきりんにて、なんなくびしかを追出されたり、たのしみたひ程たのしんだ跡にて、かうしたさばき、さりとほむごいといはふか、よつほど手のわるいしうち也、彌子瑕も若衆あがりの事なれば、ぐにや／＼して何の役にも立ッまじけれど、かなしくも香具店でも出してやらねばすまぬ所を、靈公一生の仕くじり、後世たいこ持の口のはにかゝる事也、日の本には高尾の文覺

法師、さもすまじき瀧に荒行をおこし、いのりおう
せて六代御前といふ若衆を手に入れ、さまぐと世
話をやかれたり、又論語先進の篇に曰、暮春者春服
既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雲、
詠而歸とあり、此童子とさしたるものはなんぞや、い
かほどめしつかひがあるとして、丁兒を五六人つれて
ゆく筈もなし、又てら子屋の天神乗するやうに、門弟
の子供をつれてあるくやうな事は、唐にははやらぬ、
是こそ若衆に相違なき證據なり、彌生の空をろよく
はれて、若衆つれての野遊びとは、よい趣向を立ら
れたり、孔子聖人さへかくのごとくたのしみ給ふ道
なれば、いわんや凡人におゐておや、扱むらさきの朱
をうばふといへるも、其彩色の事にあらず、朱は紅
裙にて妓也、紫は今いふ野郎帽子也、女郎冷郎に一座
すれば、先其女郎わが逢ふ客をほつて置いて、其若衆
へいろどりかけ、襟つくるひ尻眼かよはし、どことも
無しにしよげてくる、是朱の紫にうばゝる、也、我
レ聞、昔紙衣和尚と編笠居士と、妓昌倡の問答あり、
編笠居士曰、文をかよわすにも、女郎なればお定り
の、逢度ひ見度ひを百べんほどかき、又餘程なじみ

たる中では、来てくれくさらぬか、あいたいワイヤ
イなど、ちりごかしにかきて、てうしにのせる、若
衆の文は、一筆啓上申、りなど、あとない事をそ
こく、に、三下りほどかきておくれども、心底のまさ
れる事、同日の論にはあらず、夜なか時分に急用が
出来ていぬる客を、あいかたの女郎のあしらいを見
るに、心の中では此客のいぬるのを、拜んで居るほど
うれしひのを、半町計おくつてゆくうちにも、めいり
たる體にもてなし、わかれしなには、這出のやぶ入
が親方の内へいぬるやうな顔つきで、客に心をこ
らせて、鼻の先へ性根魂をつまみ上げる、いやでなら
ぬ床の内も、もだくだした體を見せ、客にもらひたい
ものがあると、我馬のあふた中居に、太鼓うつても
ろうておいて、わたしがかゝさんが、久しぶきあいが
わるいによつて、此あいだボハさんといふお客が、ね
んじんを香包に、大かた三盃ほどくれて、あつたけ
れど、がんどうとやら云ふねんじんで、わるいげな
によつて、こちの内男衆やおなご衆に、わけてやつ
てしまふたと、あとかたもない事云ふて、遠い所から
よい人參の價をとりよせる分別、むごしつたなし、男

倡はこのあたりの恐ろしみなくいやみなく、ほしき
物あればうちつけに、此印籠下んせぬかと云ふ、客
もやりとみなければ、それはやらぬといへば、アイ
といふてそれぎりに、すこしも念なし、往昔織田信長
の小姓に、森のお蘭といへる小姓あり、信長公則へ參
り給ふ時、此おらん御刀を持って控へたる間に、此刀の
きざみざやの數を、くりかへしてよみ居たるを、公
則よりうかゞひ見て、翌日小姓共多くあつめて宣ふ
には、此きざみざやの數いくつといひ當たるものに、
此刀をくれんと也、小姓共おしいく、に其數を云ふ
に、おらんひとり何ともこたへず、公の曰、汝何とて
詞を出さずやと問ひ給へば、きのふ廁へ御出の時、御
刀もちし間に、御さやのきざみの數、とくく、とよ
みおきて、よく存候へば申上ず候と答へたりしに、信
長も感じ入らせ給ひしとかや、此たぐひの事皆若衆
の情にして、やさしくすなほなる所也、起きわかれの
折しも、あつき比のあけぼのには、すこし踏ぬぎて
寐て居るを、客から打きせてやつて、モウいぬるぞと
ゆりおこせば、いなんすとかといふた計りて又寐入
さま、此あたりの事あどなくて、若衆の愛とすべき所

なり、心義のたうときはさらなり、とぎまの事にもこ
ころよきは、
「つれあるひてもいやみなし、
「紋目をうりたがらず、
「多葉粉のみて床をひつばる事なし、
「いやと思ふ時寐る事をすゝめず、
「中居についしやういはす、
「さゝやき話しせず、
「臺處へ立ッ事をせず、
「喰へばすみやかにくふ、
「床の段に寐間着にきかへず、
「月ごとのさわりなし、
先ちよつとした事にも、其益ある事然り、只虚にして
着するものは女郎、又不着して實なるものは野郎
也、なんとありがたい事であらうがな、すみやかに珠
數を切つて、我會下に伏くせよと、編笠居士席を叩い
て申されければ、其時紙衣和尚こらゑかね、居合腰に
なつて答へて曰、汝鼻の下へあせを流して、尤らしう
いはるゝが、皆ふるひぞや、女郎のことばは月
花餘情にあらはし、女郎のくせは色八卦につくした

り、これらの粕をなめてやつて見るのか、そんな悪口がなか／＼こたへるものでなし、おそれ多くも二々はしらのお、人神、鶴鶴のひこ／＼から思ひつきて、みとのまぐはいをなされ、なかくばな高の和合するが道のはじまり、汝此君子國に生れ出て、女郎をにくむはとり所もなき以の外の罰當り也、邪なる横道に心をよせて、拍子木ではなかもやうな、きつしくな事をこのむは、横にありきて石垣をせ、る蟹にも劣りたり、そも女郎の十四五よりつき出して新造となへ、未開紅の花にくらべて、いまだひらけざるくれないのつぼみ、其色香深きをたのしみ、水揚と云ひて珍美厚し、其まじはりをかさねるにおよんでは、鶯にもあらず鈴虫にもあらず、云ふに云はれぬ聲を出して喜びをあらはす、是を俗に文彌と云ひてありかたがり、大八洲の秋津國、ひとつ所へよせるたのしみ、男倡道の及ぶ所にあらず、汝今男倡に十ッの益ある事を云ふ、予いち／＼これに答へん、耳をさらへて聞べし、「男倡はつれあるひてもいやみなしとや、是は汝がりんき深きによりて也、其故は、女郎をつれ歩くと、かしこの客をこの男が詞をかけ、打まね

きなどするが、小ばらのたつ故也、是根性のちいさき故ぞや、又「紋目を賣りたがらぬがきつううれしいそうなが、これも甚だ客イから起つた事じや、「多葉粉のまぬ事をきつい自慢じやが、此多葉粉は色道具にして、なければ叶はぬもの也、古代は吸付けたばこといふて、おさだまりの愛をもち、ながきるにしの橋となりて、媒草ともいふ也、「いやと思ふ時寐る事をす、めぬのは、男倡の勝手づくといふもので、にくむべき事なり、「中居についてせういはず、「さ、やきばなしせぬのはよいが、客のあちら向いた間に、中居の手をにぎり、又夜更け客しづまつて後、そつとぬけて出て、隣の屏風へ四ッ這にはふて行のも、よつほど見ぐるし、「臺所へ立つ事をせずと嬉しがるも、やはりりんきまたから出たものにて、買切つたうちには、我ものぢやと云ふ文盲律義ならん、猿廻しが猿仕込むやうに、腰づけにして置くもうつとしき事也、「喰へばすみやかに喰ふと云ふ、ほめやうも氣疎し、あなたにはねぎの鶏卵がお好きじやと、中居があいさつすればのりがきて、男倡の口から、おれは切らずに丸がよいと、曲手まりとるやうに、ほりこんで喰ふの

が、あまり出来たものじやないぞ、「床の段にも寐まきは着かへすと云ふ稱美も、大きな間違也、女郎の寐まき姿は、只其客にうちまかせたる所にて、一夜に千とせのちぎりをむすび、情のあつき故也、「月々のさわりなきは、成程手廻しなものじやが、其かはりには、折々に五痔や三痔のさわりが出来て、此間は薬湯に參りますといふ、ことわりを云はるゝのは、傍においてもしんきなもの也、まだ／＼是非を論ずる迄も無し、先汝が愛する處の男倡は、いづれの所より生れきたるや、此答を聞くと、紙衣和尚眼をいからせてやり込め給へば、思ひもよらぬ此一句の理屈にめられて、此時の問答は編笠居士の負となりて、男倡道にはづかしめをうけ、女郎宗門の勝となりたり、是居士の二日酔をせられて、甚なやまれし時の問答なる故、思ひもよらぬ負となり、男倡宗門のひけとなりたり、我道信心のともがらは、此のちとても覺悟あるべき事也、佛はうとくとも行者、行者たらざればあやまつ也、ちがごろの若衆好きを見るに、我ためには伯父きとも云ひそうな若衆にかゝり、いちがひに年のたけたるをもて遊びて、黒がるもいや也、かうい

ふ人は、ちまつとする話にも、わたくしは兎角秋の閑静なが好きでござりますと、扇ばち／＼と鳴らされる、浪花六月廿五日の川御祓にも、ちいさき舟にのりて樂を頼、我ひとり清めりと、時をしらぬたわけをつくすもの也、若衆は少顔ににきびなどあらはれ、色事味のよつほど覺えたといふ時分が、愛のさかななる所なり、此時からあいか、つては、たとへ其若衆れき／＼の子持になつても、したしみのうせぬものなり、又若衆の聞の事は、女郎の如くになすものにはあらず、たとへば十夜さあへば、五ッ夜さ御座しき計で仕舞ふほどの事なり、是愛する事の甚しくして、しせんとこのいたわり出るもの也、只根かざりにすき間なく、水車で粉をはたくやうにするは、那智流と云ひて、甚いやしむべき所也、此流儀の人は、浪花農人橋の東濱を通つても、心をうごかすほどの事にて、これは大きに下品の事なり、眞の衆道をこのむにはあらず、浪花農人橋東堀に、不潔物を賣買する事を業とする家ありて、此透嗅氣はなはだし、若衆の聞中の段は、女郎にまじはるとは格別ちがひて、淺深をもちひず、只淺而已にて其たのしみ深き事あり、此度はわざと此術のくわしきを書もらしぬ、仰ぐべし衆

生を導き給ふ、無量の言つきする事なし、あなたふとくも不動尊、背中には炎を追ひ給ふ、あつき中よりこんがらせいたかと云ふ若衆を請出し、不斷傍をはなれず樂しみ給ふ事、尊像に見る所のごとし、此道にとくより入たるは、いよくすゝみ、いまだ入らざるは、すみやかにぢやうちやく妓樂の小乗をはなれて、此道に大悟すべしと云々、

男倡別名

若衆をヒガ、

ヒガといふは、大古の言にして、男色のまじはりはことかはりて、僻なりといふ心にて、ヒガとなへたり、是はいまだ日本に目鼻のつかぬ時の、間違ひより出たる言葉なり、

中ごろしんちうみがくといふは、

衆道のいきぢの直なるをもつて、まじはる事を、心中をみがくといへるを、眞鍮をみがくと文字あやまり來れり、

菊座といへるは、

川太郎も及ばぬほどに、此道執心の人、かの所を此花にたとへて稱美せり、

此ベスといへるは蠻語にして、いやしき端の國より出たる故、文字つまびらかならず、此道執心の人再考あるべし、

又ヘツボ、午房の切り口などのたぐひは、皆つたなきことばにして、論ずるにたらず、

奥に男倡宗門の名目をあらはす、

色に名寄

十木 市松 姉川 外山 嵐 國市
桐野谷 嘉吉 萩野 千藏 中村 百松
十木 菊松 玉川庄之介 津川 菊太郎
山下 幾太郎 坂東 菊松 花桐 幾太郎
竹中 小吉 市山源之介 生島 金藏
小川 吉太郎 柏井 富竹 山下 龜松
桐野谷 秀松 姉川 新四郎 嵐 衆松
關東屋店
中村 松右衛門 大和川 兼道 玉川 大三郎
岩井 八十七 嵐 卷之助 市山 花松
嵐 淺五郎 中村 又藏 大和川 龜松
山下 三八 市川 團七 淺尾 留五郎

中村 三吾 柳山 小太郎 かね子 ひな路
嵐 龜 鶴 嵐 廣市 嵐 五郎市
坂東才三郎 中村 富三郎 淺尾 嘉吉
市川 萬五郎 萩野 廣藏 岩田 花崎
中村 いろは 市山 富松 松島 小松
姉川 大藏 中村 しげ藏 萩野 小吉
藤川 小吉 松崎 大吉 嵐 定五郎
富山 龜松 嵐 龜吉 嵐 春藏
市山 淺之介 富山 兵太郎 富山 金作
淺尾 十治郎 玉川 伊せ松 花桐 豊松
姉川 みなと
中村 屋店
嵐 豊松 十木 富三郎 嵐 音吉
櫻山 糸太郎 村山 金藏 嵐 小辨
竹島 きん吾 桐野谷 さんご 萩野 梅之介
桐野谷 千代の 市川 金彌 嵐 辨之介
三保本市三郎 嵐 つた藏 嵐 八重菊
十木 菊次 十木 若松 嵐 百太郎
おか本 與吉 嵐 菊介 嵐 八重吉
中村 小才三 十木 金太夫 中山 小吉

三保本竹之介 嵐 萬之介 嵐 辨之介

市の川喜太郎

堀江影子

〔いつ庄〕 吉次郎、文彌、はりくろ、花松、

〔京 龜〕 乙松、庵市、浪介、與市、喜太郎、龜松、

〔千年屋〕 長五郎、竹三郎、萬太郎、

〔丹波屋〕 彌保太郎、常世、

男倡新宗玄々經終

假里擇中洲之華美自叙

鴈聞て亦一寐入する夜哉、夫契情は鴈金なり、夫を如何といふに、住馴し北の國をさつて、みんな三ッ股に來る、其揚詰の契情も、ちよつと假宅鴈の文、いづれかりにゑにし有り、冬も中洲の繁榮を、岡目にそれと三ッ股や、通に外飾有壁に耳有、徳利の口と俱に、ふりさけ見る二階の欄、河邊見ニ水流と、紫式部が俤に髣髴たる、名取草の君たちを見ては、いかに夷草も腰をぬかし、氣の利た仙人も、雲間を踏はづして天上より落る、美人草の全盛には、仙臺河岸の矢來よりもしげき客の、あしきも美なるも一人として、茶引草の局も無し、されば語に曰く、里者仁爲美、擇んで客を取らずんば、焉ぞ利を得んと、故に手もななく、假里擇中洲の華美と題す、讀者是を嘲て、糞土の如しとさみなすとも、予は河童の屁ともおもはず、唯世間を水莖にまかす而已、

申の中呂

有難山人書于鳶島堂

目録

- 第一 當世流行
- 第二 並木の一華
- 第三 小通の登樓
- 第四 忽行の謔言
- 第五 見出の閨亂
- 第六 二尊の談合
- 第七 高尾の解脱

假里擇中洲之華美

曾子曰、十目所視、十指不揃、倡妓も、絲竹の道をたしむといへども、一節切は禁物なるべく、さはいへ縁の切れるとしりながら、鬪をなす女郎あり、一の絲の切れてうれしがる妓者も、人の心は面のごとく、浮氣な風に散りやすき花の雲、鐘は上野か淺草のくわんおんの額は、嵩谷筆をふるひ、弓弦をふるふ奥山の太弓は、梁を越して無科楨を射る、見物の君子は、わらひの種を、枕びやうしにあらねども、アレハどつこい、コッレハ三介まつたり、と、團扇ではたらく獅子の足は、蜷貝をめしつづで付々、二まい屏風を小楯に取、船頭にあらねども、乗合はかまひませぬ、サア廻る内おはんさいいと、駄菓子を取らする鬮箱は、お花獨樂を廚子入になしたることく、辯舌は箱の中と俱に廻り、堅板に水をながせば、にこり酒のかわばんは、椎の實筆をもつて、釘の折の筆勢をあらわし、住よしの名物玉千鳥の籠は、芝居の莠莠のごとし、木綿に丈なしあれば、未練なしといふ餅有り、玉

子まんぢうの厚味には、お市が毛糰頭もはるか劣り、神圃孝大事の唄流行して、親孝行の次第を賣あるけば、岡崎町より無二の忠臣出て、御免の板行とよびあるく、是ぞ世人の鏡草、くもらぬ御代のしるしなり、かゝる例は江都におひて、いまだ聞キんせんと、里訛の天神結びに、地もの、島田くづしは、いかなる醜女も意氣に見ゆ、風流に見ゆれば、菟川、春日町にもあらばこそ、御藏前の鹿は、踏分べき紅葉もなく、御休なさいましといふ聲きく時は、茶屋のかせぎとしられたり、ソッヤ出た又出た、龜の甲には似もやらぬ、萬年神酒の口は、伴頭目を慄ばしむ、大極上々油へらず、徳用向のかわらけは、諏訪町にかくれなく、千句合の方灯の油、費と見へて耗にもならず、大きなこゑの講釋師は、座料に不及して、かならず外面に人立浄るり、評ばんよく大入をとれば、横町の正助にけおされ、湯島の天神と芝神明の御地内におきまして、人形戲場興行なせば、中の芝居にて能をはじめ、又小供さやうげんにておちをとる、樂屋新道の竹枿榮五郎が力もちば、小人島の見せものを以て持にす、肥前

は大仕掛にて、度々あたりをとりかぶと、夫にはあらぬ編笠も、人目の關の大門や、中の町にときならぬ、藤棚をらをとち、紫白英をたれてな、めならず、江戸紫のいろだちは、ひとつ所へ夜の俄、日限をきらねども、十日せず仕舞ふ、遊人爰にあつまり、驕を盡し奢をきはむ、五歩に一兩、十歩に一角を擲ども、視金如土塊、秦の宮室にひとしき青樓も、束の間に焦土となんぬ、可憐、近く年數を考るに、辰の四月燬てよりこのかた、わづかに四年をすぎず、是俄に不時な事のあらん前表なり、さるほどに、寺々のかね、月落烏啼て霜降月、輔祭の日もくれて、翌懸たり朝まだき、ソリヤ鍛冶屋ぞといふ聲に、ぞつと白齒もおいらんも、蜜柑のごとく散亂なし、いなせとむなはきぬ、に、吸付たばこの火におわれ、歸る客より眞崎へ逃て今戸がかふならふ、橋場の寮や檀那寺、和尚三谷をたのみてし、しばらくやどりを覚ける、

並木の一華

易に曰、同聲相應、同氣相求、目のよるとこへ玉がよれば、土手八町のゑによつて、土手側の邊りへ青樓現じ、霞簀張りの寶年餅も、皆中の町の茶屋とな

る、見歸り柳のに引絲かれて、柳橋のたもとへ扇や假に居にけり、角町の見番いづくにやあるらん、藝者もしばらく浮世をのがれ、むなく手をこまぬいて、假り宅の御面を待、夫浪花にて並木といへば作者に名高く、東都にて並木と問へば、淺草にかくれなし、かくれ渚に身をよする、海士の子なれば宿も定めず、されば古今集にも、世の中は何かつねなるあすか川、きのふまでは石の上、古道具慶、料理茶屋、御宮に夷大こくを、造り花屋に南禪寺、豆腐の人も昵近に、なるかならぬか見通しの、平澤うらへ引ッこめば、蓑竹にあらねども、春慶筆を投て、ちつと蘭蕨に醬油の付口さ、鱒の下駄の齒をならす忽のわる口は、格子先に氷り付てはなれず、大佛もちに近康は、見世を二つにわり床の、袂敷居の唐紙は、奥山の茶屋のごとし、二階へかけ上る客は、あわ雪のはしごよりもせわしく、三たり四たり廻しをとりし倡女は、まくらをもつて二階中を、くるくるとまはる事、切賣の色事にひとし、常にあづからぬ腰のものも、内證の戸棚へはあれば、初會の御盃も大晦日の婚禮のごとく、はやく若ひものがあづかれば、ざつと御床も角田川の、名酒

あきなふ所とはなりけるも、いつしかきのふの淵ぞけふは瀬となる、ふしぎや今まで有りつる女、とりどり假粧の容貌を見し、樓船をうかめて大河を濟り、ういた並木を引拂て三ッ股にいたる、千變萬化有爲轉宅の世なりけり、

小通の登樓

酒興に曰、緩々たる女郎は在中洲、窈窕たる倡女は、兩國に美徒あり、見番いかめしく、藝者改所とかいつけし方燈を出し、袖の梅、平次そば、山屋豆腐にまで付けども、蛇の目すしは木偶人町に定見世のやたい、黄昏より出、甘露梅は長谷川町に名高く、出來合のすずり蓋は、きのじ屋をこち付、たそやあんどは中番に有、田畝の蛙もまとりすむ、鵜てふものとかわり、響駕より響網の、上ぐたりおろしたりなすを見ては、野暮な客をあそぶに的中す、沖のくらひに白魚の簞は、花火の平均かとあやまたる、漁舟の火影は寒ふして、浪を焼出されの娼婦、役日物目のせわもなく、付々とけをはしよれば、きいたふうの客はかすりへまはり、がまんて直す氣づかひなければ、むかひのかゝるあんじもなしと、ちりめんの頭巾のうへね、

おやち橋でかつた手巾をほうかぶりになし、羽おりは茶みぢんのゆふきつむぎに、つやなしの上田の小袖を着し、黒どんすの帯に、ばた／＼するうら付をはき、連は黒のりうもんのわた入ばおりに、あらければうのちりめんの小袖、鼠じゆすの帯にお太刀をきめ、暮がたよりいつきせつきと、大橋、時にこつちらを通つていかふ、河岸通りを行と、ふじ屋の菊藏が見付るとめんだうだ、高麗やお色がるねへからい、と思つたら、菊が越して來てあやまらず、永代おれも船宿の藤本の藤が所へ行た、何にもかりはねへけれど、又よらねへかならねへ、大娘のおもとは氣が有るす、永りきんだ目附の娘さ、大響がは入ッたかの、永たしかまだ、大どうせふ、引手を連やふか、永よしにしたがい、あいらアむかふから一人まいで、五十文七十二文出す所もごせへす、その引手をとるからい、が、連ていつた計りでちきに歸るもの、おもしろくねへ、何んでも引手なしのッ、かけ上りさ、大「夫もよかるふ、小女ぶら」もしだんなさん、どつちへぞ御出なせやし、大「イヤどこへもいかねへ、引手若者」引手「だんなどつちへぞいらッしや

へまし、よい小供衆の所へおつれ申ませふ、小女「コウ、さつきからわたしが付てゐやす、引「ハテいよ、しつてゐるよ、永代はきよろく」と、「何んぞおはなし合でもござりますなら、おいらんをおよび申て上ませふ、永イン「インニヤよりやアしねへ、引「とんだ事をおつしやりやす、お遊なさるおかたはしれます、永小「なんとあいつを連やふか、大「ウ、よかるふ、あんまりこまねへ所がい、せへ、引「ハイ、角山口むさしやなどは見世を張つております、御らんないまし、大「コウ、今あつちへいつたげいしやアだれた、小女「筆次さんでござへすよ、大「見ちげへた、永「いつそ大文字やにしよふか、引「ハイ、それがよろしうござりませふ、と引手の男先に立、大文字やへはいり、小こへにて、おふたりおつれ申て参りやしたと若者にいふ、兩通うすつと上がる、若いものおわきざしなといふ、お小づかいござりませんと、兩通は二かいの上り口にまご付く、こつちらでござりませんと、若いものがあないにつれ、二階へ上り座につけば、たはこぼんと盃を、大「爰へは久しぶりて来た、去年の燈籠に來たまんまだ、その時はおれががさをしを買ふの、連が爰の一ト重となじみだから、一重が座敷へすい上りの、それげいしやをよびの、あたまからどんとさわぎやした所が、欄間を見た

ら、蝶と千鳥が彫てござへす、そこで一首よみやした、永「なんと、大「蝶千鳥ほりし座敷のおいらん、ま會我にゆかりのひとへなるらん、永「おもしろい、會我へゆかりじやア物日が思ひやられる、と咄の所へ出は、花住に人歌といふ兩君、かりたくの事なれば、永「ナントげのみにけんじきもなく、夫より盃例の通り相濟、永「ナントげいしやをよびにやろふじやアねへか、大「夫が能かるふ、ぐつとにぎやかに、二挺鼓の鶴次がよかるふ、呼びにやつてくりや、引「かしこまりました、といひながて引手はすぐ、大「是から膳を出すだろふが、モウ何にもにかへる、大「是から膳を出したまのんで、大きにめくへねへせ、今八ッふじてしたまのんで、大きにめへてへ常燈明だ、廻し禿には少、菊次、ぬしやアとんだ酔つてゐさつしやるよ、大「アイよつたのさ、おらアすつとけへろふといふのを、連がよつたから、そこでおれもよつたのさ、みな、此所へ妓者の鶴次雛次來る、まづ御定りの通り、客へあいさつをなし、夫より女郎衆へもあいさつ、あいしらもてなしにふわに、まんべんなく口をきながら、鶴次は箱より鼓を出し、しべをしめなをしなどしたくにかゝる、雛次は三絃のてうしを合す、永「きのふ淺草で見かけたが、どこへいき山だ、鶴「ちつと用事がござりまして、田町ま

で参りました、永「おいらはすぐに馬道へよりの、茗荷屋のかゝアがさる子細有て、おいねといつて出やす、夫をよんだがとんだはやるよ、大「馬道で思ひ出したはへ、爰の中通に四季庵のほうへよつた方さ、小まつやお高といふ假宅は、實は馬道の江川屋丹次といふ子供屋でござへす、今度のやけから思ひついで、よしはらへ遣ひ物をして、小まつ屋の出見世ぶんになつて、此中通りへ越して來たて、かゝえの小供はいゝ子が二三人有つたが、今見れば五六人見へやす、此るいがいくらも有つて、内中が越して來たが、丹次ばかり馬道に残つて、何んにもせずにいるのさ、何んとかふいふ事まで知つて居らアす、きつひ穴知りだろふ、雛「穴知り男之介とは、あなたの事でござりませふ、大「ウ、有りがてへ、是より鶴次雛次は、關守の花はちりからに、末がしの入にて、永「ヤンヤ、二丁鼓じやアねへ二挺鶴次だ、大「一人姉さま鶴次が上手ウ、菊「とんだよふさんすねへ、大「時に三枡が書た、御田でもうならふか、雛「ちつとおかたんなせへまし、と三と、永「イヤ御田より花咲春といふ淨るりを見たが、よく出來ました、夫に赤城の文字が手を付たといふ

事ツた、何んでもはじめが三千とせと云出した、大「ナニ出だ、そんなら鯉ぶしだな、永「インニヤ河東ぶしだ、鶴「人歌さんの御聲じやア、義太夫がよふござりますよ、人「ナニとんだことをいひなんすよ、大「おらんあげやせふ、住「ちつとあげ申せふ、大「此盃を押へるとは、おいらんくどふ新造のふ、住「わら「わたくしは此間から、酒はどくだて、ざんすものウ、大「何でも此酒をのむと、のどをツ、切るやふだ、悪酒たれがためにか雄なる、この、廓のげいしやも、去年の暮から正月までは、からだに持あつかつたろふ、やう／＼と此正月の十八日に、爰も兩國も假宅の御面ねがひがさがつて、たれこめしすたれを引つたりの、あざやかに見世をはる、十九日の日から藝者が、うるや／＼と出て來て、漸く樓上に三絃の聲を發した、夫からはるか後に、兩國とこつちと兩方へ見番が出來た、ナントかふいふ事まで知つて居らアす、アレ此向ふへ、かやば町の樂庵がこして來やした、樂が跡へは七町が來ておりやす、ナントかふいふ事まで知つていらアす、と口をきく内、女「耶、せんしせへ、とむしや、永「アノ先生々々とよぶは何んだ、大「アリヤ

ア仙子さんよぶのさ、此内へは常住来ておりやす、
 仙子といふ醫者ぼうずさ、何の事はねへ、島八やつ
 こがぼうずになつたといふ身で、よし原でも爰でも、
 二かい中をあるいて、よくのむおしやうさ、承てう
 ど先生とよぶやふに聞へるネ、大「なか〜、難」大橋
 さん、又おあいをなすつて下されまし、大「是さおれ
 がとこへばかり、盃をよこしてくれちやアうらみだ、
 もふのめん〜、のめんのくわんげだ、承「なんと此
 かし通りの水茶屋は、今年はやひじやアねへか、大
 「大きに早ひのさ、いつも五月廿八日から夜見世の
 はじまりだ、所が今年は請負人がねがひで、四月朔
 日からはじまりやした、そこでみんながふんごんで、
 いひ合の杉丸太できれいに、かし通りをすつと新規
 に建やした、ナントかふいふ事迄しつていらアす、
 ちらす所へ、若者来り「ちとあつちらへ御出なされま
 しく口をき、 大「どこだ、若「ハイ新二かいでござります、大「ヲ
 ヲアノ楊弓場か、難「よく茶ばつかりおつしやりイす、
 大「アイわたしやア茶がすきさ、此中も三河島の別荘
 へ茶によばれて、すぐに不動のうしろの温泉へは入
 つたが、どうもいへねへ、夫から歸に藤兵衛にあつ

ての、五十間におりますから、ちつといらつせへな
 ど、よんどころなく丁子屋であすんで来たが、中の
 町も半分の餘出来たの、鶴「はやくあつちらへまいり
 たふござります、大「此四月見世びらきをしたのが、
 七軒のあふみや、山口巴に井筒や、まつや巴やなどは
 はやく出来た、山三玉屋も見世びらきをしたの、河ッ
 だか江戸町は花々しひ、藤八ゑび屋もよつほど出来
 た、承「コウ難次や、その酒をそこへ明けてはならん
 ぞ〜、イヤアなら團扇、大「此團扇の畫はよく書た、承
 「たれた、大「由美庄さ、承「あいつも仲町にいるじぶん
 からしつてゐるが、今は何所にゐるか、大「とうじそ
 うろうの水すめらばといふ身で、らくなからたさ、よ
 く堺町の近所に居やしたが、此中小田原町で見かけ
 た、承「何でもその盃は、あらためてよこしな、難「す
 いぶんあらためます、此御さかづきは、あつちらへま
 いてたべませふ、承「なるほど夫もよかるふ、若「ち
 つとあつちらへ、鶴「サア御出なさいまし、〇わたし
 や傘のせうでさす氣じやけれどサイ〜と、さはぎ
 につれてぞ入りにける、

忽行の謔言

明のからすと鐘つく坊さまと、かぢやの嘉介どんに
 春米やの小介どんに、豆腐やの藤介どんと、トテコと
 なくとりやアにイくいウ、コウレハかアわい、男のや
 ア目をさアますウと、うたひながら来るものは、い
 わねどしれた地廻りの、權「畫みせをそゝるは、十軒
 店へ難を見に行く心もちだせ、入「うさアねへ、權「コウ
 八ヤ、こゝいらの屋敷じやア、つがむなく白粉が
 だろふナア、入「ナゼ、權「假り宅でとんだにぎやかだ
 から、アレみや、そこらぢうの窓から、あねさんたち
 が首ばかり出して、ひかつてゐるせへ、今のう見た
 か、入「アノ格子から顔を出した新ぞうか、權「ウ、入
 「がうてきにぬつたの、白鳥の徳利じやアねへか、權
 「うさアねへ、入「ゆうべ假宅へでもいけばよかつた
 に、とんだとけへいつた、權「どこだおたびか、入「いん
 にや大橋へいつた、權「留よし山しなやか、入「ナニ
 わかたやへいつてナ、お山を買つた、權「あいつはお
 いねへやつだせへ、入「ウ、しつてるよ、何ンでも安く
 されめへと思つてナ、ごうぎに氣ばねをおつてな、て
 うしを合せたら、何がうるさくしての、夜中咄しでね
 かさねへは、いゝごうさらしじやアねへか、うけとる

ものもうけとらねへで、今朝まで起ておるやつさ、
 なしながら、はや江戸町二丁目かしの大〜、入「こゝの内と
 彦右衛門がかりたくの前へくる、是より夜見世、
 笹屋の内じやア、だん〜女郎がふへてくるせへ、ど
 つからかり出したか、權「ウ、サ、爰の新道の角にナ、
 藤といふ茶やをかりていた小松やは、内の子供をみ
 んなほう〜へ邸子に出して、家内はよしはらへこ
 していつたといふこつた、入「なんだかへんな匂ひが
 するせへ、と藁をみて、隣 權「コウアノ花色が二々町と
 いふせへ、の竹の前にて、 權「コウアノ花色が二々町と
 角のむら松や、田村さん〜とよ、 田「アイどなたでおつ
 すへ、どなただへ、ときよる〜と、 ヲヤだまされイした
 よ、と引 權「よせへ、じやうだんをいふな、としかりなが
 高田やと見て、むかふのいづらのまへにしばら 侍「ア、き
 く立つて、夫より松葉や半蔵が内をのぞいて、
 い〜、こゝは又ちがつた物じや、手ぬぐいをかぶりしあ
 くかうしのかたすみにな、 紅梅さん〜、紅、エ、 なんてお
 つすへ、どふぞ袖うらさんをよび申ておくんせへ
 し、紅「アイ袖浦さん、どなたか御目にかゝりイしやう
 と、袖「アイ、さやきて、かうしのそばへ行、しばらくさ 袖「ばか
 らしひ、アハ〜、とわらひながら、しよ 紅「さつきからこ
 こへ来て、立つておりイしたよ、袖うらさんコレ〜

かへ、袖「アイそれでおつす、いやでおつすのふばからしひ、いつそ身ぶるひがしいすよ、と身を、△あんず是はあつちらにおりしときの、地色が尋來たるなる、ふるふ、△あんず尙可尋、權川岸のほうへ出、笹やの内をみて、八や、こつちらのしんぞうをみや、きつい徳次が久米川だせへ、ハ、ハ、八は高麗藏がこわ色、八川岸通りはナゼ見世をはらねへの、權見世をはらねへでも、客があまりほど有るからアす、兩國もこつちらも、大見世はどれも見世を張らねへ、アレ佐介萬字の二かいから、顔を出しているのが辨山といふせへ、こつちらの新が初咲といわア、あいつも徳次といふもんだせ、とむだをいひなに出ている家たい見世、八どふだ引けるか、茶や「何んだ引けるか、引けるの引けねへのと、色事のむしんか車力じやア有るめへし、何ンでも引つばると、小言をいつてどふもならねへ、權假り宅を見物に來たといふだろふ、茶「まだそういへばい、がの、付くなく」といわア、そのはづよ、こじきでも何ンでもかまはずに引ばるはサ、あの又子どもが付ていて引ばるにやア、うるさいのくわじ羽織だアす、權とほうもねへ、川口橋の上からの、是はさかいけの辻はんの引手が一ッばいまちかけてゐて、引ばり鮪にするといふは、こんど

の事だろふ、今も何所のあまだか、丸るびやの男を引ッばつて笑はれるやつさ、何ンの事はねへ、芝居の前を通るやふだ、あて事もねへ、八權や、是からあたけをそ、つて、けへりに猿子橋をそ、ろふ、と大橋さしへ店ものらしき、〇「何ンじややら賑じや、夏はどふもいへんであるふ、〇」とんとゑらひのさ、玉屋の清春といふが、ゑらふうつくしひそうじや、今夜は遊んでいたいナア、〇「イヤよすがよひ、何ンでもこ、へ來て遊ぶと、こたへられぬぞへ、吉はらへいつて遊ぶは、むづかしふは無ひけれど、今までは遠イから、十度に一度いくかいかぬじや、深川へ行てさへアノ通り、心やすくなるとおもしろひもの、こ、へ來たつと、とんとたまらぬぞへ、モさつとどら打ッさかい、みんなどら打たぬやふにするがよいと、あたまのはげた人は、又一寸いふのもこわぬけん、勸善てうの假り宅を、横に三ッ股又かさねて、御げんのふしに大橋や、それまで思ひ桐の箱崎へとぞいそぎ行く、

見出の閨亂井に二尊の談合

隣座敷は此家のお職、姿も派手に芙蓉とて、さとに名高き情しり、客はふかまのしきだんし、如來はけふ

もゐつかけの、小なべだてをめでたてもやふ、如來隣の客はたつしやに口をきくの、はす花「アノやふに口をき、いしたら、ちつとふるふざんすが、五丁さんのやふに願がはづれんせふネ、如「どいつも錢のねへふうだす、あれから床へ行と、みなきつと聲色を遣うせ、花「その癖二度とはまいりせんよ、とたがいに咄の幾瀬はあわた、幾「おいらんへ、とんだこをうざんしたよ、花「何ンでござんすへ、幾「今箱根屋の清左衛門さんが來なんしてネ、そこから這入らつしやると、直に目をまわしなして、びつくりししたよ、花「ほんにか、ソリヤアしやくのせいだよ、頓死とやらじやアねへかのッ、如「何死ぬこつちやアねへ、内へつれて行とぢきになをらア、幾「なをればよふざんすねへ、花「サア火がよくおこりイした、如「ドリヤ銚子をかけやふか、幾「もしへ、アノ橋の下にいけへ事船がおりイすが、アリヤア何ンでござんすねへ、花「まだしんなんせんか、アリヤア網だヨ、如「ナニ阿彌陀、とびつく、花「アイ替網だといふ事でおざんさアなア、夫に網だといつたら、アノマア仰山な顔わいなア、如來「此餅はどふするの、花「とんだらちがあきイせんねへ、といふ所へ

もちぐわしをどんぶりへ、茶屋「こんでおりました、い、やつと持つてまいりました、如「あんまりおそひから、酒にするつもりだ、時に玉子を持つて來たか、茶「へイ生でござります、とたもとから玉子、如「よし、まづ玉子酒にあり付た、花「わたくしに一ッ焼ておくんなんし、如「ナニやいてくれる、花「アイ、如「ハア焼てくわふとおもて、これもものに爛鍋で、と云ひながら火鉢の火へ玉子を二つくべ、もつて、如「ナンダあげ巻焼に錦梅か、下があら打だんだな、茶「是が中洲の名物でござります、まだかさ、ぎ焼と申もござります、エ、ハ、ハ、如「こんどはよし町のはやし屋の餅ぐわしを取よせやふ、茶「モウ何も御用はござりませんか、如「なしなし、茶「へい左やふなら、如「ウ、あしたはゑへせへ、茶「かしこまりましてござります、と茶やは、如「幾世さんたべな、幾「アイ、如來さんアノね、此河岸通りへ越して參イした、假り宅の家名をみんなしつて御出なんすかへ、如「しらねへてどふする物か、みんなしつてゐやす、幾「そんならこ、で、どうぞいつておきかせなんし、如「どうさもねへ事ッた、川岸通りばかりだにや、したが只いつちやアおもしろくねへ、すこしひね

つて申やせふ、まづ地廻りと色事のあて名を、佐介萬字屋の格子に立つて、こつそりとしづか玉屋にはなすのは、てつきり間夫に大笹や、抱て子の日の小松屋も、いつ太田やらしらの扇屋、客は見ぬふり大やふに、やつぱりすて、岡本屋、君がためとて若菜屋の、菜たねに長七伊勢屋なら、しらすしられぬ中萬字屋、きのふ京屋のなじみにて、色で近江屋大かな屋の、心はきついやぼてんの、めつぼう彌八玉屋なる、兎角山口きくゆへに、いつでもふられ俵屋の、ふり出されてははづ河岸の、大こくやたら大よいは、ささやすぎてのねぢ上戸、かほはまつかにゆでたての、丸海老やかや赤蔦屋、伊勢六武藏屋大三屋、大文字屋に越せんや、萬壽屋萬字屋二文字屋、河内屋巴屋大黒や、おぼへし家名あら枡や、かくの通りでござせう、幾、よくおぼへて御出なんすねへ、花、とんだおもしろふおつしたよ、如、まだ、こんなこつちやアねへ、うろろう賣をいつて聞かせてへの、したが一目土堤でいつたからよしにせふ、幾、姉女郎へ、こ、じやアよくおよられんせふね、花、アイおもて座敷じやア、朝寐がなりイせんよ、如、ナゼ、花、イ、エ、寐ている

所へ朝日が、如、エ、とびつく、花、ナゼ、朝日といつた迎、そんなにびつくりしなんすへ、如、サア今びつくりしたのは、花、何んでさんすへ、如、何よヲ、それぞれ朝日と云つたから、もふ夜が明けたかと思つてそこで、花、今のやふに、如、びつくりしたのさ、花、アノおまへさんが、如、へ、花、フ、、如、へ、花、フ、、兩人、ハ、ハ、ハ、ハ、如、いけへたわけな、幾、何をい、なんすのだへばからしい、いつそ芝居のやふでさんすよ、は、花、ちつといつて参りいせふ、如、イ、はな、もつとはなしねへ、幾、客人を歸してめへりイしやう、如、「よく寐ているだらう、うつちやつておぐがい、幾「いつそすかねへ客人でさんす、如、ホイ是はしたり、酒が熱燗じやうじうとなつたは、と何心なくてうしをら、さいせんくべたる火鉢の玉子、如來がひたひへばつちとはれれば、如來はびつくりぎやうてんなし、持たるてうしを取おとせば、酒はこぼれて火鉢の中へ、ばつとなつたるくろげむり、座しきは一面めん灰だらけ、時にふしぎや如來が身より、光明赫奕として異香四方にくんじ、すつくとたつて爪はじき、手足網漫皮膚細滑、如、ヤア、凡女たしかに聞ケ、我は、是新町の丸屋甚右衛門方に安置なす、朝日如來の尊像也、我はからずも蟹の所へ行し猿のごとく、鶏卵の爲に白毫をやけどなし、思

はず姿をあらはしたり、汝等に見ること益と十夜ばかりにして、常におがまれたる事無ければ、おれが顔をみしらぬもつとも、華嚴阿含放蕩者、かりに姿を化城の本尊、浮圖此所へ來りしも、ふかひやうすが刈毛、一ッ切京町一丁め、般若真行かきのみす、大文字やの芙蓉は、とりもなをさす蓮花といふ名にほれて、一度も南無阿彌陀佛といふ人の、蓮のうへにのぼらぬはなし、蓮の上へのらんとて、通ふも煩惱則菩提、池中蓮花大如車輪と、阿みだ經にも出たるなり、わきて女は五障三従の罪業ふかき身と生れ、殊にためしすくなき川中の流の身は、あしたに鳥鐘をうらみ、色男と別れをおしむ、是を佛法にては愛別離苦といひ、わけのわるひいやな客にあふを、怨憎會苦と云、かるがゆへに朝暮苦界のたへがたく、てれん手管を心がけ、書のめす事をもつばらと、客と色とにくつたくなし、欠伸をしてもねんぶつを、となふる事も氣も付かず、邪道にしづむ群類を、救はん爲に來りたり、就中此度中洲の假宅こそ、又いにしへにかへる浪の、水邊に遊女のすまひなす事、いたつて古風にしてその謂なきにしもあらず、そのかみ遊女のはじ

まりは、唐土にて楓橋漢水のほとり、日本にては江口神崎はりまの無漏、有漏々々船の伽やろふ、夏はひとしほいにしへを、爰にうつして江口の君の、川逍遙の月の夜舟を、三つ股のゑにしに夜ると晝となく、心は通上下往來船と作りたる、その源の順も、野暮にはあらぬ大通を、むかしは水と呼たるは、此いわれとぞしられたり、水にもとづく陰陽の、妹背の道をひさぐなる、戀と情のまん中洲、その中央の假宅は、大文字やじや無いかいな、ナント精舎アねへかいナア、花「その又期日の如來さんが、肴をおあがりなんしても、大事おざいせんかへ、如、おつとそこにおよさいは中洲々々、おれが魚るいを喰し事は、毛志之助が小刀を吞にひとしく、たべたやふに見せかけて、みんなうしろの掃だめへ捨、一休もどきにやせたるいぬの、腹をこやすの觀音は、佛の内での通りもの、みな圓通と稱美なす、花、野暮は夜みせを見佛聞法、如、扱地廻りは悪口兩舌、花、口舌のもつれ千話のはて、如、けいせいに妄語あり、花、客に綺語あり仇月は、如、煩惱の山にかくるれば、擧、權謀扇、實相の月とももるにも、佛體をあらはす上からは、今は何をかつ、むべ

き、夫法花經營噓品に曰、爲求牛車出於火宅、五町の者過半並木町へ、去年霜月末つかたより引移りし所、常だにもげに繁花なるに、所せくまでにぎわひいやまして、燈籠のかわりめにひとしく、群集人の山をなしける所に、ある夜並木の釋迦如來、ひそかに來つて歎じて曰、此度吉原回祿によつて、先例にまかせずらりつと角並木町かり宅にて、めん／＼住居を明渡し、店賃の高金をしよしめうるしのかせぎ取、さしもに清き並木町も、たちまち不淨の土地となんぬ、あまつさへ假宅のために、我旅宿もすでに明なんとはつす、又店立をくわん事のなげかわし、あをぎねがわくは先生の方便をもつて、此邊に假り宅のおらぬやふな、ナントい、讚歎阿彌陀佛はねへかと、相談をしかけられ、少しおれもこまりしが、夫熟惟ば、近年諸所に地ごくおびたしく出來たり、あすこの裏や爰の新道、夜更さよふけ四つ過の、地ごくの沙汰も金次第と、惡鬼羅刹は錢もふけ、俱生神すら貸し夜具をはじめしとはのかに聞く、分けて中洲は地ごくに名高く、越中の立山も、是にはいかで増るべき、抹香臭き地ごくの見番とや、線香の切りもせわしく、店もの

の客は、逢ふて間もなきむかひ酒、何んと性根が焦熱や、登りつめてはあつくなり、おやかた前も大紅蓮、遣ひはたして朋輩の、どらも仕まひは一人して、阿鼻叫喚の地ごくに、墮落なすものその數をしらす、一切衆生皆是吾子、衆生濟度は佛の職分、其職分有ながら、きいた風の鼠の輩、まのふりの小通ども、看地ごくへ落入るを、見ぬふりして居る時は、第一佛の道も立たず、諸佛のおもわく凡夫のそしり、爰を思つて並木の釋迦と一致なし、地ごく退治をおもひ立ち、俄に並木を引はらはす事、去年の師走の十日頃より、折角取付けし格子をはなし、内中をとりかたづけ、十五六日時分まで、みなやね船や樓船に打のり、觀音の市まへに、残らず假宅並木より中洲へ引移りしかば、さばかりおかりし地ごくも忽きへうせて、極樂世界となりたるぞや、最前も箱根屋の清左衛門が來りし時、此家へ入る事あたはずして、悶絶なせしも佛の奇瑞、まつた汝等にあたふべき一品有り、まぢかくよつて是をみよと、懷中より短冊のやふな御札をとり出し給ひ、うや／＼しく御手にもち、賣店貸店造作附、是こそは地ごく退散惡魔降伏の札也、

此札を門戸にはり置かば、地ごくの破滅目前に、どこへか消てなくなる事、朝日の霜のごとく也、かならず蒲の文左衛門の札と思ふべからず、ゆめ／＼疑ふことなかれ、扱こそ屋敷の前通り、四季庵の方へ折廻して、そのころ家毎に此札を張り置しは、かゝるゆゑんとしられたり、此物音に二かい中の女郎はいふにおよばず、内證のものまで残らず、はす花が座しきへ來り、朝日の如來を禮拜なし、なむあみだぶつと同音となふるこゑは、遊行さまの御十念にさも似たり、此内始終沖の家根船の管絃にあはせ、引ばり有つて大でけく、

高尾解脫

大勢の中にはす花は、首をうなだれふしおがみ、一心不亂の有さまは、殊勝にこそは見へにけり、如來は是をこらんじて、ア、ヲ怪しや最前より、はす花が舉動を見る所に、まさしく此世の人にあらじ、まことの姿をあらわすべし、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、南無幽靈頓證菩提と、御聲の下よりも、容姿麗艶たるかんばせも、色青柳の髪をみだし、から紅の襦袢も、皓々然たる白しやうぞく、洗ひ髪にて八朔に、茶

屋へ出たるごとく也、美譽、思ひ出せば萬治のむかし、此川づらにおいて刃にかゝりむなしくなる、さもおそろしき目を三浦屋の、其名も高尾が幽靈也、もとより五體不具にして、佛にはなりがたし、妄執といひ因果といひ、かゝるうき目を三つ股の、底のみくづとなりし身の、そのまゝ三途にしづみはて、紅蓮大紅蓮の水にとぢられて、うかむ世もなきくるしみの、海こそあらめ大川や、見るもうらめし水の面に、てる月なみをかぞふれば、今年でてうど百二十九年にあたりたり、年忌にあらねば此所へ、あらはれ出るに及ばねども、久しぶりにて古郷の、女郎衆のより合ゆへ、うら山しくもなつかしく、閻浮こひしくこのねぬる、朝日の如來ありがたくも、此家へ來臨まします事、とくに夫ぞと知つたる故、彌陀の利益を蒙つて、冥途の苦患をまぬがれんと、扱こそ姿をあらはしたり、あはれ不びんと思し召、佛果を得させたび給へと、すかうのなんだは氷柱のごとく、合掌なしてふしおがむ、如、扱こそ／＼はじめより、かく有らんと思ひし故、わざとそしらぬ體にもてなし、ぞ、汝禿のむかしより、青樓に人となり、あまたの客とつて、その罪おび

たゞしく、娑婆の業因ふかき故、無間のそこに墜罪すべかつしを、如來一ッ宿の功力に引かれ、急ぎ佛所におくらまへ、閻魔も更に見咎まじ、おれが臺座をもつほどに、いさいかまはず極樂へ、すい行の隨求陀羅尼、だら／＼しては那欄間佛がうけやつた、往生安樂うたがひなし、はす「あら有りがたや此世にて、ぼだいの種はうへねども、君が引くべき身とぞなりぬる、今こるねがひたぬと思へば、自故に科もなき、浮世渡平も身をはたし、ともに修羅のくるしみを、今目前に三つ股や、たすけ給へと夕榮の、紅葉に名だゝる女郎の、氣象勢至にくわんせおん、如來はこゝぞとねんじゆをもみ、おんあみりたてゐせいきやらうんそわかの御聲につれ、たちまち佛果を衣裏寶珠、玉にはあらで金色の、花をふらしてその姿、大文字屋が大文字の、火かげとともに消へうせて、西方寺に名をとどめたり、跡に如來はぼうせんと、手もちなければ一時も、はやく此場を立さるの、年並月並節句の仕まひ、切りかけられぬその内に、是までなりやさアらばぞと、ハアトツチン／＼スタ／＼／＼、隣のさはぎに立まざれ、紫の雲に打のりて、こくうにあがらせ給は

ずして、蝸川岸の方へとび去り給ふ、げにありがたき偉力なり、

于時天明九己酉歲甫月二日

内新好戲作

假里擇中洲之華美終

自惚鏡序

松王丸曰、松王が淨玻黎の鏡に懸て、鐵札か金札か、地獄天堂の境と云々、所謂淨玻黎の鏡は、紅毛のスピケル、唐山の火齋鏡、我邦に稱する自惚鏡なる物是なり、其形を寫すや、秦の始皇の懷中せし照膽鏡もそこのけなり、頃日振鷺なるるせ者、仁壽殿前の古事を思ひ出して、此鏡を高く擎げ、遍く北廓の遊里を照し、觀る所の善惡邪正、書して一冊の草紙となす、實に虛靈不昧うそつこなしの洒落本なり、則外題は自惚鏡、作者もちつくり髭撫にて、筆を酉の新板とす、

天明九己酉初春

皆様御ぞんじせ

自序

舟かく夜明に近き堀の蛙も、何にうかれてすだくてふ、待乳山に啼鶯は、咄相手の友なるかも、今や盛んに行る自惚は、此道の大意にして、四方の君立彼鏡を額に照せば、忽色白いひ男、通の氣ならざるはなし、いでや此念を斷、此蠱惑を去ば、傾城之腸をも探りつべく、化粧部屋の鏡となつて、素顔をも分たん事を、

于時立春二日の曙

こゝろ時めきて

振鷺亭戲述

目錄

- 息子株
- 武左
- 色客
- 牽頭醫者
- 俠客

自惚鏡

△松しままつの
みどり

見立つんとせず、またとりしまりて、誠に中座の位あるは、角屋敷もかたむくべし、つき出し一年ほどは、あまり苦勞はなけれど、中の町はさらなり、座敷身じまいのよふす、客のふうぞく迄、まわしやりての氣をつければ、ものごとつゝしみがほに、うわきらしきことならねば、さしてふかき色客といふはなし、また客にはほれず、色男にはなづみやすく、茶屋にてげいしやたいこもちのさわぐ時、口に手をあてわらひながら、われしらす客のひざへ手をかけ、にわかにつしむおもいれなど、娘氣に替る事なけれど、言外にいろけあるはゆだんならず、床はさみしけれど、いわずかたらず、どことやら色けあるは、十分んにきたのとしるべし。

○息子株

黒羽二重の身は、ひろき上着、三ツついにかんとう島の下着、黒うへ田のあわせばかり前さがり、ほどよくこげちやにすこしきんのこぼれ梅のあるかへちよるの帯、せまからすひるからす、みなきれいな事にて、いやみやなく人がらよく、こくふに女郎のほれる出立、つれば

はくがとかいって、さしきもにぎやかにおさまり、まだはあ、ママおはなしなせいといふせりふありて、きせるをひねりながら、しつたじまんのしな、自我、いまろうかて松しまが、どふぞおめいをつれて来てくれろとつて、あるやつだが、しんになつてたのむからの、いゝかびんにいつておいたが、あのきりやうで床がよくつちやあたたらぬ、なんでも大事がおこるだらう、榮次郎「ナニサ、よくあるせりふさ、我」そふじよさいがなけりやあ、まんこうは御あんどだ、したが主によつほどきたといふもんで、ざしきでたしなむよふす、それに顔を見ぬよふに見るをもいれ、染山といふ目つきがあるからめうだ、なんでもあそびも主たちのうちのこつた、先がみへるよふになつちやあ、もふいかねい、とらせし、榮「とき、さきのふはどこへおいでなすつた、我」大わらひさ、さんやのきけいがとこへ、茶のいにいきやして、するがだいのをしやうが初客、わつちがていしゆで、花月がいつべんごせいした、きけいもあじなものすきをする男さ、けいりに玉屋のりやうのめいで、おかねに出やつて、よつぎの明神へめいりやすから、あへべとつてむりにいふから、いつしよにいきやした所が、へんにわるさびのした所で、大にうたせやした、榮「玉

屋といへば、なるほど柳枝はうつくしい、今でのかきぬきでございしよう、我「ふみのぶんしようなどはめうさ、せんでい玉屋は、ないしよのしうちがきたもんで、けいせいしんていがかくべつさ、榮「ぼくがも下座敷へ、ごめいろうのがくはちつとひねりやすね、はなしてゐる所へ、松「みどり」もしへ、主においらんが、ちよつとおいでなんしと、榮「いまいきやしようといつてくりや、我「いゝ子だから、茶を一ツくんできてくりや、なんといつてもむすこかぶだ、急がつくもんだの、榮「つれが自我さんといふもんだから、こわもてにこんな事もございしよう、時にあしたは早くしやしよう、ときせるたばこいれをもつてあうかへで、松「おもてざしきにまち兼たといふかほで、とにつしまぬしやあ、なにをしておいでなんしたへ、こりとな、榮「まだひけめいだから、はなしていやした、松「まな、アヤせにくびになつていゝす、どれおまちなんし、とふりを直し、顔を見なが、榮「これはをはかり、松「ま」どらたばこをすい付てた、ふやられたしか見申たよふだが、どふもおもいだされいせん、榮「ナニこんやはじめて来たものを、ごぞんじのはづがねい、松「ま」うそばつかりいゝなんす、はじめて来なんしたふうだ、榮「うそをつくはきついき

らいき、松「ま」茶ばかりいゝなんすとき、いせんによ、榮「よつほどよつたそうで、せつなくつてならぬい、とらつ、松「ま」あればかりおあがなんんして、主もふかくはおあがなんせんね、榮「おめいをまねて、さかづきだいにばつかりのましていても、つよいいやした、松「ま」ばからしうざんす、折からろうかを通りなら、松「ま」さんおたのしみ、松「ま」ちつとおはいりなんし、〇いつてまいりいしよう、とおく座敷の方へゆく、こふざかつてきたのか、初かいに一座の色男かにて、客のひさしくとかね客をとつたほうばい女郎の、うらやむ詞なり、榮「ごふぎにすきくしてきたわへ、むらぎけはしねいこつた、松「ま」なせそれにおあがなんんした、榮「付ゑいならしかたがねい、松「ま」大かたこんやはつきあいに来たと、いゝなんすこつたらう、榮「つきゑいなら情なしに、しんぞうしゆでもあげやす、それにどふして、茶屋からしめいによこすもんか、ごすいりやうにもしれしおん事とやらさ、松「ま」うれしいねい、まだやつぱりづゝうがしなんすか、くすりをあげいしよう、榮「いんにやもつていやす、とはらばいになり、あんべ、松「ま」これゝその子や、まつのや引、まつの「あいわつちでざんす、松「ま」主にさゆをくんで来てあげもふし

や、そしてこのさとさんの座敷に、ひようご屋の傳さんがいつさじやるから、かの事をおたのみもふしいと、いつてくりや、この間しばらくはなしなく、ふみふみうにしている所へ、かぶるさゆ 榮「おくざしきへいつて、白我さんに、おさみしくばはなしにおいでなんしと、いつてくりや、まつの「なにもふねておしまいなんした、榮「そんならよし、ごころふく、まつの「あい、おやすみなんし、出て、松しま「もふさめなんしたそうで、顔がしろくおなりなんした、榮「まつくろにならねいでしやわせ、松しま「それでもいつそ、ぬしやあきめこまかでざんすよ、榮「おてらしたネ、松しま「そふじやおつせんけれど、榮「そんならどふだネ、松しま「ばからしふざんす、榮「何がね、松しま「しりいしねい、榮「それじやあ、ねつからわかりやせん、松しま「なんともおおいなんし、榮「おめいもふおいくつだ、松しま「わら、「あて、みなんし、榮「そんならこふと、十八さ、松しま「よくあたりいした、ぬしやあ大方、十九かはたちになりなんすだろう、榮「きついもんだ、廿さ、松しま「ひとつましはなんとかい、すね、アノネ、アノ、だまつてい、しよう、榮「それじやあわからねい、なんといふ

御意だね、松しま「あのもふなんぞ、きまりなんした事がざんすか、榮「女房といふよふな事は、まだ早いとつて、うちで不承知さ、松しま「そりやあんまりおとなしくしておいでなんすので、内でもお氣がつきなんせんのだろう、みんなそろつておいでなんすか、榮「そろつてさ、松しま「それではてい、じやあおつせぬねい、兄弟しゆわへ、榮「ひとりもなしさ、どふぞおめいのよふな妹をほしい、松しま「主の妹になりいしていね、榮「わつちが妹にはすぎもんだ、松しま「氣にいらなんすめい、榮「ナニ、もつていねい、松しま「そんなら妹にしておくんなんし、榮「茶にしたもんだ、松しま「あんまりはなしを茶にしなんして、そつちへばかりおよりなんすから、いつそこ、があいてさむふざんす、もつとこつちへおよりなんし、榮「こふかね、松しま「アレサ、どふもきうくつなねよふをなんすよ、と夜着をか、をやいつそつめていおあしだね、榮「のぼせからさ、松しま「にくらしい事をい、なんすと、くすぐりいすよ、榮「まつびらごめんだ、松しま「あれ大な聲をしなんすな、榮「だまつてねやせう、松しま「主ばつかりねなんし、榮「どふしたらお氣にいるね、松しま「エ、

モばからしふざんす、とすこし身をもむ、しほほどほれてしにあじなせり 榮「さくばんのおつかれで、おねむかるふ、お心おきなくげしなりませ、松しま「よくごぞんじだね、こゝろで、いつそやせていなんすねい、と跡はいつまつて、しめやかなるとこのうち、作者もまゆを、そりとしつひそめて筆を捨て、じばらくしてひそく、松しま「もしへ、しんにぬしやあきておくんなんすかへ、榮「つきだされるまでは、くるなとつてもまいるのさ、松しま「そりや主さへ情があつて、きておくんなんすりやあ、どふともしいす、それもこれもるんづくのこつてざんすから、なんぼこつちでおもい、となにかあじなせりふになしても、なせりふになり、あるいはめいり、あるいはうわきのひそく、ばなし「ハイ榮さんも、はや寺々にかれのこへ、茶や男「屏風の外から、ハおむかいに参りました、榮「兵庫屋か、ほんにれんじがあかるくなつた、茶や男「白我さまは、とふにおきておいでなされました、榮「またけふ一日、はらあんべいがへんなこ、ろもちだろう、アツア、とおびを、しまは羽織をきせ、系りなどをなすしうちありて、奥ざしきへゆく、はくがはおもしろくもれいといふ顔で、ふとんのうへに、みすかみでかほをふ、白我「お早い、榮「おねむふごせいしよ、う、我「ナニサ、きれい事さ、松しま「染の井さん、おけいりなんすよ、びつくりしたおも、染の井「お早いね、わつちといへば、いつそよくねいしたよ、我「なんだかふた

りは、おつかれのおすがた、松しま「つ、「主がおいでなんす時、かならずつれ申てきておくんなんし、おたのみ申しすよ、染の井はあんどろの火みすかみへつけて、明て田中の方、たばこをすい付てはくがへだす、れんじをを見ながら、我「い、朝のけしきは、京町は妙だが、蚊とかいるのおほいにやあふさぐ、榮「とんだおそくなつた、サアめいりやしよう、といふがもてたるきぬのぼる今戸のかわらけむは、袖引たばこのわかれかとゆかしく、立のぼる明星は、君がおもかけとのみおきわかる、衣のかに、あもいわれぬこ、ちするも、實わかき「さかり、つかうが、とくもてるが「徳、夕に茶たて盡のねをきいて、部屋すみのまいならぬをかこち、心こ、にあらざるも、むすこがふのありがてへ所なるべし、
そめぎく
かみなどにてしんぞうをあげるとも、またつきあいのときは、ことさらきれいごとにして、ことばづかひをうれしがらせるよふにいふべし、はしたなきあななどは、きつくきろふものなればいふべからず、二かいちうのしんぞうに、何さんはおもしろいきやくじんといわれるれば、ひとしを何事によらず、おもひつかるゝものなり、
○牽頭醫しや
さる新道にひよふとくを羅木といつて、金をこらすといかすとほとんだ功しや、酒とはいかいはじめほどすきにて、うちはずり物のこ

しはり、唐しせんまぜばり、しよたい道ぐは三味せん一てふ、りつばなすい物わんとひるねの木まくら、いつもたばこぼんのうなぎぐしは、夜のうちのあつたやりのことく、かんろばいのまげ物を茶ほうじにしたやつばかり、じ、むさい中にとんだ目たち、くわすひんらく、けふも二日あいのひる寐をおどろかされ、サア、おせうあいはつせいとさそふ水、おともをいたしやしようが、夕も申ばしのお茶ばんで、夜をふかしやしたから、大家にかぎもあづけにくい、などいふせりふあり、りうもんのこいそらいるに、酒をかけたさびのある上着、淺はかたのよじれたおび、黒ちりのちときた羽織、はなしをするとき、じかたとあちな身をすする、これからはおらがせかいたと、さしきのでじんぞうをめぐく、みせ三味せんをしのびこまにて、そめぎく唄「身にかへて、思ふ人にはとをざかり、おもわぬひとのしげく、くるわの里のうきづとめ、しよう事もなきあだまくら、羅木「おはむきな文句だの、しをからによつたにきびといふ聲だ、染ぎく「あいさ、いつそいろづきいしたからさ、木「もふゆだんはならぬいわへ、おしつけつきたしといふ時にやア、さつぱり見ぬ顔だろろうの、染ぎく「しつたかさ、「木」きいるな、「あさをがよふないんらん、げいしやをしらすうかくと、染ぎく「ほんにあさをさんは、どふしなんしたねい、木「むかふ島にいるそふで、せんどあつたつけ、かわい、事をしたは又兵衛だ、染ぎく「それだつとて、女郎しゆの氣にもなつてみなんし、どふも中の町へ顔がたちいすめい、木「それよりやあ、うつくしくつて

どふも玉子やきだ、ちつと口をすはせねい、染ぎく「ばからしふおすよ、エ、モすかねいぞよう引、木「べつかつこふといふ顔をするの、染ぎく「うつちやつておいておくんなんし、アレサ、くすぐつとふおつすよ、ひつこふすにへ、モ、いつそ酒のにはいが、アレサ、しやくにさわりますといへば、木「なにうそをいふやつさ、ざつきてうしをこそとげびぞうをしながら、染ぎく「そんな事をい、なんすと、いつ付てにかいをとめいすにへ、木「げいしやじやあ有めいし、この子もあをつきりひねりの、さつばつなおいらんになるたちだ、染ぎく「その時きやあなんでも、きておくんなんし、木「しれたおん事さ、染ぎく「それでもぬしやあ、しらはの女郎しゆはきらいだとおつせいして、木「いつそんな、もつてねえ事をいふもんだ、染ぎく「ちよ鶴さんをおあげなんした時に、木「あの時はなまこのあぶらげをくつて来て、しゆすのゑりで口をふいたから、ついで口がすべつた、染ぎく「よふおしやべりなんす、豆藏のよふだ、とはらばいなる、折から屏、ちよ鶴「染ぎくさん、ちよづる、あんどん部屋へね、猫が子をうみいして

ね、染ぎく「ほんでおすか、ぼくどつこゑまつた、そんな事をいつてはづそふとおもつて、ちよづる「何さ、ぼんでおさな、ぼく「ねこよりやあ、おめへ立が子をうむしよふをおしへてやろう、染「おやばからしい、ちよづる「羅木さんはふ人じようだよ、きのふのばん、竹村のまへで見かけ申ししたら、見ぬふりをして、二町目のほうへおまがりなんしたよ、サアどこへおいでなんした、サアおつせいし、とくすぐつ、木「おいてい、おいていのがくもんだ、染ぎく「わつちやあいや、はいふきをこぼしなんした、木「チャ大ごつた、ぼうとろゑんのへど、いふもんだ、染ぎく「ちやじやあおつせん、主のすそへもか、りいした、それまあお立なんし、木「むごくしかるの、ドリヤないしよでぐも、ちとはなしてこよふ、染ぎく「てふづなら早くいつておいでなんし、またかどちがいておはいりなんすな、木「あんまのよふにとりあつかふの、とよるけく立つて、ちよ鶴「羅木さんは、いつそ氣がかるふおつすね、染ぎく「なにもふいつそ、よいきつていさな、ちよづる「さつしておくんなんし、わつちといへば、まい日のよふにづ、うがしいすので、いつそじれつとふお

すよ、とひたいの梅ぼしな、内でどうちうさんに、かけてくれさつしやればい、に、染ぎく「わつちらがきやくじんにみておもらひなんし、ちよづる「それにこよいのよふな客人をとりますと、しんにつろうおさあナ、ほんに角力取ね、な付でね、つんばね、みんなかたわもんのうちでおすねい、染ぎく「してあのぼうずもさ、ちよづる「きいすそうだ、もふひけをうちいしたね、おやすみなんし、と出てゆく、入違て、木「染ぎくさんのおざしきは、もふこ、かへ、染ぎく「よふ間違ずに、おあけなんしたね、木「そんなうろていたこつては、しのびのちよん、まくはならねいのさ、ナントちつとひたいをもんで、くれぎかしはきなこ餅か、染ぎく「もんであげいしよう、おや主しやあ、しろいほくろがおすよ、木「ほくろといふ客は、よるねぬきやくだ、染ぎく「ドレとつてあげんしやう、それなみなんし、と口のたのめ、木「こりやあ、封をする時のよふじんさ、染ぎく「口はへりなんせん、木「口からさきへむまられたからさ、ときにあの琴はどこの、染ぎく「わつちらんのざしきでおす、木「ゆうげんなこつた、こつちもちつとうなるるか、と三味せ、染ぎく「あれだまつて

おき、なんし、月夜がらすがなきいすよ、木「うるていこやつさ、あいつもいろのくろいにやあにくまれねい、おれも黒仕立にやあにくまれねい、口ゆへだろ、染きく」それだによつて、だまつてねなんし、わつちもこつちらをむいて、にくまれいせんよふに、だまつてねいしよう、木「これさ、あやまるからこつちをむきな、染きく」なんでも口をきいたほうが、だまつてねつこでおすよ、木「ム、ンい、ンい、ありがてい、とひとりむたないふうち、ふりしんくせなれば、染きくはすやくと寝いきのおと、せけんもひつそとじつまつて、ろうかにしらす入ッのひやうし木カツチカツチ、はやいぎめひやつくころ、湯の望もできず、鼻のつまつたよほけこゑで、染きくがせな、木「まぐろをだいて寐たよふだ、もちつとおきてつきあふきはなしの切口か、さみしくつてならねい、これふりしんせんせい、染きくしちぶく」なんでおす、どふもねむくつてなりいせん、ごしやうでおす、おがみいすからねかしておくんなんし、木「あわれがらせるもんだの、ちよつとはなしがあるよ、染きく」あれさく、くすぐつとふおす、ばからしい、木「ばからしくつてもい、よ、染きくしちい」あつかましぞよふ引、木「ヲ、うれし、

へすみのへ
見立まがきに人しげき時、きよろ／＼として氣をつけ、立たり居たりしてさわぐと見ゆるは、地色あるなり、またつんとしたるに二ッあり、ないしよでしかられたときなどは、なにやらぶにんそうに見へるなり、火ばちなどいぢりて、ものおもし顔なるは、しんにくるしきことあるなり、ある女郎のいへるは、よびたいたおもふ我客ひとりこず、その夜の一座ばかり來たるばんか、なんぞ氣のもめる時は、いかにもつとめられぬものと、余にかたりぬ、

○武ざ
あさきうらの島ぐんないの小袖、黒ちりめん羽織に、ぼたもちほどもんをつけ、もへきのばつち出立、あもん坂でしりをおるし、中の町の兩がわをきよる／＼見て、あつちへばつたり、こつちへばつたりして、しん町でどぶへあしをふんごみ、よふくしあんをきわめて、ひけまいにあるま、武ざ「これわかいもの、アノ本を見ておるてきはどふじや、若もの」へ、分でござります、ぶ「ぶとはげせぬい、わかい者、イエおざしきもちでござります、ぎつくり、ぶ「そんならあのかべの中ほどを、はたらひておくりやれ、若者」おこしの物を、大切そふに兩し、どしきへあがる、おさだまりの如く、若者たばこぼんをなをして、あんどんなどかきたてゆく跡にて、羽織を袖だ、みにして、ばつちを

おき、なんし、月夜がらすがなきいすよ、木「うるていこやつさ、あいつもいろのくろいにやあにくまれねい、おれも黒仕立にやあにくまれねい、口ゆへだろ、染きく」それだによつて、だまつてねなんし、わつちもこつちらをむいて、にくまれいせんよふに、だまつてねいしよう、木「これさ、あやまるからこつちをむきな、染きく」なんでも口をきいたほうが、だまつてねつこでおすよ、木「ム、ンい、ンい、ありがてい、とひとりむたないふうち、ふりしんくせなれば、染きくはすやくと寝いきのおと、せけんもひつそとじつまつて、ろうかにしらす入ッのひやうし木カツチカツチ、はやいぎめひやつくころ、湯の望もできず、鼻のつまつたよほけこゑで、染きくがせな、木「まぐろをだいて寐たよふだ、もちつとおきてつきあふきはなしの切口か、さみしくつてならねい、これふりしんせんせい、染きくしちぶく」なんでおす、どふもねむくつてなりいせん、ごしやうでおす、おがみいすからねかしておくんなんし、木「あわれがらせるもんだの、ちよつとはなしがあるよ、染きく」あれさく、くすぐつとふおす、ばからしい、木「ばからしくつてもい、よ、染きくしちい」あつかましぞよふ引、木「ヲ、うれし、

と、間もなく住のへ来る、こいつはありがた山櫻とおもひのほか、たんとすのうへの硯箱をおるして、あんどろのまへでゆる／＼と文を書、ぶ「御用だんの筋と見うけ申たが、相すんだらちとねのまくはどふじやな、住のへ「まあ寐ておいでなんしい、まじきにしまいりいす、ぶ「君さへそふいふお心なら、千年でも万年でもまつておるじやて、わらで、うたひ」せめてねやもる月だにも、しばしまくらにのこらずして、またひとりねになりぬるぞや引、住のへ「色がやくと一座する、はつ巻、住のへさん、ちよつとこへおいでなんし、住のへ「なんでざんすへ、はつ巻、こへおいでなんし、住のへ「ほんにかへ、はつ巻、いま庄さんがきいたよ、住のへ「ほんにかへ、はつ巻、いしてから、おつぶくるめておいでなんし、住のへ「いまいきいす、うれしいねい、とふみをまきしまひ、どことどつてゆく、奥ざしきは、此うちのおいらん部屋もちと見へて、二つづみかしまじく、す二朱のみ、なつらぬ、ほどなくさわきもしつまりて、や、氣のわるくなるころ、ろうかたばた、武ざまじ兼山の時鳥とたぬき寐入、それにはあらでねすがあぶらをつぎに來たるな、ぶ「これ、れす、ハ、お火でござりますか、ぶ「火でもちやでもないは、身が女郎はどふした、れす「是はお氣のどくでござります、ぶ「イヤ、だいで、女郎がその意をぬ、何やらさ、つばの先へす、

つけたよふに、さわくばかりして、そのうへどこへあそびにいつたか、いまにかげもかたちもつてこぬ、大切の金銀のだして、遊にあしくされては、筋によつてりうけんがならぬ、とくだらぬことをいふ、ねずまじめなかほで、「いくゑにもわたくしが、いよふにいたしましよから、ぶ」そんならおみ、ひとつはたらいてくりやれ、れず「かしこまりました、と出てゆく、武ざ大ふけにふけて、江はながみでかほをあな、住のへ「モシへ、もふねなんしたか、ぶ」主は初會のきやくを、なせにそまつにおしやる、もふかへる、とおびをしめかへし、住のへ「ばからしい、もふ八ッまいでおざんす、そしてあの田町には、いつそわるい狗がい、すとさ、わつちがとこへおいでなんすきやくじんが、せんと足をくいつかれなんしたとさ、ときいてが、ぶ」留るお氣ならとまる氣じやが、おもしろくもあるまいて、住のへ「なせへ、おきにさわりなんした事がありすなら、おゆるしなんし、それともまたかんにんならずば、どふともしなんし、ぶ」どふとつて、これがどふなるもんじや、住のへ「こじよさ見、」なにをそのよふにはらをお立なんす、ばからしい、マアおき、なんし、こふいふことさ、とひざへ手をかけられ、武ざく

んにやり、去年からいつそのぼせておいでなんすきやくじんが、先度はらをたつておかゑりなんしたのさ、それがきいしてね、しまいの事をどふのこふのといす、わつちもこの客人にたのみいせんけりや、ほうばいしゆのまへもわるし、このこつてめうだいはだされず、ついでしきをあけいしたのさ、こんなにうちあけてい、したら、おさげしみなんしようが、もらいもふしいすもいつそお氣のどく、それにどふともして、よびもふしたい氣でい、したおり、こんな事もい、だしにくし、まつてい、したがるふした、また主のはらをたつておくんなんすは、わるふはおもい、せん、とあつかましいことをいつたとおもつて、ぶ「そふのたまいては、この方いこふおそれ入て、住のへ「かんにんしておくんなんすか、ぶ「かんにんしねいでどふするもんじや、とこふにみをも、住のへ「それじやきうくつでとつくりしいせん、まだおはなしもふしいすことがおざんす、それにひつこいきくやじんで、いつそよいきつて、やかましくつてなりんせんから、ちよつと顔を出してきたぶざんすが、よふおざんすか、ぶ「その儀はどふとも、住のへ「そんならちよつといつ

てまいりいしよう、いつそむしいすから、夜着をよして、うへの蒲團をきておいでなんし、寐なんすとききいせんによ、とせわにもならぬことをい、ながら、鼻紙をもつて出てゆく、是は見立なをい、にさせまいためのしん手なり、時うつてにこ顔も、まちたいくのあくびとへんじ、枕もとのわるかみは、君がはだへかときみしく、今やくとまぢかまへれど、うわさうりのおとだにたへて、うらやましくもとなりざしきのむつことに、向ふざしきのいびきの聲、夜はなん時とれんじを見ればさらりとあけてからすがカア、羽織のくるちりめんが、夜明にしたがひ、赤くなるもおかし。

へかめぎく

もらいびきはきれいにやるべし、それもなじもふとおもふ女郎ならば、わかいいもの、い、ださぬうち、こつちからい、だしてやるなどは、情なきものなれば、すこしこだわりて名代をとるべし、此時はせひうらやくそくをすべし、また見立なをしにでる女郎は、あまりこゝろよからぬものなれば、とんだ氣にいつたきみあいをして、詞、さつきわつちがあがる時は、みせにおいでがなかつた、など、いふせりふしかるべし、

○きをい

どふらくものといわれたがるてやい、春さきのこがれが原といふさかやき、茶みちんのめんぢりのあわせに、黒ないこのうらゑりなかけ、こび茶さやのすまわしに、おなじしゆすの袖口、大あられのちりめんのはとへ羽織に、七すじあるもへぎのちよんがけのひも、旦那

場のともれいげりといふ出立、まきせんのせわを請取て、もんぜきめいでこじきにとりまかれて、羽織をだいなしたなど、あくてんをい、ぬき、膳のさいそくをしたり、覗ぶたをあらしたりして、いつばい、ぬき、ざしきもおさまりて、このうちに大あぐら、「若者、こし、たいいまよんどころない、金、客がきたといふ事か、若者、お氣のどくなながら、金、おきやあがれ、いやだよ、てらが太纏のかしらでも、もらうの引のといふこたあ五分でもならぬい、こと、すべによつちやあ、やるめいもんでねい、でい、一チあ的女郎の仕うちが氣にくわねへ、おへねいすつぽかしと見たから、すつぽりはだる、でしてやらあ、今戸やきの姉さんが、しけにあつたといふふうで、つんとしやあがつて、いまになつてくれろもすさまじい、なんでもこゝへ引すつて来やな、わけ道がた、ねいけりやあ、すまねいによ、若者、こんばんの客人が、いたつてわかりませんと申もんでござりますから、どふぞ、と手ぬぐひをひ、金、しよけいでもせつつけいでも、岡場所だとやらねいが、錢になる客に、つとめさせねいもせつしようだ、てめいもしようべいやのわかいもんだ、むりなこともいふめい、すなをに見立なをしてやるべい、若者、これはありがたふござります、もふみせはひけましたから、はたらいてまいりましよ

う、と立てゆき、てうしきかづきをもつて来る、跡からおちやをひいた女郎、ふにとられたといふ顔で、つんとして座にならる、蓋もかへる、若、さよふならおやすみなされませ、ゆくし
 ばらくはなしなく、茶わんで、金、てめいもとんだぶにんそ
 うなもんだ、かわきりのゑんまといふ顔だせい、な
 かなをりに一ツのまねいか、龜きく、このごろはいつそ
 しやくけで、ひつこんでいんしたから、いつすいも
 なりんせん、金へ、こいつも化もんだ、かめぎく、なに
 がへ、金、おれがうでのいのくまのほりものが、くし
 やみをしたから、龜きく、い、かげんにあがなんんし
 たら、ちつと寐なんせんか、金、おれがからだにやあ、
 おきやがれこぼしがとつ、いてるから、めつたに
 寐ることあならねい、龜きく、そりやあこまりなんし
 たもんだねい、それじやあそびに來なんした時、こ
 まりなんすだらう、金、うさあねい、したが氣まぐれ
 なおんなもあるものよ、うみのお筆といふ女郎だの
 の、どこにほれたかごふてきにおれにほれて、よつび
 とねすにつとめるが、ありがていじやあねいかへ、龜
 きく、そのおふでさんとやらと、いろごとをしなんし
 ては、わつちらが内の女郎しゆは、おもしろくもね
 いはづだ、金、女郎しゆも氣がつる、したが町の女

郎しゆは人がらなこつた、おいらが氣ぐれいじやあ、
 さつぱりはじまらねい、龜きく、さつきつれしゆのほ
 りものをみいしたが、こわらしいほどほつていなす
 ねい、金、ナニあいつもおさきなやろうよ、龜きく、い
 ぢのわるい、もちつとそつちへよつておくんなんし、
 金、てめいの店おろしをするじやあねいが、ばかにひ
 よろなげいせいだの、きぬいとろうげいといふも
 んだ、かめぎく、うちやつておいておくんなんし、そん
 なにきにいりなんせん内へ、どふいふ氣でおあが
 なんした、金、げけものやしきだとおもつて、まづこ
 うしをのぞいた所が、てめいのかほが黒くきいろく、
 ほたるのけつのやうに、わるびかりにひかるか、つぎ
 の女郎が、さつまいもがあくびをしたといふ顔か、三
 ばん目が、すりこぎの立おふせうといふ鼻、四ばん
 目が、ちろりといふ口、五ばんめが、どろぼうねこの
 やねわたりといふ身ぶり、六ばんめが、みづぶくれの
 仁といふづうてい、七ばんめが、まだにんげんらし
 いから、あげて見たところが、おへねいかほちやのと
 ふなすだ、べちやあねい、店ざらしの五百羅漢といふ
 みせつきた、かめぎく、とんだぬしやあ、はなしでふづ

だねい、もつとはなしておきかせなんし、金、おきや
 あがれ、こふはいふもの、てめいは、こじきしばい
 のさぎすめのよふで、いつそかわい、よ、龜きく、ぬし
 にかわいがられいしたら、さぞながいきをしいしよ
 う、金、それだによつて、おきてはなさねいか、龜きく
 「あんまりはなすと、夜があけいす、金、あんまりしや
 べつたではらがへつた、べんとうをつかうから、茶
 をひとつはたらいてくれねいか、龜きく、もふみんな
 ねてしまいいした、金、いけずるくむぐくするの、て
 めいも物めいにやあ、ひどいたちだ、とふところから、紙
 いげりのこわめしとたくあんをだして、むしやうくふうち、かめ
 ぎくはすやく寐いる、あんまりこふせいをひねきしゆへ、いまま
 らお、それせす、まちくしてゐる所へ、黒、こほくのおび、八、ま
 をまへでむすび、切びんをなでながら、おきて來るつれの、八、ま
 だおきてゐるか、金、女郎はどふした、八、大わらいだ、
 ソレ座敷をいきにしたから、ぐつとのりがきて、のび
 とはつたら、ごふのつきよ、とこへ來ると、かん
 りが石うすにうなされるよふに、うなりだしやあが
 つて、まだどぶさつてけつからあ、へんちきなばん
 だ、金、それ見や、あんまりおとなしくしたもんだか
 ら、おれ迄こんな目にあわせらあ、なんでもあそびや
 あ、あまく見られると、あげさげしやあ大きなちが

だ、しよせんはじまらねへせんぎだ、もふいくべい、
 八、まだまつくらだ、金、氣のよるいやろうだ、女郎と
 いつしよにどぶさつたな、氣のきいたげけものは、あ
 しをあらつてひつこむじぶんだ、とれんじ、い、ちく
 せうだ、見やふつて來たせい、八、これじやあ伊勢屋
 のたてめいも、あさあおへねい、金、そんなことじや
 あねい、あかるくなるとすぶぬれがみとをもねい、
 とおびをしめかへし、きせ、かめぎく、なんだへ、ばからしい、
 けいりなんすか、金、いめいましい、こんな湯かんば
 ゑはじめてきた、と味をでる、龜きく、ふせうぶせうに、ねむそふ
 ばのせいろうつんである中で、道具がおどるほど、金お、客、大な
 もふさまけると、おもてぎしきの客人、ねほけた聲で、
 ちしんだ、女郎、なにねづみだらう、金、べらぼうめ、や
 まあらしのばけもんだは、とどくをい、八、當、かめぎ
 く、久八どん、けえんなんすよ、サア、客人がけいりな
 さるよ、わかいもの返事を二ツ三ツして、まつくらなみ、八、く
 らいものもい、が、たまぞろいだ、金、げけものぞろ
 いがきいてあきれる、かめぎく、この間に、金、だぐ
 るもんだ、とく、かりをカラ、そとに犬がれてゐる、し、金、エ
 エちくしようめ、八、ほうかむり、唄、わたしやかさのし
 ようでさすきじやけれど、おまへげたのしようでは

きなざる、のこくさい、金まちやな、はなをふんぎつた、八うまらねい、悪遊のこくてん、これらのきべくあしたにかみゆひどこのはなしとはなりぬ、

△その巻 そめじ

見立つんとして、すまし顔にうすげしよう、じみななりをこのむなどは、氣性にけんしきありて、色けうすきよふなれど、地色をせず、またよびとげんとおもふ客は、いかにしてもおもふものにて、とかくたて引つよく、ほうばいにもひけをとらず、二かいぢうでこわがられるほどなれば、あまりないしよのまへはよからぬものなり、しよかいにきやくをやすく見るときは、かべるよりかゝり、よふじをつかう事あり、座敷かくのごとくならば、氣をつけべし、

○いろいろさやく

すしそげであいびるうどのゆうきつむぎに、ちいさな鳥八丈の下着、黒羽二重の羽織に、ひらうちもわかいものだといふ氣どり、黒の丸うちひもに、ふところの角のとれた通人、ひさしきいるきやくなりしが、このころうち何かあじになりて、座しきのうちもたがいにつんくとしてしまひ、味もおさまりて、なんでも大いざないふ氣でいる所へ、そのまきかぶる、ためいきをつきながら、來、そめじ「懸李さん、ごしようでおすから、なんぞくすりをおくんなんし、いつそ酒によい、して、せつなくて

ど氣のせめいもんだ、通のつきゑいもするおれだもの、おりふしはなぐさみに、女郎けいもありうちのことつた、その巻「よしておくんなんし、そんな情のねい客人とはおもい、せんで、いま迄よびとげ申したが、李「なんだよびとげた、よびとげたもすさまじひ、コレそふあじにはかなくやすくされちやあ、もふかんしやくの蟲がふせうちだ、よしおれが、二丁目いろいろとができたにしろ、二階ぢうでうらやまれるほどのふたりがなかを、いまさら年あきめいになつて、色じかけで、げいふんにもよばれる義理じやああるめいか、此頃うちの一チ部始終、はくせうをしてしまへ、その巻「そんな事をい、立に、きれてしまふ主のけやうげんかへ、ヲヤこわらしい、李「しれた事よ、うかくしてつきたされちやあ、懸李さんといふお名がすたるは、その巻「そんなにたてひきをしりなんすぬしの氣なら、こねいに苦勞はしいせん、おなじかおかしくさすがつよみもいわれず、李「みれんなことつたが、おれはよつぽどふしあわせなもんだ、いまてめいにいろいろとができて、こんなむまらねい目に、あおふとは夢にもしらず、内にいりやあ子どものもり、さいの河原

なりんせん、とふとんの前懸李「おいらんはなにをしている、そめじ「いまおかんどんと、何かはなしておいでなんした、李「ちつとねるとさめるから、こゝへあがりや、またばけものばなしをしてきかそうか、そめじ「しかられいす、とい、ながらひぎにもたれてすやく、ねいたおもその巻「所へだまつてびやうぶをあげ、つんといいで、その巻「そめじ「やあねいか、だがゆるしてここに、ヲヤ酒をのんだの、そめじ「それだつて、三つ山さんのきやくじんが、むりにのめとおつせいしたから、そのまき「そのなりやあなんのことつた、モヲとつくに引をうつたによ、そめじは出てゆく、しばらくはばん、うたはし「おいらん、ちつとすいりをおかしなんし、そのまき「またいつものよふに、やりばなしにしなんすときいせん、きつともつて來ておきなんし、うたはし「あい、とちがいだなの懸李さん、おやすみなんし、と出て、硯箱をとりて、ゆく、李「かわいそふに、とがもねいかぶるをしかつたり、八ッあたりをするてまで、いふ事があるならきつぱりいへ、その巻「なんだへばからしい、なにも主が、はらをたてなんすことはおつせん、あらほど文をつかわしいしたに、それにやつぱり、二丁目へおいでなんしたじやおつせんか、李「てめいもよつぽ

のばん太郎じやあねいが、しめしのせわや何やかや、じみな仕うちをするうちも、こつちの事が氣にかゝり、それにてめいの年々あきが、もふおし付たとおもやあ、女房の顔がふびんに見へ、こん夜あい着をしわにして、あした女房のつんくを、しかるたねのわるだくみも、みんなてめいゆへだ、コヲのろい句をばくからは、覺悟をして口をきけ、もふこの世のいとまごいだぞ、その巻「そふおもひなんすは、みんな主のまわり氣でおす、あんまりうたがいぶこぶおさへすにへ、と涙、李「うたがわねいでどふするもんだ、アノやろうが旅人といふもんで、やきまつたけまで、かんざしでくひやつたなかだものを、その巻「モ、そんなことをおつせいな、こん夜のこととはこれぎりにして、あやまりいすから、やつぱりどふぞよんでおくんなんし、李「おもいつきでもねい、てめい立のびいびいながら、にやあ、もつていねいばちがあたるぞよ、その巻「それだによつて、あやまりいしたともふし、いすに、まあこちをおむきなんし、これさく、じれつれたふすにへ、李「いまさらそつちがむかれるものか、その巻「よふおす、そんならこふしいす、とうへ、ありのり

なからい、李「なんだか氣のちがつた蕙のよふに、からみまわつていふから、ついはらをた、した、大にうつた、時にすこちやずりていの、その巻、まあまちなんし、李「こふなつてうちとけて見れば、たゑいもねいこつた、丸三年のうち、二度迄二階へきさんをしたなかだものを、義理もげいぶんも、いつたなかじやあねい、その巻「ほんにあくるんでおつしようよ、これも主がせうわるから、おこつたことさ、李「せうわるにはだがした、その巻「二丁目の女郎しゆが、李「おきやあがれ、折から七のひやうし木、かつちくとうつてまわれば、早きこへ、ひより下駄の音高く、たてくわへのはなし、けいりが中の町へふ入りよのてやいのかへりて見へ、とんだい、こへでくぜつ鶏をうなりながらのき、江戸アシ「はるの夜を、夢ばかりとのうらみより、うき世のゆめのみじかさを、かりねのゆめにうつしかへ、わかれになればいふことも、わすれてあとのものおもひ、李「ありがてい、

見かへりの柳におく露は、くぜつの涙かとうたがわれ、日本堤の蟲の音も、夜明をおしみてすたかも、これがために幾萬人が、すいもあまいも諸事承知、萬事わからぬ客人たちも、うねほれにくらまされ、つまらぬことに落人も、あへて愚成にもあらず、了簡のなにもあらず、石上ふるに色男あり、ほれるに無男あり、死ぬほどのほせて、色仕かけてよぶかとおもへば、たちまちつき出し、また客のために身をうつ女郎有、客もまたあ、同じ、そふかとおもへば、つきだしから、年々のあくまでかよひとけついに女房とするもあり、實なにかどふ

自惚鏡終

たかわからぬとは、京傳子が文章の妙なり、うそかまことかうわ氣がみへか、此さとのいろごと千變萬化してうつりやすき事、たとへば夏が冬、冬が夏とおしうつるがごとし、

振鷺亭戲著

跋

余友振鷺亭の主、一ツの鏡を作る、鏡とはなんぞや、お備にあらず、酒樽の蓋にもあらずして、乃この自惚鏡なり、吁之が徳たる、居ながら章臺の趣を移す、實に洒落本の天下第一を以て、四日市の南總館にあたふ、跋せよと乞ふにまかせて、龜の面へ水鏡、安忍もしるす事しかり、
重候多藏題

先生常に云、娼家にて仰ぎ敬ふべきは自惚なり、夫人に己惚なくんば、誰か千里を遠しとせずして、遊里へ赴んやと、宜哉此言、また川柳點に、客の己惚は遊女の後楯と、これ又己惚の尊ふときを譽ての句なり、通に至らんといふもの、此小冊を枕とし、眼をさらし、己惚の己惚たる干要を知らば、大通にいたらん事、三挺立にて堀へいたるよりも、豈早からざらんや、
天明九のとし己酉孟春 諸譯不知人述

青樓畫の世界錦之裏 自序

一日書肆蔦唐丸來て曰、例の小冊案じはありやなしやと、予答て曰、まだある〜と、素癡の道念みる様に、安請合にうけがひてと執筆た所が、無ものは錢金とよい思案也、蓋妄作の茶表紙も、年々歳々穴相似て、歳々年々趣向新しからざれば、一ツぐつと捻てみた、青樓の●の世界、夜の景色の花美とはうつつ變た案じの小冊、此奴は一ツ新織ならめと、其儘錦の裏と題す而已、

觀琉球人入江戶日

山東 菊京傳撰

附言

宋玉は好色の賦を作りて色情を戒、紫氏は五十四帖に艶言を述て色慾を戒む、是皆佛の譬諭方便と異なることなし、予屢妄の著述をなし、嬉蕩を傳ふるに似たれども、必其戒を忘れず、喜怒哀樂の人情を述て、勸善懲惡の微意あり、邇く諭をとらば、幼童を賺し戒るに、錫を以し灸を以てするが如し、則錫は譬諭方便なり、則灸は仁義五常なり、然れば此小冊に、教訓の二字を冠しむること、所以なきといふべからざるか、視人宜察也、

青樓畫の世界錦之裏

山東京傳戲作

五車烏ガア〜、晨鐘ボフウ〜、商人の聲油あげ〜、夫神靈矢口渡道行の文句曰、ならふことなら夜の明ぬ、國に生れていつまでもと云々、是戀々の常情を、よくいひかなへし妙言なり、浦島が珠匣、硝子の椀皿にはあらねど、明けてくやしきさぬ〜の、其情あれば昔から、詩歌、連俳、淨瑠璃、小唄、談義、説法、夜講釋、川施餓鬼でなければ、廬船へ乗つた事なき老仁、日蓮記で無ければ、操芝居も見た事なき姥に至るまで、唐の和の千萬人、口のすくなら程いひつくして、今さらいふも愚癡なれど、花炮家と娼家には畫といふもの世の中に、絶てしなくもすむものなり、

爰昔後一條御宇、攝州河邊郡神崎之廓、吉田屋喜左衛門云有二妓家、

それが二階の朝景色、杯盤狼藉、廊下には懸盤に杯

臺、茶臺のうへに茶碗をのせ、さも居合ぬきの踏臺のごとく、傍には輪切の乳柑の皮の下に、杉箸の折二本、月に霞はどでござんと、云ふかたちにして、有、紙くすは物日の浴室の三方のごとく重ね、上草履は、女護の島の入口にひとしくならべ、小便所の嘔吐は、落花のごとくちり、假母室の火鉢は、螢火ほどにのこり、梯の下には文をならべ、門に鹽をもち、雛妓の鬢差逆に翻り、了鬢の前髪横に亂れ、長く寐短く臥し、昨夜の西施は今朝の無鹽、鼻のうす痘瘡首莖の疵、あくるわびしきかつらぎの、かみの毛のうすきまであらはにみへ、お座のさめたる其中にて、此吉田屋のお職にて、おのおいらん夕霧と聞へしは、神崎の全盛にて、木地から磨た面屋の木偶、夜光珠の畫見ても、光りのうせぬすがたなり、朝がへりの客を茶屋まで送てかへりしとみへ、夕ぎりヲ、つめた、とはしごを上袖新造「それ、さむそうなりにて、あたまのしらがもとゆひのさき、両ほうを紙にていはえ、おらんの中おりの駒下駄と、自分のけたをさげ」ヲヤもふそふじがきたさふだ、いつそ匂ふよ、廊下にはれすばん多くの行燈、夕「起介どん、ソレ足から血が出るよ、どふした、れす」臺のもの、松の釘で、ふみぬきをいたしました、夕「ヲヤあぶねへ、と座へはいり、しがみ火

鉢にかけてありしあかぬくさいさやを一口の「コレそらねさ
んでみてこぼし、火はちの中をかきならして、
ん、下におきができたらう、ちつともつてきな、そら
「アイ、と下へゆく、夕あたりを見廻し、次の間、「さぞ氣づま
りでおざりんしやう、こいふ所へ、やりての聲する故、びつ
やりて、「おいらん、お早うござります、夕は戸棚へ身をよ
いて、「見なんし、い、天氣でおざんすねへ、やり「何さ、
くもつておりますもの、きのふはモウ大にくたびれ
ましたよ、夕やうく、「ホンニ堀の内さんは、にぎや
かでおざんしたかへ、やり「アイ、納手拭はすぐにか
かせて参りましたよ、夕「ソリヤアもふ、おかたじけ
なふおざんした、モシへ、寸間みなんし、夜舟さんの
寐たなりを、やり「ホンニねへ、と、ななを見れば、番頭女郎
過ぎを、かしはもちにして居る、其わきにふりしん、「よぶね、七ッ
じく「あしかのした、みの上へじかにねて、ふとんかぶり枕をばつし
て、死人、やり「此子たちもなりばかり大きくつて、客
人に出ると云へばいやがるし、こまつたものでござ
ります、夕「さつきからわからぬ寐言を云つてゐ、す
はな、やり「馬鹿らしいねへ、と云ふ所へ「それ、火を入
しく、新たち大勢さや、客「しづかにしてくれ、げへぶん
がわるい、留袖の新「氣がちがつたさふさ、てんくが

わりい事をしなんして、人の知つた事のやうに、客
「きのぼせがするはへ、ふりしん「わたしらはぬしのお
かげで、くらいうちからひへかたまりいたは、戀か
せ、「い、むしだア、ぬしがはじめなんしたらう、と口々に
廊下を引て行く、新たちはこれなぐさみ半分なり、きやくはくもの
巢にか、つたとんぼうの様に、大きななりをして智恵もなく、頭巾
はよこちよにおちか、りの、るきなりにておく二かい、「ぐち里が
ざしきへ入れられる、このときの時計五ッ時、かくて仕着のふ
やうに、新造とりまきむだをいつてちやうす、そで「たばこも
なりんせん、なべ「今にぼうさんにしてあげ申す、
戀「ぬしをぼうさんにしたら、どんなだらうノウ、そで
「しうくだのぼうさんに似てきなんすたらう、なべ
「どうかもう氣のせいにか、ぼうさんじみてきさした
よ、そで「ホンニねへ、そで「茶もにくうおざんす、こん
ぢうのれんをはづしてきた時、なべ「あんなに口びろ
い事をいつてノウ、戀「マア此町をとめてやりイすが
い、のサ、なべ「戀かせさん、竹村のめへ、ひきずり
をぬぎ捨てきたから、とつてきなんしよ、むだ夕さ
んはどうしたの、戀「あの子は二丁めのどぶへふんご
みイして、下で足をあらつて居なんす、ぬしはわた
くしをひつかきなんした、ちよつとみなんし、血がで
んすは、そで「わたくしが袖をおやぶなんすし、又お

針衆に小言をいはれんすは、とすきなことを云つて居る、客
る所へ、威儀どくとして「ばからしい、おめへがたアし
おいらん「ぐち里「來り、
づかになんしへ、どうでよび申さねへ客人だから、こ
つちのりやうけんの通りにするまでは、ぶしつけが
有ちやわるふおざんす、と是よりむづかしくなる、茶屋もい
夜具、安くて着物ぐらゐのいたみと見へるなり、此となりの部屋持
の女郎、今起きたと見へ、かみむかつかつておがいつかつて居る所
へ、かぶる「つなじ「下より起て来る、仕着せ布子のよこれ黒光りに
ひかるやつに、板締ののるまいるになつた細帯を締め、目をこすり
すり、寐ほした、車井「つなじか、つな「アイ、車「い、處へ來
た、たばこを吸付てくりや、つな「アイ、とまだ此ざしきに
やりて部屋から吸、車「エ、モべらぼうらしい、火がきへ
付て來て出す、
たは、ときせるでた、く所へ、「モシおいらん、蛙聲様がお
たばこ入をお忘れなかつたさうでござります、車「床
の中にあるか、見ていつてくだせへ、男「ハイ、とさが
「爰にござりました、車「まだこんたの内に居さつし
やるか、男「左様でござります、とまたいそぎゆく所へ、「モ
シおいらん、御文をお出しなされまし、車「けふは人
がいくか、女「つかはします、車「そんならちつとまつ
てくだせへナ、コレこんたのこの、いつもの瓜の
香々はもうねへか、女「まだござります、上へましや

うか、車「そんなら文を書うち、持て來てくだせへ、後
生だ、扱下には、地をかきにして文字をあいて、吉田屋と筆太に
壺には、かむろがなをさうに腰をかけ、きんかんのほうぎきもちあ
そびにしながら、髪をいつてもらつて居る、もつともかぶるのかみ
が、男の髪結、かみゆひ吉平「コレじつとして居ねへか、手
めへのやうにいぐくものはねへ、そばにまつて「吉平ど
ん、おれはモウ奴島田はよして、針うちにいづつて
だせへ、おいらんがさういはしつた、今一人の「あのつ
ぎはおれだよ、今一人の「あつかましい、何ささまなも
のか、おれが先へ來たは、吉「此子どもいらア、ようめへ
朝「い、がみやふ、ちつとしづかにしねへか、又「こちら
は、山のしゆくから来る出入の肴屋、はん壺を持、みならへ、そばに
は、うはりやうり番の「文介「か、るさんをはき立つて居る、下料理番の
「源七「も居る、大黒はしらのきは、上りはなには、さかなや「コリ
亭主「喜左衛門「煙管の先でさしづして居る、
ヤおめへさん、い、鱈でござります、生麥でなくツチ
やアこんな丈長はとれません、喜「文助吸物肴はそれ
でい、か、文「ハイ、此生貝は皆女貝だノウ、こいつア
い地鮮だ、さかなや「い、魚でござります、源「だんなさ
ん、生海鼠もちつとおとんなさりまし、さかなや「此海
鼠は榎堂でござります、文「車をもちつと入レさつせ
へ、喜「なせ魚がありながら、そねへに高いノウ、さかな

ヤ「しげのあびくでござりますから、やすくござりますせん、かくて時計四ツ時、二階夕きりが座敷には、新造みなく起あはれる、ばんと川竹は、むらさきの中がた小もんの七ツ半頃の袖を着、黒こはくの平ぐけ、くるちりめんあつてもやうの、こいとも少しきたへた小袖をうちかけ、あたまには、けさおきて髪のみだれをかきあげたま、すぐにさしたとみへる、つげのくしをちよいとつちこそうにさしてゐる、これはこの二階の新ぞうがしらにて、よほどさかたかたなり、しかし年のあくるもちかければ、骸骨のすて所に、まごつかぬやうにしなと、云ひたき風の女郎なり、ふり袖あじかの「よぶね」皆あひびらうどの、油やのぞうきんのやうなぬのこ細帯、ふりはまつくる、おしろい所々に雪のさへのこりたる如し、「夕きり」は無心をいつてやつた客のところから来た返事の文をよんでゐる、川竹「しんさうじなしかけ、ほうきを持てうじろからのぞい」此所の二人がすがた、さよよぶね「ゆふべ見へなんだかるたが、夜着の袖からでんしたよ、夕」それみなんし、川「おめへがたアきりく湯へはいて来て、床の間やれんじをふきなよ、何もかもごみだらけになつてゐるは、いつでもあすこらがくさらしいよ、ひながら、しかみのはいのかたまひる、出し文がら引川「雪のさき、火鉢のふちをふいて居る所へ、かぶる雪の来るや、湯にだれが居るかみてきや、雪「今見てめへりいした、そとの人はだれもおりにせん、川「おいらん、お出なんせんかへ、夕「わたしはもちつとして參んじやう、ちつと今かんがへて居ることがおざんす、川「コレあじかのさん、わつちアが湯へいつて来るうち、おいらんの膳もわつちが膳もしておこうし、お茶もわか

しておかうかし、それからアノ、まあくそれをきりきりしなんしへ、雪のや、ぬかをいれてゆかたを持つてあゆびや、そしてからアノほうくへいつて、書付をとつて来や、早くしや、うちがあかねへときかねへ、おいらんがあんまり氣をよくしやるから、みんならずくつてなるもんじやアねへ、頭註、かきつけと云ふ事、このわけは、後編四十八手に細し、依面といひすて湯へゆく、湯へゆくとき、つとの所こゝに譯を書き、へつげのくしをさかさにさすは、髪のかせを直すためなり、○そのあとへ小まもの屋、あたまへかんざしを二三本さし、荷をかたにかけて来り、座敷をのぞき見て、小間物まへさして居たつたのつ「おいらんへ、此弁はこんだ挽せやしたが、とんだ甲がい、から、取てをきなされませんか、とみせる、夕とつ「ホンニこりあい、よ、死ぬほどほしいが、今はちつと相談ができませんから、あした迄うれずに居たら、持てお出なんし、小間物「アイ、左様ならもし今日中にうれずば、あしたもつて參りましやう、おめへさんのきにいらねへとおつしやつた方の、しのぎをこつちへつかはさると、やすく上られます、夕「ソリヤアどふともしんしやう、といふ所からか「わたしが此ぢうのかうがい、うきがでんした、小間物「なほして上ぐましやう、所へおく二階より、部屋持の女郎来り、あ

だ崎「モシへ、此櫛をついできておくんなんしな、どうぞ早くおたのん申すよ、小間物「かしこまりました、といふは、こいつゆふべいとおとこくぜつして、「ふりし」指の折られたくしの死がいとみへるなり、所へまた、ん「来り、指の輪はまだできんせんかへ、小間物「あすはできます、紋所はとをひよくだつね、しん「これさ、しづかに云つておくんなんしな、馬鹿らしい、とはづかしがるも、しんぞうのせい、いづばいのたのし、小間物「ちよつと浮里さんの所へいかねばみならぬ、しん「浮さとさんのところには、たしか居つつけが有よ、小間物「ホイ、とおくの方へゆく、○夕「がさしきには、此うちふりしん簞箱とまき原の八寸を出し、茶漬茶碗をならべる、火鉢にかゝりし土びん、ゆはチンく、とわく、そばには湖月抄の本の上へ、茶をのせておき、たばこぼんの引出しを引出しておき、川「コレゆきのや、おれがくし箱のたばこ入にしておき、鎖のおりる引出しに金があるから、二朱持つていつて、おあしをかつてきや、鍵は用だんすの引出しにあるぞよ、雪「アイ、と用だんす引出し、あいた、と指をなへ指をたてつけ、「こゝにやア鍵はおざりせんよ、川「エ、うそくしめへ、手めへゆふべいれたじやアねへか、とかぶるきた、かのきのじやの書付をみて、き「夜舟さん、茶だんすに入たものへしるしをつけて、とりにやる、じやせん豆ととうがらしがあつたらう、こゝへ出しな、夕「貝のはしらを取にやつて、帆立貝でにやうじ

やアおざんせんか、川「とりにやりんしやう、夕「行平鍋はどふしたノウ、川「だれかとふにわつてしまひんした、あじかのさん、今朝の總ざいはなんだ、あじか「たしか芋に油揚げでござりイす、川「おそれるね、夕「あやまりいす、たいてい、食のこのみをして、やうく朝まんまを草二三ぶくのんですぐにゆへゆく、かぶるはゆかたを、きのふのひ持つて行、そのあとへ田まちのこふくや「来り、きのふのひな形は、お氣に入りましたか、川「いつそようおざりイす、あれにきめんしやう、こふく「むくはやつぱり、川「ともむくにしておくんなんし、そしてこんどは、禿物の丈をもちつとながくしておくんなんしへ、こふく「かしこまりました、とゆ川「モシ、とよび序にわつちがはきかけ、頭註、はきかけとはすまはし、此里に限りし言葉也、にするきれを、なんぞみつくるつておくんなんし、コウト、そして紫鹿子のゑりを、一トからげよくしておくんなんし、こふく「かしこまりました、といふかふる「八十兵衛さんへ、おいらんがちよつとお出なんしッサ、こふく「手めへはどこの子だ、川「車井さんの所の子サ、とこふくは奥へゆく、夕「はほどなく、き、なんしたかへ、湯から上り、浴衣で顔ふきく来り、き、なんしたかへ、ぐち里さんの客人は、つかまつて来なんしたさうだ

ね、川「さうでござりイすとさ、ちよつたアすみんすめへ、夜舟さん、身ごしらへをするやうに、何かを出しなんし、夕、あじかのさん、髪ゆひのお吉さんが二階へきちやアいねへか、見てきてくんなんし、お針部屋もみてきなんしよ、もしまだござア、中郎の人をたのんで、呼にやつてくんなんし

中郎と云は、内所の小づかひをする下男の事なり、是も此里にかぎりた 川「雪のや、おはぐろをとつて来て、それから楓屋のかよひをもつていつて、板を一本とゑりつくと、くことすきと黒元結をとつてきや、ついでにわる紙とたばこも、とつてきや、夜舟さん、筆楊枝を出しな、云ひつける、筆やうじとは、おはぐろの筆の事なり、と云はんぞうなそとりそるへる、ほどなく「雪」はおはぐろをかつてきて、火鉢へおせておく、夕「川」はんさうかひの上へおせ、まつ筆やうじを火鉢の中に入れてかきまはし、かみみむかひかねをつける。〇むかふさじきには、床の間の上に盃を下締でしばつてのせてある、これまち人の願なるべし、とめ袖のし 花歌「モシへ、どうしてやりんしやうねへ、はらがたつてくやしくつてはりさけイす、おいらん「板琴」めしつぶだらけなす心にかいて、それだつてもおめへ、手しやうもみねへ、事がなんと云はれるものか、胸でおさめてゐて、氣をつけなんしな、花、なんでもわつちがすいりやうにち

がひおざんせん、ゆふべのやうすが、さふでおざりイすもの、といふは、客が外の女郎とのいる事を、けどつたとみへるなり所へふりしんかうくかへいつてかへり、ふり袖をはたきながら来り、「花」がのんでおいたきせるの、げび川「まださめぬやげぎせるの上へ、うつかりと手をつき、げび川「ヲアアツ、さわりむし、花、そ、つかしい子だヨ、げび「わたくしは、月水蟲がかぶつてなりイせん、モシへ、今身のうへを見てもらいんしたかね、わるい星にあたつておりイすツサ、どふしやうノウ、いつそくろうだよ、花「おめへ、か、さんがさつきあひにきたじやアねへか、げび「もふかいりんした、「琴」は、しんに文を書て居る所へ、まはしかたの「牛吉」来り、「お茶を一ツくださりまし、とちやをくみ、兩の手をかけて持、茶碗で手をあた、めながら、熱いやつをす、「いめへましい、中の町へいつて来たが、さつぱりかけがよらねへ、これじやア此ものめへは、蜜柑でこせへた猿をみるやうに、首でもく、らにやアならねへ、かけびまのでも、かつこうのわりもんだ、げび「みんなさう申したつけ、牛「人の氣もしらねへでしやれるよ、なんぼしやれても、まだやきばの道で、いきものはとをらねへ、おれが水あげをしてやらうといふに、「げび」が「うけまき」のくし、しつたか、むしがいは、牛「何むしがい、なまびのむしがい、が、聞てあきれらア、げび「わりイ酒だ、よつたら供部屋

へいつて寝さつせへナ、琴「げび川さん、ふうじ紙をもつて来てくんなんし、牛「ホニ、ちつとみがきなつと磨てくんなんし、牛「ホニ、ちつとみがきなせへ、賣薬店と女郎衆のざしきは、箆筒がたらねへとしんこうがうすい、琴「ぎう吉ッどん、男の手でなくつちやア、わりイことがあるから、のちに文の上書を一ツしてくだせへ、そして田町へいく者があるなら、知らせ下せへ、治丹坊の三百丸をかつてもらひてへ、牛「大かただれぞめへりましやう、と、行、琴「わつちやア幹郎さんのとけへ、痲病の薬をこせへてやりてへが、げふは間にあいんせん、りんびやうのくすりを手製にする事、はおいらんより、この秘法を傳る、あ、〇黄連、甘草、丁子、山梔、子、隈篠、燈心、梅干黒焼、阿膠、松子、女陰毛、三すじ、以上十味等分に煎じ用ゆ、三すじだけ、琴「そりやアそうと、今日はいつかだのッ、花「いつかでおざんすか、げび「わつちもしりイしないイ、折からおもてには、いろく、のあきんど通り、さまんく、よび聲き、▲さんばさうく、なんきんあやつり、▲鏡磨々々、▲さくら草くくく、▲針がねく、げび「モシへ、あれはりがねく、がきいしたから、十二日でおざんしやう、ヲヤこもさうが来たよ、花歌

さんごらうじいし、ちよつとりつばなこもそうざんす、花「どれ、と立て見るうちに、はや下の方へ行する故、そばにあるすがたをたつて、おもてのれん所へ下より中郎来り、たのまれましたが、此かんげをちつとおつきなすつて下さりまし、とくはんげ、琴「いくらほどやるのだよ、中「一ツすじばかりおつきなさりまし、琴「ウ、今ださしておかう、と云所へ、「げび川さん、こつちの御座敷に皿が一ツ来ておりやしやう、みておくんせへ、げび「おざりいせん、中居「おめへがたは、めへようそんな事をい、なさる、此ちうもこつちに平のふたがござりやした、わたしらがあづかりだから、無くなつちやアめへわくでござりやす、馬鹿らしい、ひ云ひゆく、げび「しつたかしらねへは、とはぐらかす折から、廊下にて座敷持の女郎「うはき木、少し心わしてしらは、すこきかた、うは「コレあの、あきんどやへち、禿にみ、こすり、うは「コレあの、あきんどやへいつて、すの香箱との、下モの木薬屋へいつて、血どめと銀箔をかつてきや、そしてかへりにお針部屋で、綿をちつともらつてきや、ちつときをきかせや、と、こいつばんのしたくとみへたり、〇折からあらひはりやみもの、わから来り、かし本やはなくした本をせがみ、茶わんばちや代ものはれてやけどした尻をくふとこる、もはや、ゆばん「湯をしまひますく、と二階中、結お吉来り、髪を結ぶ、夕「はか

な付のとうしせんをよ、「大道直如髪、春日佳氣多、ヲ
 みながら、いはせて居る、「此子はよくすいつけてくりや、お吉
 ヤばからしい、「おいらん、まだ鹽だちをなされますかへ、夕」おとつ
 「おいらん、まだ鹽だちをなされますかへ、夕」おとつ
 いで日ざりがきれんした、吉「そりやアようござりま
 す、といふ所へちや屋の「下女」もみ「モシおいらんへ、此間
 の扇をかいてくださりましたか、たび／＼客人の方
 から、とりに参ります、夕」なんぞこのみがあるかのッ
 女「おまへさんのお名さへあれば、夕」なんでもい、か
 ねへ、書ておきんしやう、女「おたのん申します、へ、か
 吉「せんでへおめへさんにやア、てがらよりしのぶが
 よく似合ます、夕」それでもしのぶにゆうと、いつで
 もお茶を挽すから、縁義がわるぶおざんす、「此うち
 ばこつて「吉」にやる、あぶら、川「雪野や、これをこぼして
 手ゆへ、紙でもちそへてのむ、「川竹」
 きや、とはんぞうをつき出す、はんぞうの中には、おはぐるのつば
 ぼあり、わろがみとみす紙のくづ、ふきが五つ六つあり、れんじに
 は小そでかけてほしてあり、所々へにのつきたるさらしの手ぬぐひ
 の、あらひこくさきやつもほしてあり、「〇ほどなくかみゆひしま
 ひ、吉「は外へゆき、川」は手水にゆき、あとには「夕」ひとり火鉢の
 まへにしようぼりと、おりにかほ半ぶらうづめて、ものあんじ姿にて
 居る、杉ばし火ばしにしたやつ、もへしきりてけふる、此とき中の
 間の時計九つ時、「夕」はあたりへ氣をつ「モシおいらん、晝狐
 さんがお出なされましたよ、夕」ホンニか、今じきさ

まいくから、マア雪野を先へつれていつてくだせへ、
 男「ハイおはやうお出なされました、川」来る、夕「モ
 シへ、川」かててくわへて馬鹿らしいねへ、夕「どうし
 んしやうねへ、川」わたくしがむねにおざんすから、
 氣づかひせずといつてお出なんし、夜舟さん着物を
 だして上ぐまうしな、「夕」はせんかたなくきものさかへる、〇
 としの源氏雲の中に、四季の草花を極彩色の筆に仕あげ、もん所は膝
 の丸、むらさきのよりいとにむらさきのふき、「お
 はとびいろのむらさき入丈に、おなじもやうをいろいとにすかぬひ、
 こびちやどんすにひちりめんのうらなつけしこきをせしめ、と姿見
 人に見せても、七十五もんめとみへるおいらんなり、夕「ゆきの
 や、となりの浮里さんの所に、居つゞけがあるじやア
 ねへか、雪」おざりイすヨ、夕「おれがさふいふとつて、
 おめへの所の子どもをかして、てうしを一ッけへさ
 しておくんなんしといつてきや、モシへ、おたのん申
 すに、川」きづかひなさりイすな、夕「かならずへ、
 と云ふ所へ、てうしを持つて来る、夕「茶碗でぐつと一ツのみ、其勢
 ひで出る、中の間には、亭主喜左衛門のりるそばに、かんばん板
 を本帳へうつしてある、〇かんばん板と云ふは、女郎の
 うつたかすな、かりにひかへておくぬり札のことなり、
 三分の印
 は三、一分二朱は一、△これなり、「夕」を「おいらんお
 早い、「夕」そばへゆき、「だんなさん、ゆふへはおあり
 がたふおざりイした、喜」すきだときいたから、もた

してやつた、けふは何か店の衆の出番か、夕「イ、へ、
 洋屋の客衆でおざりイす、喜「フウ、ちよつとうしろを
 向いて見せな、ヲ、でへぶ髪の人か人がらがよくな
 った、サア／＼客人がまつてゐやう、早くいきな、夕
 「いつて参りイしやう、としんを同道して茶屋へ行、「夕霧も
 頃日はひれがでへぶついたノウ、女房「左やうサ、だん
 だんよくなりませす、「扱臺所のけしきは、料理番の仕込みのさい
 だんよくなりませす、「扱臺所のけしきは、料理番の仕込みのさい
 る音、どんぶりのわれた音、米をつく音かしまし、かふるは大ぜい、
 長ばんだいとりまいて、ひるめしなくひ、火入を持つて来るふり
 そでしんぞうあれば、茶のきうじするひつこみかふるあり、庭には臺
 のもの、花もちこみ、かたへには酒だるの口を立るあり、いりぎけ
 のにはひ鼻をつらぬき、湯氣はきりのふか、「酒好」三河島の湯へ
 きがごとし内證へあそびにきて居る男、「酒好」三河島の湯へ
 お出なすつたか、喜「此間めへりやした、酒」おへ、け
 へはへ、喜「ゆふべ茶屋のてやいをよんで、一妓點をい
 たしやした、「突出しの白靴ものをとりたて、」と云
 ふ句をしたが、どうだらうね、酒「ウ、句づくりが
 おもしろへ、こいつアいきやしやう、とはなしの所へ、びや
 あづけておくとみへ、喜「ヲ、ござつたか、どふだのう、ち
 る女郎のおや来る、喜「ヲ、とかくどうへんでござりまし
 つとはい、かの、おや」とかくどうへんでござりまし
 て、喜「ソリヤアこまつたもんだ、早くよくしてへも
 んだのウ、おや」ハイ、喜「マア飯でもくつていかつせ

へ、折からのうれんの内へ、「天台道心」南無薩婆陀哆伽
 多吃盧枳帝唵三摩羅三摩囉吽、喜「あの子や、そこへ
 しんせろ、そのあとへ、「四ツ竹」すまふヲ、とりイ
 、にい、て、しらアふぢいげんッだア、チヨコチヨ、人「江
 口」すいてうこうけいに枕をならべしいもせも、い
 つのまにかはへだアつらん、喜「ア、うるせへ、「又
 所、「又 かりて「月花さんのかぶろがござりません、どう
 ぞひとりおかしなすつてくださりました、女房「このぢ
 うとなりからかりた子は、どうしたの、やり「ひつでか
 へしました、女「こなたのしつた所に、やとふかぶろは
 あるめへかの、やり「きうに心あたりがござりません、
 喜「どふでけふの間にはあふまい、みせのこ、「かぶる」賃
 場やノイ、人「引／＼、五色の糸とやうじをもつてき
 さつせへ、「かひなるべし、扱又二かいはおのうの方にて、 女郎
 「澤邊やア／＼、かぶる「アイ／＼、女「コレヨ、楓屋へ
 いつての、その二朱と百のたばこ箱を、紙でつゝん
 で水引でいはへてもらつてきや、又太神樂をみてい
 めへよ、「こいつ三兩ぐらゐの、と花のかへしとみへる、ふりしん
 「ゆふべの三味せん番は、だれたノウ、ばちがみへね
 へとつて、こし元衆がこいとをいふよ、「いふ所へ、夕

へり、「川」が耳「モシへ、けふは内の首尾がわりいとつて、すぐにけへりイしたよ、ヲ、せつねへ、「川」客帳をつけて居たりしが、「そりやアよかつたねへ、夕」今まで水戸尻の簾におりイしすよ、「川」を「モシばんには、かへつて人めが多くなりんすから、きうにしやくのおこつた顔で、本ン間へはいつておやすみなんし、夕」さうしてもようざんしやうかねへ、川「わたくしがい、ようにはからひんす、と人をつかひ、かの戸棚へかくし色男を出し、もく、此の男といつば、藤屋のひとりむす、伊左衛門といふもの也、夕ぎり」とあひぼれの、それがこうじて不首尾となり、かんとてかくまひおきしが、ゆふべ人めをうかつて、二かいへ上り、戸だなへかくせしが、折わるゝ出をびれて、けふ一日のばせおきたるなり、伊左衛門「屏風の中へはいるひやうし、筆のかきなびしやりとふんで、びつくりせしも、歴に「さぞたいくつしなんしたでお疵持人心也、夕」小聲にて、「さぞたいくつしなんしたでおざりイしやう、わたくしが自身にしては、目にたちんすから、いひ付てはおきんしたが、ひもじうはおざんせなんだかへ、伊「イヤ、川たけがおり、氣をつけてくれるから、ひもじくはなかつた、それに小使も氣をさかせて、椽へ蒲團の綿をむしつて入レ、音のせぬやうにしてくれたから、何から何までこまつたこととはなかつた、といふ顔、夕」「ホンニおまへさんを、こ

ういふはかない身にしたも、みんなわたくしがとがでおざんす、かんにんしておくんなんしへ、といたきつりくす、泣より伊「愚癡な事をいふものだ、あまねく世の中の女郎買、金の澤山あるうちは、女郎の眞實はあらはれぬ、こう云ふ身になつた所を、みついでくれるがまことの心てい、と此とき、時計八ツ時、もはやひる中あふみ流の本でうしのすがいきをひく、二かいはしづかになる、折から此となりうき里が次の間には、新造「江戸町」には「みやこ」歌がたを、夕」その心はといて、といきんせんはわたくしが願ひ、人目があるから、人なみに笑ひ顔もしてゐんすが、おまへさんの事を思ひ出しんすと、いつそ死度なりイす、隣「三條院、こゝろにもあらでうき世にながらへば、みやこ戀しかるべき夜半の月かな、なには「ヲットこ、におざりイした、みやこ「ちらさぬやうにおとんなんしへ、夕」和泉式部、あらざらん此世の外の思ひでに、伊「今一たび勘當のわびもすみ、此二かいへもはれて来て、あはるゝやうになり度いものじや、夕「ホンニまいばんあはれんした時は、たくさんさうに思ひしたが、此ごろは此やうなはない事さへ、大ていの心づかひじやおざんせん、伊「さうさのう、夕」うしとみし世ぞ今は戀しき、

みやこたしかこゝらにおざりイしたよ、夕「そこにある、とつてくんなんし、藤原の義孝、君がためをしからざりし命さへ、夕「おもひなをしてたまさかに、お目にかゝりイすをたのしみに、ながらへておりんす、伊「ハテ死んで花實が、夕「咲もしんすめへ、伊「命あつての物だねサ、なには「ながくもがなと思ひけるかな、夕「コレ、まんがちにしなんすなへ、夕「とは思ひすしきものとかは知れ、夕「もしそれ迄にひよつとマア、夕「右近、わすらるゝ身をばおもはずちかひてし、夕「それを思ふと、しんになしくなりんす、伊「ハテ、たとへ此うへどのやうに、なには「身をつくしてもあはんとぞ思ふ、夕「そりやほんでおざんすかえ、伊「これさ、聲が、夕「たかしのはまのあだなみは、みやこ「かけじや袖のぬれもこそすれ、〇かゝるところへやり手のおよく、やうすはのこらす見とけたと、聲かけて屏風引あけ、頃日あやしいとおもふたが、今朝程ちらと見つけておいた戸棚のうち、とぼけた顔で氣をつけたが、あんにたがはず此しだら、わたしが顔をふみつけて、なんで役儀がたつものぞ、此通内證

へゆき、旦那さんに申す、これわかいしゆや、此男めを引すり出したがよいわいの、とわめくを聞つけ若い者、われもくとかけ来り、にぎりこぶしの雨あられ、むざんやな、伊左衛門があたまの上ふりかゝる、夕霧なみだもろともに、中をへだて、身をおしまず、伊左衛門が身をかこひ、是やむごらしいどふぞいの、皆の衆またしやんせ、伊左衛門さんにとがはない、この人さんをぶつならば、まづわたしから先へぶちころしてしまはんせ、き、いれなくば是こうと、そばにありあふ鏡臺の、かみそり箱に手をかくる、やりてはあはて、おしとめ、是夕霧さん大事の代物、おまへにけがさせてなるものかと、もぎとる其間に大勢より、伊左衛門がたぶさつかんで引出す、かゝる折から思ひがけなき、次の間の長持のうちよりも、ヤア、夕霧どの心底みつたと、十段目の大星もどきに聲をかけ、ふたおしあけてぬつと出たる一人の男、若いもの、利腕つかんでねぢり上り、今一人をば力にまかせておしたをし、こちらもけりあちらもけり、けり、とけちらかして立たるは、こゝちよくこそみへにける、やり手はそれとみるよりも、ヤアお

前さんは、浮里さんのお客人、 つの間にとふして
 マア其中に、と云ふもかまはず此男、伊左衛門が前に
 手をつかへ、いまだ顔をばおみしりなき故、御不審に
 思召ましやうが、わたくし事は京都の出店に居り、番
 頭を仕る算右衛門と申ものでござります、此夏用事
 あつて此地へ出、大旦那におめにかゝり、うけたま
 はればあなたさまは御かんどうとの事、これはした
 りおわかい事なれば、一ッたんの御あやまちはしか
 たなし、御心底もなをりしならば、御勘當のおわびも
 申、二ッには是なる夕霧どのに、さほどまで御執心な
 ざるも、是赤繩のむすびしならん、心さへたゞし
 ければ、遊女とてもくるしかるまじ、夕ざりどの、心
 底、嘘か實をとつくりと正した上にて、根引をして目
 出度祝言させ申すと、扱こそあとの月より、隣ざしき
 の浮里が客となり、律義といふかへ名を呼入こみし
 が、猶も實否をたゞさんと、今日わざと居續けをし、
 先ほど茶屋に申シふくめ、かへりしていにもてなし
 て、人なき折をさいはいに、是なる長持に身をしの
 び、屏風のうちのむつまじごとを聞きとゞけ、夕ざり
 どの、まことの心をみぬいた上は、今日中に亭主吉

田屋喜左衛門に逢ひ、身受の罎を明け申さん、其手
 附金は則こゝにと、懐中よりさいふとり出し、伊左衛
 門が手に渡す、受取つて中をみれば、縞の財布の一ば
 いまし、是は錦のさいふだけ、耳をそろへし五百兩、
 金にそへたる一ッ通あり、いぶかしとひらきみれば、
 何々、其方儀心ていなをり候よしきこへ候間、今日
 より勘當ゆるし候ものなりと、書しはたしかに親の
 手跡、ア、かたじけなしありがたしと、伊左衛門夕ざ
 りもろともに、手をあはせてふしおがむ、折からてう
 ど中の間の時計七ッ時、前路日將斜、

是よう錦の表とへんず、夜の景色
 のはなやかは、今まで多くあり來
 りの小冊で御らうじろ、

後 叙

夫熟大門視ば、實に鬼貫が句の如く、骸骨のうへを粧
 ふて、花の廓の喜怒哀樂、迷へば眼中西施を出し、悟
 ば鼻中臭氣をいだす、迷ふも悟るも、有漏路より無漏
 路へ送る茶屋が提燈、人間わづがナツレ五十間道、一
 切の衆生身の用心さつしやいましやう、亦人間の渡
 世利は心氣の一住、時寛政三年辛亥春正月食ニ雜煮ニ
 之日、

京傳自跋

青樓畫の世界錦之裏終

北華通情序

華街の流行は、朝暮に移り易りて、歲月をもて観べきにあらず、この通情は、今日の通情にして、翌日の流行に魁せるものなり、昨の新語は今日の舊語、夕の口舌は晨のきぬぐ、明の約束宵の變替まで、これみな今日は錢にして、昨の黄なる事を覺ゆるの謂ならん、穴賢世の狗賓客、鼻を低ふして今日の流行を察よ、然らばこの通情の中らんこと、かの北向の鰻に比しかるべし、鬮逢攝提格後暢月既重、

大江漁人書

楊柳繁華地
樓臺壓漢宮
可憐娼婦色
當控隴陰雄
滅方海書



自序

大江の陰に小流あり、あのいたいな貝殻に、一杯もなき蜷川といふ、西漸透逸として、鐵の如く、列樓流に臨んで俱に曲れり、故に後朝の客、遙に顧て眷々として去り、心磁石のやうに北を指て不誤、そも顧眄の橋と呼ぶは、東西の半に渡る樋の橋、晝夜駒下駄の音高く、往來は櫛の刃をひく髮結床、招幔を戦ぐ春風の融々なる空に、河左樓三階に引く三線、唱歌の聲彩霞に散じ、笑語雲外に喚ぶ、三丸館の玄關閉る日な、丸新の裏座敷、葉花芬々として、密座野遊の眺望あり、一丁目の幡源、南涯の住治といへば、送迎の道の遠きに回漢は諷く、伊丹屋の長屋にひろがる華善、狭路の出入に犬糞をこまるよりは、濱側の棟高の危をおそる、大吉の二階、藥師堂を眼下に見、河久の大座敷、裏町の人聲を聞く、大半の粧閣、格子の簾は櫻橋の行人を睨し、藤伍伊丹八十は、西妓館の並閨を逐れず、二軒の河庄、東のいれ河利たるより、丸伊忽鯛喜と變ず、岸本屋の十一丸、河忠の生蠟燭、豊興に

柴崎といふ雅名あり、豊太に板行文七の古名あり、東西の大壺店に、むかしより連名の招燈を出さず、これや廓崎陽にまさりたる高情、げにも北のたいこと、古歌にうたひしぞゆかし、住辰に若虎、山助に業平、男をたてがねして、亭主に持て居る妓館あれば、青樓に世話やかれといふ客あり、泉平の八重太夫、京半の梅太夫黄泉に逝て、津嘉の岡太夫東都に名を成す、彌太夫の紙屋、いつ吉の三線、戎此の淨瑠璃は、五百篠の色事に名高く、壁彌篤實になれど、ニハカ社中を漏す、一丁目にはへん店出で、二丁目には香囊の風薫る、堂島橋の燈籠、曾根崎橋の螢、若村屋の秋の夕は、蟲店のちんくの聲三絃に接り、藥利の冬の日は、顔見世の棧敷割に店をふさぐ、お六すき櫛、いろは紅粉、川合の茶中、阿波善の鰻、高麗蕎麥代八分、春日野は四十八文、綿富に手取の料理すれば、蒸湯には人間の風呂吹をなす、温六の休日、饅飩は箸よりふとうして白く、因幡の餠餅は、粧閣の買ぐひにはやる、肥前屋のはなれ座敷、紅葉庵の亭座敷、大任の麥飯で戀すれば、本庄に鳥なき里の鰻汁あり、中山の無縁經、野崎参りの船催、十六日の妙見さんも、實はとい

へば信心にあらず、かの高い舟借て、やすひ小魚釣に行が如し、春夏の陽氣うは氣より、いつしか秋來ぬと、目にはねつから見へねども、一聲の躍太鼓に音づれ、濱の寺の高燈籠は、ものほしの宴を照し、梅田の回向鉦は、新地三町戀無常を告る、源氏香盡しの揃の挑灯、三丁目の貝盡し、こよひの躍は中街にありて、仲居はかこつけて八兵衛に出會、小婢は客にせがんで、緋緋の手拭でしやれる、夜すがらの忽音頭、飯焚胸にこたへて目もあはず、やうく三番の萩散て、住左の菊も霜凋て、櫻橋に螭船係ころ、一丁目には手打の挑灯風に寒し、幾竹屋の岸岐にはほふ、茶目利のすつぽんならねども、戀の甘味も色の嘗も、冬こそしみくと身にしてみても、夏の浮氣でちよつと出來た色事も、露結んで霜となる、こほるふすまの長の夜の、逢ぬつらさに思ひのいや増るぞいのちなれ、されば朝迎ひの遅ひのと、花のきまりのゆるがせなるとは、遊客のかすり歌、居續けの朝込に晝仕舞をかざる、廣島屋に酒樽洗ふころ、反吐ならぬ茶肆の荷ゆきちがひ、糸長さかいなんどの肴荷競て走る、花帖あつめる回漢、指紙配るかり子、花づめにありきたいこ店、

芥塵捨る番太郎、灰吹あらふ乞食、燭臺の紙くづは、口紅粉ついて赤く、角箸楊枝は、箆籬に入て日南にあり、河伊津の利の吳服荷おもそふに、大丸の童僕木長あたり休む、のりいと呼ぶ女の商人、あわエイの岩おこし、神の棚卸に日作のはらひ給へは、六齋に廻り、編笠のなアもチは、懐手をしにせけり、ヲ、こわの六兵衛は狐の子、佛の慈悲は八百屋坊主、染組登仙すれど、筑州の清吉いまだ徘徊す、春の低い友人道、物真似する惠林法師、鍼醫といふ周雅は淨瑠璃に耽り、尺八で名高き吸管は醫道に凝る、大萬が嘶、柳巴が躍、樋の上紅屋新平香、勸學屋錦袋圓、岩永晚景、大芝が乗駕、奴のやうな桶屋の貸安、外科めいた稽古屋のおきんさん、おそのさん、おやすさんてふ髮結は、弟子つれての、めき、要助が破れた腰囊には、入口の鍵をかくす、天満屋、福田屋の町使おとなひて、丸安徳島屋の香具荷溝側にならび、大黒湯に藝妓のいりつどふころ、相撲取の巽上りは、兒童のほたへるが如く、平善の長風呂に、淨湯がおほひとて奴僕は和罵、紅粉買に行黒齒貫、巻紙かふて來た洗練婢、約束の妓婦の宿屋入、蓮歩徐々として觀者腸を索ひ、回

漢がかたげた包には、あの佩環の解んことを思ふ、日もはや西山に遠近の、客の衣紋翫て、趨にゆけば、兩側の格子には常衣の妓婦、粧凝て外面をのぞく、泉理の鮎、大吉に荷を預け、ゑらの蒲鉾黄昏をたがへず、既に軒燈繁々として煥けば、昏正の達筆かけあんどうにあかるく、東西の温藥、杉田のさんせんさんごは、法花の十三塔の如く、松田の目印は、口上書町嚀なり、津の嘉三梅の女筆、鍵仲の陶齋流は、大半が手跡なるべく、灘住の千倉やうは、鮎による酒屋ならん、若徳に可亭の骨肉をゆすれば、幡さとは玉淵が風かいだのを見しらす、喜見城門夜色闇にして、二階に騒ぐ高調絲、牽頭子の戯劇は、むかひの軒に群聚をさせ、長岡離都の手事には、往來の足を駐む、送られてゆくおやま、花から戻るげいこ、壓賣にまはるたるこもち、指込にありてまはしおとこ、河平にかなくそといへるかり子あれば、おきよどんと呼れる古婢もあり、倉邸の新五左、箱提灯に先を拂せ、忽行ほうかぶりして飯焚をねらふ、大三かぎやの夜叫饅飴、ふり賣の茶碗むし、善哉正月や奈良茶めし、西田屋の京飛脚喚で、髭の長い按摩玉笛を發す、蛸あがれの新菓

子、六丁目の醴酒、或はそれ梅花心易墨色の考、總て街上に鬻ぐもの、聲、嚴冬に逼る、今夜は何所も贍なと、回漢のあきなひばなし、呼ものかと問へば、イ、エ駕籠いひに行と小婢は答ふ、客を送る仲居は、モシありがたふ、愛郎を往す藝子は、そんならエとぬれたり、青樓時をしらすといへども、大黒湯の招燈は、むかひがはの四ッを限り、風呂流す音川水にさへ、橋渡る人影のや、更行けしきは、色と情の眞晝にて、揚先しましたおやまの貸にゆくなど、しれた手管も先にくからぬものなれ、すでに三更の拍子木、チョン／＼、チョンのひやうし幕、西のかたあんどまばらにしにくらく、舞臺一面にげい子の戻り足、鼻歌の聲は客の耳に残し、下駄の響には戀まつ人の腸を斷、あるは溝またげて犬悅する客、かたへには送りの男、鼻をつまんで立ち、祇園めいたちいさい提灯に、素婦めいた本新妓を送れば、樽さげた小婢、酒屋の戸を叩く、誰そや手をひいたふたり連、なにか囁て横町へひそむ、ゆきちがふて來る駕籠の提灯ギイ／＼の音に、今まではなやかなりし家々の火かげもなくなり、いつでもおそふひく西店のあんだうも、夜叫の焚火もみ

なきへ／＼とて、會所のありあけ自身番に残り、駕籠所のともしび風にちらめく、その二階に空癪をおこすおやまあり、かしの座敷にそら涙こぼす藝妓あり、口舌にさはぎ、契話にしづまる閨中のさまも、青燈歌として宵の燭臺に似ず、床の間の花生、一輪の椿ころりと落、絃捨し三線いとひとりでに斷る、屏風に畫る西王母も、ぼつしりと淋しそふなるに、釣鐘町の時鐘かすかに聞へて、翌日の雨氣を思ひ、沖の鳴音には、風の烈しきをおそる、夢結ぶまくら、みだれ髪顔にあたりてつめたく、かけ香の薫りは、隣座敷の軒よりも高し、起番の仲居眠がちにして、廚臺に鼠皿を落し、井戸に釣瓶の水漏て、索輪おのづからくはら／＼と鳴る、小便にたつ客廊下にとゞるけば、水篋にあらぬ竹筒のおと、ちり／＼んひ／＼鈴の音、割竹の音、鳴子の音、犬の吠聲、猫の聲、溝石からりと息杖に、かごまゐりましたと戸た／＼は、八ツか七ツか別れこそ、城の外告寒山寺、ゴランとひ／＼まくらのうへに、残る鹽茶のあき茶碗、いつ來てじやエと、ちよつとちぎつたきぬ／＼を、あちらに聞て寐てゐる客も、どふで別れば東雲の、可愛がらすに阿房鳥、二日酔

の客は、揚り口に椽はんぞうの手まへはづかしく、肝癢起した客は、鉢はちのわれたに胸を抱く、夜をしの青醒顔、口舌した寐ねはれ顔、世理賦の出来た嬉し顔、むしんいはれたくつたく顔、かほのさま／＼心の別も、おなじ流の水遊び、はまれば深き蜷川、手ふりはぶりの姿を寫す、月雪花ののべ鏡、その紅粉筆に粧水をもて、藝妓がくれた禮狀れいじょうのうらに、こんなてんがうを書捨るてふ、

寛政六ツきのへとらのとし、後の霜月十一の夜、香宮散人井關樓上にして、つきあひに呼んだいれ込の新造のそひふし、寐ねられぬまゝにこれを書す、

北華通情

五畿東海東山山陰の流水を汲漢みづくみにくませ、西國の上白を十度洗ふて、虎久鮒喜のうなぎを茶漬飯、驕てゆかぬ馬にはあらで、繼のない足袋に、小兵衛矢立の鞭うち、水入ずの白手拭に、近佐の手帳の遺來やうりは、角前髪の童僕の手になる、されば朝の寄つき合圖のひやうし木は、寅の一天なるべきに、小便舟の往んだ跡にうつは、どふでも朝寐する人のおゝきか、五厘しちりとらふ、七厘しちり五毛ごぼうやらふの走つて、せはしきかけ引の間に、道具店の椀家具の目利、川魚の立賣にあだつく、火繩のきへに碁象戲の氣散じは、實にも日本國を胸にたゝんで、利敗のために心をうてども、ふんで愁へざるは新地の宴たぐひにあらはれ、すくふて足とせざるは、天神金毘羅の朝參りにみへたり、強きを壓弱きをたすくるたてひきも、男はあつたらめつたにくだけぬ北濱の意氣張、死ていとわざるは北方の勇なりと、かの中庸にいはいれたも、ちやうど五りんのかけねなし、爰にそのひくにひかれぬ出が辻の邊り、子供

名前の表札のある露路のおく、會所の判取場みるやうなゆすつた住居は、喜多市といへるすれがらし、小文才もあるかして、若干の書庫つみならべ、しつぽく臺に孔雀の尾たて、綴りかけたる草稿は、新歌、のるか、手うちのもん／＼、或は筋のたゝぬ歌舞妓の趣向、炬燵がてらに切た爐に、さしむかふてはなしてゐるは、相庭屋のひとり息子「やぼくしきせるひ」「時に其事で、きやつがみそをあげるのがけしからぬ、しかしなんぼ睥ひらふるふておどして見ても、川立は川とやらいふて、どふでしまひはこつちのかぶりになるせりふじやせ、あつちのしかけが、まるで色といふ場で來てゐる藝じやによつて、まんざら肩すかしくわさるほどのことはあるまいけれども、せんたい／＼、こゝがおしへて、すかじやによつて、帳合しめた所がおさばとよきてゐる、それにアノのろまが、ゆく所までいて見やうといふはらでゐるのも、なんとおかしいじやないか、きた「そいつアおちじや、が、しかし金さんも、大のかんぐりじやによつて、そふ云ふ場合や様子でなら、萬更深い處へはまりますまい、シタガ此間も、丸新でくだんにあふたとき、わたしつかまへて

なんじややら、エラもふけさしに言葉の玉をつかふてゐる升た、そこで此ほうもすかさず、ゑいかげんにちやらついで、調子合しておき升たが、なる程大のせりふがりで、中々きんさんニとは、よつほどすまふがはぢけてござり升、ぼく「それにまだ此間も、吉もんじやがよび出したそふな、けれど濱のきやくにはあはぬとやらいふて、ふつたとサ、きた「ハテきつい所をしてゐる升な、なに／＼もせよあのまゝは、ちつときるのがむづかしい、マア此節はどふしても、ふみのすがたじやよつて、随分おもいれをひかへめにして、人機を見あはすのがよござり升、ぼく「サレバサア、しかしこの相庭には、なんぞのふいを一ッいふてやりたいテ、爰で一いつ夕ゆふぎりほどの高下でもあつたら、それこそ妙な狂言がかけれるせ、きた「さやう／＼、その時はさしづめ、此方並木正三といかにやなりません、とわらふ、〇こ金山がなやまがなじんで居るおやまのことを話するのなれど、ればれんぢうも、餘り言葉がすがりすぎて、其委細わいじわからぬ、ぼく「コウこのやうに誹てはゐるもの、モウ出てきそふな物じやが、きた「イヤおゝかた見へませう、けさむかひがはから状もきてござり升た、人ごといわば目代めだいおくとへにて、とやかふ云ふ中兩ちゆうりゆうがへや金山「うちにか、やとははれば「お出なされませ、きた「金

はりこみじやげな、それにかのふじゑがすりものに、
 來芝の句はどふやらさむいでないか、きた「成程さよ
 じや、せんたいことしの十月ほど、藝子の一時にひい
 た事はない、マアふじゑにおしゆん、それに小さとた
 だ源大すへ、きん「それよりまへに泉岩がひく、上人
 の小たかひつこむ、きた「おやまでは豊興のちどり
 も十月にひき升た、^{「ぼく」ひざむひ}「ヲ、それヨ、そのて
 しよの事でおもひ出した、此あいだ天神へまいつた
 とき、あそこは小島町のとんだ町あたりで、かの婆仲
 にあふたせ、まゆおとしてから、だいぶわかふみへ
 る、きた「さやうである、あれはなんでもそのあたり
 にかこわれてる升、そのついでにむかふに居た宮が、此
 八月ごろから南の河音へしかへられてゐたが、今は
 あやといふてあつそふにとりあげてゐ升て、きん「ノ
 ウやぼくさん、おまへがよんでゐたおだまきが、南
 へいつてからお、ゆすりは、いつこ妙じやアつたせ
 なア、^{「ぼく」}「あいつア外物でゑす、それに此ぢう南で
 河正にゐた琴にあふた、今は大こく風呂にゐるさふ
 な、きた「河忠の萬世も南にゐる升せ、きん「岸本屋の歌は
 ひいて、あのよこ町にゐるでないか、きた「さやうサ、

そしてし太のまへのらいが、子もちになつて樋の
 横町にゐる升、きん「京半にゐた初瀬が、いまは兵庫の
 さびゑで、名はせつとやらいふそふな、^{「ぼく」}「はてな、
 それに河平の小むらしといふ酒のみはどふした、さ
 た「いまはほり堀におり升、ヲ、それにその河平の
 三木に、此あいだ下の關であふてもどつたといふ人
 がある、^{「ぼく」}「きん」ハ、アン、きた「なんとも珍じやな、
 かの下の關のうら町とやらいふ所で、やつぱりげい
 子してゐるそふな、シタガあつちでの評判が、これ
 はなんでもげい子ではないおやまじやといひ升とサ、
 成程その通り、あれはせんたいが、もとしん町とお
 りすじのおやまでござりた、なんでもいまは下もみ
 な睨になつて、中々ひとすじ繩ではゆくものではな
 ひせモシ、^{「ぼく」}「こいつアおかし、きん」そのついで
 に大半の八郎兵衛げい子は、ひいてからかけおちし
 てしもふた、きた「さればイナ、^{「ぼく」}「きんさんたれ
 が事で、きん」それ友の事、^{「ぼく」}「なせ八郎兵衛げい子
 といふ、きた「あれはモシこふじや、せんたいもとが
 おやまであつたのが、のちにげい子になり、それか
 ら又おやまになり、そして又げい子になり、かのた

びく「あがりつおりつといふ心でがなござりませ
 ふ、^{「ぼく」}「ハアテ、おもしろふもない、俳名でなら泉新
 のこさいから、木長の君のやいと屋などは、よくとふ
 つたものじやテ、きた「そのやいとやは、この九月か
 らおやまになつて、ますく「繁昌でムリ升、きん「い
 まの名はくらくと云ふでないか、^{「ぼく」}「それにかの眠獅
 が、大ふさのおかうを司馬卿とつけたもおかしい、き
 た「丸伊の小さいとを、ふじゑが釋迦の十といふた時に
 は、とをり名になつてだいいい、ましたせ、きん「たれ
 やら豊興のせいを、柴田権六といふて笑はした事が
 ある、きた「ほんにそのはいみやうのついでに、かの
 おこり橋も、いつやらから又はしりあるくそふな、^{「ぼく」}「イヤ、
 きやつも豪傑じやて、きた「あの人の尻のか
 るいと、ひた孫のゐつつけとを調合すると、よい
 かげんな客がふたり出き升ゼナア、^{「ぼく」}「此あいだも
 我仙が小松屋から出たが、あそこへもゆくかの、きた
 「もちろん、カノ中正へもいかれ升、きん「五龍は河左
 ばかりじやの、きた「その五龍と我仙とで、岸本屋の
 小さくが事に、だいぶおかしはなしがござり升、
 きた「二三日あと住治へいたとき、したのざしきにあ

わかめと大吉のおつね、まひとりは慥に有大的たか
 が聲じやとおもふたが、客はなんでも十人ばかりで
 もある、たいこもちはしま八とかめ八とで、むしや
 うにやかましうさわいでゐたが、あれは屋敷でもな
 し、濱のてやいでもなし、きた「イヤ、それはお、かた
 かみや組でござりませふ、きん「ムウそふかの、そして
 したへおられた所が、いづ國のみしとしてしよのやを、河
 平のしづはたなどが、あしやうきかへてゐたけれど
 も、わざと見ぬ顔してもどつてきた、きた「ヘエン、そ
 れにアノいつやら道修町のであいで、はり源へ二三
 度まいりました、成程あの茶屋はかたい内じやテ、マ
 アげい子が花も、しよてからていねいにざしきへと
 ひに出升、そして肴の鉢組なども、たいていきまつ
 てある、かのすひものも、げいこへはひとりきてゐ
 ても、めつたに出しませぬ、あのやふにきまつてこそ
 永久なれ、^{「ぼく」}「はて、ちとゐんほなほらじやが、よ
 ひ事じや、きた「さやうサ、全體すべての事が、こつ
 ちはかうとうにござり升、かの南の茶屋のていしゆ
 と、北のたいこもちとが、たいていおなじ人物さ、南
 のたいこもちはなにがなしに、外八枚の役者ときて

る升、こつちのていしゆチャ小むすこは、コウうち町の
手代みるやうな人物で、ちつとゆすつたが、大半
岸本屋ぐらひなれど、これも高いきなばかりで、置
屋くさい睥めいた事はとんとなし、中にも丸新のお
やちなどは、崎人傳にある大雅堂と云ふ風でござり
ます、きん「いかさまなア、しかしこつちが、此堂島と
云ふひとふうある所のそばじやから、よそよりはな
をばなやかになければならんがナア、ほく「いやコウ
金さん、あまり堂島のふうもみそをあげまい、成程
おとこはさつぱりと、はおりでもきてコウゆすつた
所は、どふやらあかぬけがしてあるやうなけれども、
かの盆正月に上下でもきてからといふものは、にわ
かにかしらのいとびんが目になつて、どふも見てゐ
られぬぞ、そこらでは金さん、おまへのかみのふうが
よふうつる、きた「イヤこれはきついで高論じや、時に
この北でおかしいといふのは、濱のきやくをおもに
するから、藝子が歌うたふにも、めうな氣のつけ所が
ござります、カノふむのつくのといふ事が禁句じや
によつて、とりべ山にぞ入りにけり、はやすみの江に
いりにけりと、これだけソノきみあひをつけてうた

ふたものじや、せんたいかふいへばおかしいけれど
も、はまのものほど皆ごまのごとやらいふて、なん
でもない事でも氣にかけるものはなひ、茶屋のあい
さつも、サアおあがりなされじやの、モウおりなさつ
たはのと、アノ高下にかゝわることばをうつかりい
ふたら、客によつて大のはたきになる事がある、それ
におやまの狀に、存をかなでかけば、損するといふ
にかよふゆへ、存と字でかき升、申あげもやうすに
よつて申入とかく、アノ七月をふみづきなど、かい
たら、イヤモそれこそホンニおゝさわぎじや、きん「い
かさまそふいへば、だいぶよそでしらぬ事があるの、
ほく「それにアノ十五日の妙見のごゑんにちが、十六
日の濱のやすみの日になつたも、なんとおかししいじ
やないか、きん「ホンニ、そのめうけんのついでに、い
つやら久々智へまいつた時、アノかんざきのやつこ
茶屋に、きの萬のまんよがゐたせ、あれはどふいふ
もんじやの、きた「イヤそんなこつてもある、せんたい
きの萬のうちが、アノやつこちや屋サ、きん「はてな、
ほく「喜多公、いろくの妙な事をしつてゐるの、きた
「いやモウしつてゐる事においては、アノ玄里といふ

おとこほど、よくおやまげい子の出生をしつてゐる
ものゝござりません、此あいだもちよつとはなしす
るのが、いつこおかしい、マア此はるひいた島とく
の色香が、加賀のうまれで、ほんまの名はおかうとい
ふ、ソシテひいてからの名はおのぶといふ、おなじみ
せの小花が、本町せんだの本ばしのごふくやのむす
め、ソレニ豊興ていしよのやをが、江戸のきんじよのかな川と
やら、なにとやらいふたけれどもわすれました、お
なじみせに名歌といふちいさいおやまがある、それ
が播州ひめぢのうまれ、壁屋のにしきが和州ありは
らのうまれ、泉玉のおのへが伊勢のうまれ、ほく「い
かさまそふかして、チトなまる、きた「それに大多のゆ
か、京の刀鍛冶、金秀の琴が京のごふくや、河忠の
笑が夫まふたへもん、これは今南にゐるそふな、それ
に扇さとのみつが、馬場先の京いしといふ置屋のむ
すめ、八木屋のやきが、京の二條の新町、泉吉の三吾
が、南のつる井和八がむすめ、ヲ、それにまだ扇さ
とのらいが、京の西ぢん、アノ大多のあさが、南の長
左の嬢、コレハ誰でもしつてゐる、ヲ、それにひゐた
ちどりが京のうまれで、みづあげは丹波のさる大名

じやげなせ、モシ、ほく「ハテいろくの天狗がある
ものじやなア、きん「コウその大名でもおひ出した、ア
ノ京半の小むらさきも、もとさいこくのたい名につ
とめてゐたじやないか、きた「さればナア、あれはせん
たい京で、堂上がたの奉公をしてゐ升たそうな、き
ん「いかさまてきが狀にも、濃紫と本字でかいたり、
ちよつこり朱印などでゆすつてゐれば、おゝかた季
なし發句や、てにはのあはぬ本歌でもできるであら
ふ、きた「イヤモもちろん、ときにあいつは成程へん
物でござります、マアけんをうち升、それにもまね
をし升、まだおかししいのは京のおどり、ソシテ鬼市
の上るりをかたるの、ほく「妙じや、きた「それにアノ
おしろいをせぬといふのも、やつぱりゆすりでござ
り升、きん「そんなられしはと、まげのむ、きた「まねして、きびしかろ、
きた「イヤサ、それがとんといかぬじや、かのうかれが
ほんきでするから、イツコたまりませぬ、それにま
ひとつおかししい事がある、ほく「なにが、きた「「きたすこしお
で、かの閨中で、可也といふ事をいひ升げな、きん「ハ
ハア可也、こいつアよい、と三人、きた「「きたすこしお、
大多のゆかも、妙な事をいひ升せ、これはアノ草庵集

に、濱の眞砂をづゝうにして、わからひでも源氏の湖月などをよんであるといふはらで、ちよといふ事も、たれやらの相傳じやはの、イヤしきしまのみちじやはのと、めつたにソノ天狗つかひ升、つねのものいひも、ひつきやうづるあるひはそふしてつかはされ、又は今夕薄情など、云ふ漢語もつかひ升、きん「そんならアノ状のおくには、いつでも歌かいておこすであらふ、きた」さやうサ、ぼく「手跡はどふか、きん「イヤその手跡では、泉屋のおのへがおそれいつたものじやせ、きた」さやう、せんたいあれは唐様でござります、つねの文體よりは、漢文などは別して見事サ、ぼく「それにきやつは、琴をよふひくテ、きん「おなじみせのみしも、手はたつしやな、きた」ほんに、アレモ大のゆすりかでござり升、まづみしを美石など、おどして、文體も漢字がおほひ、きん「いかさま、ソシテてきが詞のいつばなしに、舌のもつれるやうに、やうすつけるのもひとくせあるせ、ぼく「はいふきひと」いや、コレ、あれはつくり聲じやの、きた」さやうサ、それにてきがものいひ、肩をコウいからして、ゑりを下いらふが、妙におかしふござり升、きん「イヤ又あ

るきぶりも、いつばわかつてある、きた」なるほどくせといふものはめい／＼にあるもので、河平のほんが、豊太のら、ひとしきりなにをいふことはのうちに、幕々といふ事をいひ升た、それに吹安のみやこが、つくりわらひのやうで、ほんまにおかしがるの、山大がいつ見てもつまやうじくわへて居るの、それにおすみかほて／＼もおかしいじやござりませぬか、きん「イヤそのおかしいついでに、ひろとくのうとうとしい、おいで、ゐるもよくとをつたものじや、きた」ホンニさやうサ、それにまだ津の徳におゑんといふげい子がある、これをみなが様々といひ升、ぼく「なんの事じや、きた」これはアノおすみやおしゆんがつかあひに、おしゆん、おすみなどと廓風でいひ升のを、それをおゑんが河松、おせうなど、そのまねをし升ゆへ、みなの子がおかしがつて、おゑんがお庄といふた跡では、はたからさまつけていひ升、いつぞよんでいわしてごらふじ、妙におかしい、きん「さまのつゐでに、大半にさまといふおやまがある、かわつた名じやの、きた」名でもゆすつた名は玉きし、玉の井、柏木、ともぎく、里石、ぼく「その里石は、い

ま本長で元のあやはたサ、きん「河庄の左近が、小がうとかへたもよひ、きた」時にモシあの小がうは、大のきまり家でござり升せ、ぼく「さか磯のぬいが、跡の月の廿六日から出るが、したぢからしつてゐねば、ひとせりふいて見たいけれども、きた」さればサア、てきが おやまになつたのは、ふかひやうすのある事で、きん「成程いまはげい子も、三味線のよひのはとんとすくなひ、有幸は大榮の唄になつてしぬるし、春野は河くめのむすめになる、おしゆんはきせるやへよめいりする、ぼく「そのしやみせんのついでに、あとの月正念寺で和歌山のさらへ講のあつたとき、おすみかひら善とのきせうもんは、こいつは妙じやあらふと、あんまりおもひすごしがした故か、とつともいわなんだの、きた」成程あれは、お住のひきものがそんでござり升、ソレニそのばんおかしかつたのは、多田源のく野と長岡とのかけあひのおそめ、金さんしらずか、きん「イ、ヤいかなんだ、きた」なにがなしにうち町のむすめじたてサ、きるものがそらいろのそうもよふのお、ふりそでに、ちよつこりコウゑりかけといふしうちで、髪はふきわげにして、ぎん水引にりやう

ざしといふおもひいで出たときは、いつかうゑらおちでござりました、いかさま八百ぞうとはよふいひましたせ、やぼくさん、ぼく「たれやら十八たげんといふておだてたが、成程よひかうちうじやて、きん「そりやおかしかる、きた」ときにまたあのはん、存の外よかつたのは、さかもとやのむすめと、事なり、丸伊の力たいまは、とのたかせぶね、りやうくはんが竹もよふ、きました、ぼく「ほんにそふサ、そして又あとの月廿五日のばんに、すみたつでも有たそふなの、きた」イヤそれはまいりませなんだが、此十一日き、やうともものけんぐはいが、すみたつであるそふにござります、きん「そのついでに三丁目にみやぞの花蝶とある稽古屋は、しほ瀬の花蝶が事じやないか、きた」さやう／＼、せんと會もでき升たそふな、その時幸八が、きかいがしまをかたつたげにござり升、ぼく「いまは上るりげい子は、扇さとの徳にふじ五の竹、きた」それにまへかた、若忠の三輪といふのがござり升た、いまかの住左のか、になつてゐ升、きん「ほんに先生、そのすみさの此あいだのつけはどふした、きた」イヤここにござり升、とかみ入よりなにか ぼく「コウ喜多公、そ

のかみいれの瀧縞も、いまはあほうらしうてもてぬせ、きん「いかさまこの春ごろは、そろへにした事さへあつたのに、きた」きしもとやのげい子の三味線ばこふるしきが、このそろへでござり升た、ぼく「此なつげい子のかたびらのそろへは、小梅にかな秀、おすみに卯野とふじへとであつた、きた」さよじや、白地につり花生のもやうでござり升た、きん「その中でふじえは、かの南のそろへの、藤の棚のを着てゐたせ、ぼく「それに河左の仲居のそろへは、白地にあいで、うろこがたの小もんであつた」ウ喜太公、きた「あれはカノひといきはやつた、住よしぎれといふものでござり升、きん「三丸屋のそろへは、つたのたてわき、住治のそろへが、たしか白がすりであつた、きた」さやうさやう、それに河久が、白地に花色でばせをのもやう、ぼく「たいこもちも何かそろへであつたせ、きた」たいこもちはにしみせばかりサ、かの白ざらしに、コフなたねの花のやうな、なんでもきいろなもやうで、おびはもんづくしのおびでござり升た、きん「コフ、そのものつるでに、アノたかはのものを包はどこじや、きた」それがどふし升た、きん「きのぶ大時のかどあ

たりで、東の方から来るおやまが、あつちからコフわらふてゆきおつたが、たれやらとんとおぼへぬ、そしてあとふりむいて見た所が、つゝみの紋はたしかにたかのはであつたが、アレハどこであらふの、きた「それは大太でござりませう、しかし大太のうちでは、てしよにゐたつるもござんじなり、コフツ、してア、成程、南から来た小巻であらふ、きん「ハ、アいかさま、そんなら南でちかづきかいな、ときにきのふはたいぶおやまにあふたせ、まづ大吉のてるに扇さとの十七、いづ國の竹にきし本屋のちう、しほ清の龍と壽とがいつしよにいくし、ソシテしま利のいともあふ、ぼく「コウ、やしほにはあやせなんだか、きた」わら「きんさんおまへ二三度よんで、むしんいわれて逃なさつたげな、きん「あれはこつちのせりふがわるひテ、それにまだ大半の森にあふし、河忠のゆりにあふ、そして高政の此が高屋へはいる、八木屋の國が大きいへはいつた、ぼく「はてな、ソレニ喜多公、貴公はアノつゝみのものにまで見おぼへがあるの、きた」そのだんは大の天狗でござり升、マアツの徳の包が十六桐、八木屋が梶の葉、島徳が桐のと、豊與

がかげとひなたのかさね桔梗、大安がきり、あふざさるとが梅ばち、大房が立花、豊太がかぢのは、吹安が五三の桐、ひしとみがから花、河平が定紋は桔梗なれど、包はきりのと、泉國も紋はきりのとなれど、つゝみはしやうぶかは、それに木長がごえふぎく、鯛喜がかに立花、きん「ハ、ア、小鳥がさきよりいつさんに、きた」笑「かべやががたばみ、しほ清が丸に三ツがしは、つゝの嘉がき、やう、河忠がかさねき、やう、岸本屋がかぶろぎく、京半がつるの丸、あり大が四ツ目、大吉がかましき、河庄がから花、河利がきりのと、大半がうらぎく、かれひでが梶のは、いたやそが十六ぎくに、ふじ五がふじの丸でござり升、ヲ、大ぶんくらうなつた、コレおよねさん、モウ火をともしたりや、きん「成程よくおぼへたものじやの、ぼく」ときになんのかのといふて、つい日をくらしした、それはそふと金さん、おまへのこん夜のやくそくは、きん「かめと小ひなとなると、それにまださる與に小名八が出てゐるはづじやが、きた」やぼくさんは、小梅とお此とでござりましたか、ぼく「まだおかうもある、それに十九と昆布屋くめ八がことなり、とは、このほうのお抱ときてゐ

る、きた「おとついても元八がよろしうと申てゐ升た、それにまだ菊八と大半のたねとが、アノせんどのこと

を、なんたらかたらいふてゐましたせ、ぼく「ハ、ア、こいつはしんざわり、およね」か「モシおちやづけをどなたにも、きた」サア「これへ出したたり、つげなめい」梅ぼしとの三杯酢なり、ぼく「コウきんさん、花せんにつき出しときてゐる、ふながほつきにて、モシきのふのたまごを、どふぞいたしませうか、きた」ヲ、ほんに、泉るいからもらふたのがあつたな、きん「寒見舞か、きた」さやうサ、あそこのおるいも、めうなものでござり升、ぼく「あのおるいの事で、あとの月やしきの客が大吉でなにやらおかし、すもふのばんづけをこしらへたげなせ、きん「はてな、きた」大關はさしづめ出東と紙安であらふ、論語に、しよくするときはものいはずとさへあるに、此三人はいろくの悪口云ひながらおくといなや、きん「サアいかふじやあるまいか、ぼく「ハテせわしない、きた」きるものきかへ、およねさん、今夜はねまきかけいでもだんないせ、おとこがもつてきたおよねさん、今夜は、泉平からといふはうのかはにて、じつはわがいることとしてあるおやまからおした状にて、こよひしばあうらあたりで、出あふと云ふやくそくがしてあるゆゑなり、その所のやう、きん「およねさん、いのちのだんにて御らふじ、妙でござります、きん「およねさん、いつもながらおやかましいの、およね」なんのマ

アあなた、とあがり口へ行燈をいだし、きたアノ机は、あんなりでなをしておくれ、サアまいりませう、と三人が

○ちよつとおことわり申上り、これより此三人の客、げいこは小梅、かめ、かう、お此、小ひな、なる、たいこもちは十九、糸八、元八、與八、小名八との大さわぎ、のちにやばく金山がなじみのおやま、けいちうのせりふ、喜多市はしばらうらのであひやどにて大くせつまで、なかへとくり升けれども、それではあまりかみが多く、はんもとめいわくいたし升ゆへ、先はこれぎりにて、あとの所はかうへんといたし、近日のうちおめにかいませう、

此書余が手に成れりといへども、書中に所謂八木、金山、喜多市の三子が雑談を、ありのまゝにしるせるものにして、余が愚意をもて著作するにあらず、必ずみる人、その邪僻の罪を、余に蒙らしむる事なかれといふ、

甲寅冬開霜月八日
作者 花 丸述

北華通情終

北華通情跋

妙なり奇なり北華通情、著して揺るものは春光園花丸なり、需て弘るものは春曙館舎貞なり、この兩士はそもくわが竹輪の友にして、二八の春を三八に倍易の秋、温六河嘉に會飲て、おのく葡萄の義をむすび、稗史の工作者はなしに、終にこの冊を耕といへども、花に風月に卯天、蕎麥に居浴桶の故障あるを腿て、予に尻を乞ふ、曾て古人いふ事あり、不負者北秋風掟と、遅せずして速にしかいふ、

きらく

跋

青松亭の机上に、たはれぶみの小冊あり、これをひらけば、忽然として忽生戀々之情、是をまけば、驚怖して示懲惡之教、呼乎虚か實か知るべからず、文の葉ずるに花を咲かせ、情のうてなに實をむすぶ、堤に

鳴からず、たんぼにすむ蛙まで、いづれか是をほめざるべき、書肆何がし、うもれ木とならむ事をかなしみ、櫻木の花を咲かせ、また來る春の色にちらさばやとしかいふ、

寛まつりごと九とし
門人千聲於青松亭之机下揮毫

猫洒落誌叙

金華の猫王、十里に鼠を遠ざけ、薄雲が蒙貴は、晉子が句にいちじるし、銀子二角のしろねこに愛ては、ひとりまつ夜の鼻歌枕に、西行上人のいにしへをおもひ、金子百疋のどら猫に化されては、ふたり添寐のつれづれに、兼好法師のむかしを笑ふ、竹格子に嘯て於兎猫は、和藤内の對偶にえられ、桐火桶にうづくまる灰毛猫は、獸炭のかへ玉かと疑る、熱爛ざらひの猫舌あれば、しげくかよふ猫あし有り、鼠とらずのまい組、盗みぐらひの天下卑藏、あわびを椀の貝焼に、直し肴の午房尻、あちらそむけた猫脊中、這廂むかせる猫撫聲、狂ふ屏風の蝶つがひ、牡丹は横のからくさに、寒いと踏込むまた、びから、涎を流す私語、そのきぬくのからす猫、首だけはまる首玉に、ちよとちりめんのみげゆはへ、結ぶるにしも金次第、猫に小判の譬にあらで、十二時計の猫の眼ほど、をりく替る新板の、すぢは鰻か鹿馬介が、智恵を揮た粉ナやの猫、筆の雉子毛の猫じやらしに、頼れて

書序じやわいにやアと、いひたい事を猫んざい、糞しの砂のはさげもの、それが趣向の箱まくら、猫の月額の割床に、たつた一ト晩つき合て序す、

めて度春

曲亭馬琴門人

くわいらいし述

自序

昔梁惠王は、廣庭に臺をつくつて、花鳥茶屋と名づく、此樓に居つゞけをうつこと、凡三百五十餘日、今淺草の廣小路に、鹿茶屋、孔雀茶屋、兩國の廣小路に、珍物茶屋ありといへども、豎川の横手の猫茶屋にはしかず、彼れが廣庭にこへたる鹿あれば、是が部屋に瘦たる柳腰あり、孔雀の尾に光る玉あれば、鳳凰の合着に赤を好む師衣な玉あり、鹿茶屋の小鳥ねぐらにつく事あれば、猫茶屋の子供もとやにつくことあり、珍物茶屋に足のある蛇が出れば、めつそふに手の

ある新子いづる、珍物の渡り物に、唐阿蘭陀のところかはれば、品川深川の子供も藏がへして來たり、猫の目玉より變る、晝夜の五ッの床に、あんがりめの肝積客もくれば、さんがりめの野暮客もくると、ぐるりと廻つて猫茶やの世界を、このほとりの俠客に尋ね、洒落本一冊につゞりて、猫じやらしとは題す、

未の初春

正徳鹿馬輔述

附言

唐人の歌に、黄金乏ば交り厚からず、大通の懐中つめたく容暖にして、三時遊の苔驚しに、まはしへ南鐐をうつとも、一片の裏ぐらひに通といへども、子供の足となる事を得んや、足の近き客人には落をとられ、數度の馴染はやぶれたる襦袍に、寐まき襦袴の虱を、百疋の床にうつすとも、豈女郎のさらふ事あらんや、秦

皇十五城を質に置ても、此美玉をばいなくべし、貧すれば緞子の夜具も着ず、長きものには人もまかれ、丸き物には猫もじやれつくと云々、

○泊りを急ぐ鳥猫は、黒仕立の二人一座

○一つ眼の玉を時計につかふ硯ぶたの柿のたね

○聞の妻乞ふ雉子猫は、風返しの寐巻姿

しごきの帯を首玉につかふる元の大手事

云雀立



猫謝羅子

鹿馬 輔著

唐土の親玉がつらねに曰、若キ時は血氣盛也、謹こと色にありと、これを守るものは、戲場でする五郎か、腐れ儒者の息子かぶ計り、今の大通は、口に美食をくらひ、眼にはふだん正月の思ひをさせ、耳には豊後節の情をわすれず、鼻にはじや香の匂ひをひきこみ、樂にくたびれて煙草が好になり、風流に酔てさけをはじめ、うわべは野夫とみせても、心いきははるか介六ものきやアがれといふつもり、爰に何屋の亭主か、所は葛西の入り口に幾丸と呼ばれて、年頃は三十近く、ふところは本町の鼻がみ袋やのいへ名をたんと持、あそびは久かたの雲井に近く、氣は百會にすみのほり、けふはよ所ゆきの容と見へて、結城の松坂とみへるやうなやつをはでにして、させる煙草入に白を用ひず、鹽のあめへのとひたへをぬくのは、今時ははやらすと、丸じりの雪踏をぐつとはき捨てながら、柳橋あたりの料理ぢや、のおく座敷へとをる、いつたのためにしや、女ぼうも、ありがてへのおめへさんといふ、ふるひ

せりふをいわすに、なちをとるつもりや、いく丸、ていしゆ留、今日は何ぞつちへいらつしたへ、いく「おらアおめへのとけへてへして、とんだ氣の毒でならなんだ、といふ丸が友だちに伯亭と云ふ宗匠が、拂ひのこりこほりがあるゆへ、きたれへやつたと思はれめへと、ぐつとてめへが引かぶつて、たばこ入から金を二兩、いく「こう留さん、まアこれをとつておきねへ、といつ、とめ「何さんば伯亭さんでも、それじやこまんなさりやせう、そしてちつとしこなし過るね、そふいふ人の尻をぬぐふなア、一ばんはねたやうで昔の論におちやす、そしておめへさんからおもらい申ちやア、筋合が違へますヨ、とけへす所へ、女大ぶたへどんうしをさげきたる、今幾丸が買ふげい、女、いくさん、おはつさんをそう申ませうネ、いく「いんにや、お杉がいるならよんでくんねへ、女「なせへ、今おはつさんが久米川からあきましたよ、いく「何さ、お杉をいちばんなぶつてやる事があらア、といふと、こゝろへ、女伯亭さんがおいでさりとはしごを大またに上つて、とし頃四十ぐらゐ、むかしは大門もうつたといふふうで、島ちりめんの上ぎすをまくつて、少しまへこごみになつてくる、是は神田でゆひおりの酒やで、はいかいに身をゆだれ、金のなる木は、せつちんにうへごみにしてゐるといふつらつきをして、いく丸とは兄弟のやうに心やすくしてゐながら、女とはいかしの事にかゝつては、いきちをあらそふ心の内は、誠につるぎのをはわたるやうに、何事も金でせれるせんせいのてんじや、此伯亭じつはお杉をいかにしてははれたらな、いく丸にきか

めへと、法をもつてこゝろはせいお杉をくどかんと思ひの外、いく丸が先へおすぎに口をかけたるやうなほどつて、あじにこゝろをゆけてゐる、ほどなくして、留「サアわつちがいろをつれて來やした、とお杉を伯亭がそばへやる、伯亭めりやすの文句をつもりで、伯「おすぎさん、なんぞおもしろいめりやすを聴聞してへね、杉「おまへさんのお作を、此あいだおうたとうちで、よくさらつておきましたから、マアうたつてみませう、とさみせんを、アノ喜介どんや、おがみのごせうだから、内へいつて箱の上に、このくれへなほんがあるから、ちよつといつてとつてきてくん、女「ア、おもしろかるうのヲ、聞てへの、いく「ばかな事をいつたもんだ、それを聞ていと夜があげらア、そりやアそふとお杉さん、おめへいる男のそばじやア氣がつまるだろふ、ちつとこつちへきねへ、とおつちや、すぎ「あんまりぶしつだけだからさ、といつて幾丸がそばへ、めいわくそふな顔でだまりですばる、これはじつは伯亭にだんくどかされて、よんどころなくいるのもりゆへ、いく丸になぶられるのをくしく思ふさまなり伯亭もさつきからみ、なすまして是を聞て、まだわたさぬおまつりなれば、のちくぶち、わしに、いく「かみさんなん時だもなるふとおもひ、心をいためる、いく「かみさんなん時だへ、女「まだ四ッはうちません、留「伯さん一寸お耳を、と下へおつて、この頃の、すぎ「ほれた身ならばしよこともかんじやうをしてゐる、

ないが、義理じやわたしも實はいや、といく丸がまへのくり返す、いく「ソリヤなんの事もねへ、柿をかつてしぶひから、けへそうといふよふなもんだ、すぎ「あれさ、とめんどつになり、口でいく「おきアがれ、人のいろをするのをおれがしるものか、とんだおめへも苦ろふせうだ、と益をとる、お杉片手で、すぎ「せんと伯さんがいいなさるにやア、幾丸もおへねへよい、だ、辨天とやらの女郎は、外にしんの色事のあるものしらねへで、十分てめへがほれられたつもりでゆくといふなすつた、いく「こいつア大わらひだア、おれよりか伯亭が女郎が、實はおめへさんの一座だから、出やすといつたアな、こんやつれていつて恥をか、せてやるべい、くそがあきれらア、すぎ「ほんにわつちが、こんな事をいつたといふなさんなよ、といく丸をけんくわをさしきへ出ぬくめんをする、これもあたりのある事ゆへ、いく丸がおめへぎつくりとあたる、伯亭がほれられたつらで、べんてんのおかめといふ女郎をかひしが、あまりおもしろくないゆへ、今はこつちからつきだしたつらで、此ころはおすぎがいるだといふのを、いく丸もにつけて、せいとも、いく「コレおすぎさん、今のいたこがほんとうなら、こん夜せひ、伯亭をつれて行にやアならねへ事があるから、おかめが所からきたつもり

でにせ文をかひてくんねへ、おすぎもいく丸にまんざらで
もなきゆへ、いなともいはずの
 へがみに、よひ御げんのかづく、をかきおはりたるころ 留「ふ
 へ」伯「留」はしこをばたく上り、からかみのそとから、
 ぎものみつけた、伯「幾さん、いろ男といふものは、ま
 たかくべつなもんだね、となんにもやうすを知らず、只おす
ぎをうたぐつて、いろくこゝろを
 引つもりで、な 伯「サア幾さん、おらアけへるせへ、いく
 ぞなける、
 「マアまちねへ、かんじんのものをわすれた、コレ此
 文をみてやらつし、と見て「ふてへやつだ、此文での
 ろくなるをれでもあんめへ、とほふり出して、きせるた
ばこ入をしまひ、立そふにす
 る、
 伯「伯さん、此いく丸が使者にたつたをむにす
 るか、はく「あれお杉が顔をみねへ、どうかおれをけ
 へしたそうだ、とおすぎがかほをみながらいへば、こつち すぎ
をむいていく丸が足をつれりながら、
 「マアよふござりまさアな、しかし今のおふみじやア、
 おいでなさらざアなるめへね、それだからおとめ申
 すも、おきのどくだね、いく「サアいこう、と伯亭が手をと
る、ていしゆ女房 三人「ハイさようなら、是より伯亭は、柳ば
すぎおくつて、
 とするを、いく丸はむりに止 いへ、あれだつてもかわひそ
め、兩ここのほうへくる、
 うに、木や石じやアあるめへし、人にほれめへとい
 ふ、かたへ事もねへじやアねへか、夫はそうと此あい
 だ、あのべらぼう判者めが、かなちげへの句をぬき

にしたとよ、とはなしながら、一ツめのはしもいつかとはり、友だ
ちの宗匠をわるくい、ながら、はいかひのはなしの
 みにてと 伯「かの西施のごとくなる婦人の宅はどこ
 だ、いく「アノ跡のかどの内がそさ、とい、ながら天戸の
くやりをはいる、伯亭
 もつひてはいる、かのせいしのごときといへるは、此里の軒近き
 に、くるがみのつやはがはらざれども、おつとはいつ世にか、あだ
 しのつゆときへ、おときかほばせをむなく月日を送り、唯月ゆ
 きはなにのみ心をなぐさめめに、いく丸はうたの友なりけるか、い
 つしか人しらす幾丸にふかく心をかけ、玉づさのかづかさなるとい
 へども、幾丸はおさげにのみ心をかよはして、へんけいのごとくの
 あいさつなりければ、おつめはをのがうつくしきにほだされて、おさ
 げにみかへられん事をふかくうらみて、しゅういく丸おさげが中の
 じやまを むすこ、女房、姫「アアおいでなさへまし、伯さ
んおとふくしうござりますね、むすこけふはどこ
ぞの會ぐづれかへ、いく「なアに、と云ながら二 娘おぎ「お
てうしと硯ぶたをはやくだしや、へやへ口をかけたに、
いく「芝居はどふだの、伯「なんでも出来さ、いく「白猿
が口上計りでもきつものさ、伯「是は論外の役者
だ、ときにおさかなもありがてへ、おねげへがあら
ア、どうぞ湯豆腐をしてくんねへ、今まで留がところ
で呑んでいたら、腹がぐにやくする、ともう少々み
へをはじめる、
 伯「おめへせんといくさんの一チ座で、みつさんとい
 伯さん、此あいだは、と座に、 伯「モウ二人計り、子供衆
 を呼でくんねへ、いくさんとふだ、いく「ウ、よから

ふく、「とおしげおそでないにきたる、「是へいつへつぎ
ふく、伯さん一拳いかふ、此間蓋四五どにおよんで、 伯「お
 らアよわへ、おむすとうちねへ、と此時となりさしきの女
郎、嘉吉さんうらみだよと
いひながら、二
かひをおりる、 伯「加吉さんじやアさした、とうしろのび
 り引ま、伯「そのはりませはなんだ、親和もいやだの、
わす、
 夫でも唐畫か、ちらかす、あんまりひらつてへが、おそ
 でさんおしげさん、おうつくしいね、二人「フ、ン、娘
 「サアどなたもいつておいで、今晚は客人が多ふござ
 りますから、伯さんはこへおやすみなさりまし、
 としられへ人のとなりへ床が廻る、しげ「わつちやアおそろ
 とき納れば、しげ、そでへやへかへる、しげ「わつちやアおそろ
 しくよつたよ、そで「せめられやうじやアなし、い、の
 さ、しげ「そりやアそふと、さげさんの、りくつの、此
 ごろいくさんがつきるへで、か、見やのうちへきな
 すつたとき、むかふのおつめさんが、いけんがてらに
 そふいつたとサ、そで「おさげさんの、いくさんにかこ
 われる事も止になつたそうだの、何がどふだかしれ
 ねエのふ、しげ「インニヤ一昨日のばんも、いくさんの
 となりへ床が廻つてねていたら、何かあらひあひ
 さつばつかりで、さつぱりとの字なんザアなしさ、此
里
 での字があらひといふは、「それでこんやア、いちかばち
 ひつ、こひきやくないふは、

かといふつもりで、きなすつたんだよ、そで「あのぐ
 れへ足のちけへ客人はねへよ、それだものを義理の
 わりい事をしちやア、どんなめにあつてもしかたが
 ねへのさ、此ぎりのわるいといふは、いく丸にこゝろをかけしお
こをおさげがいる事に、のつ引させすむりむたいにとりもつて、いく
丸にはなをあかせんとたくみし、こゝろの内こそおそろしき、おさげ
も今はせんかたなく、うわべはいろのつもりに見せかけて、かりの
まぐらはかわされど、ばつとうきなたちしは、せひもなき事也、
 しげ「おめへせんといくさんの一チ座で、みつさんとい
 ふ客にでたの、そで「そふさ、めへどしんいせやが、田
 中やのとなりになつたじぶん、はやし町からみつみ
 つみといふ坊主衆がくるといつたから、それじやアね
 エかとおもつたら、やつぱり材木屋だよ、そのじぶん
 にやア天戸やで、むこふ河岸の宗匠とやらが、わつち
 がとけへきやした、とよるとさわる客のうわさ、はやしんし
ゴオン、いく丸は中ざしき、伯亭はおもてざしきなれど、間か
づもなく何事も手にとるやうに聞へるゆへ、おかめがいふ事みなふ
るせりふゆへ、これをいく丸にきかまじと、よひか、 伯「コレお
 らせなかあわせで、これいく丸にきかまじと、よひか、
 かめ、わるくしやれるねエ、ちつとこつちをむかねへ
 か、かめ「アレサ、せつかくよく寐ているものを、何を
 しなはるへ、おめへさんもよくかんげへて見なせへ
 まし、成程せんどから、二三度もきなすつたけれど、

ほんのいくさんのつき合ばかりで、よんどころなく
 きなはるものを、わつちだとつて、あのこたちのめ
 へもありまさアな、せんども雨の降る日なんざア、ど
 このか會で、雨ごくまできなはつて、おめへさんのき
 なはんねへのに、しまつておかれただけ、なを外聞が
 わりいじやアねへかへ、それだからもふせんどぎり
 できやアしなはるめへとおもつたら、どうしてこん
 やアきはつたへ、いべんぜつでしめつけられる、は
 めへそんなら、おれをこんやアいぢめるつもりで、さ
 つきのふみに、こんやせひきてくれろといつてよこ
 したのだな、かめ「ナニうをばつかり、どれおみせ、
とふみをつた、くりよんでみて、こりやアたれにか、とはいつて見たれど、
かとお、あい上アました、と伯亭がまくらの、まあさうい
 ておどしたのさ、しんじつこれから足をちかくきて
 おくんへへ、伯「くるのさく、とてもおめへたち
 のやうな手のある女郎しゆに、惚られてへのなんの
 といふ、もつてへねへこたア思はねへのサ、かめ「そ
 りやアうれしいねエ、といつてほそひへになつて又ねむる、
がら、だまりんで、さけ「幾さん、これほどさつきからわけ
 をいふのに、き、わけのねへおめへはんじやアなか

つたが、なせこのやうにこゝろづよくなつた事だの、
ウ、となきこ、是このあまア、ふてへべらぼうじや
 アねへけへ、コレ何もかもおれがむね一ツでりやうけ
 んして、今まじやアうぬにか、れたも、みんなおれが
 こゝろがらだと、あきらめりやアすむことだと、もの
 をいふのもけがららしいから、だんまりでねてゐる
 まくらもとで、き、わけがねへの、こゝろづゑへの、
 よはひのと、伊五がよし松をだますよふに、そふ手
 がるく泣ねいりにする幾丸だと思ふか、われがどれ
 ほどかくしてもナ、茶やのむすこといふ事だといふ
 こたア、とふから耳へへ、つてゐるわへ、そふいふ心
 たアしらねへで、今さでうかゝ來たのが、十萬坪じ
 やアねへが、ほんにうめやうがねへわへ、とそばにあり
くらをとつて、ニツみつた、かかれても、たせんかたなく、いふまはしま
夜着のたもとに、いひつひて、聲ふるはじてなきいたる、いふ「コ
 レへ、女郎のうそなきそらざしやう、そんな手とい
 くのろ助だと思ふか、とふとのそへおさけをつき出し、よ
く丸が、かみ入のさすがをとなつて、小ゆびにおしあて、すで「これ此
にきらんとする、いふおきなを、おつて、き、うでをとり、
 あまア、すぶてへしうちをしやアがるナ、まだ此うへ
 に此い丸に、あめへうきなをたてさせるつもりだ
 な、コレいまだきそんなやぼなこたア、はやらねへわ

へ、ゆびをきるのうでをきるのと、かたきうちちのま
 ちげへじやアあんめへし、こふいやアどふかおれが、
 のろくなつてとめるやうだが、これよくものををつも
 つてもみる、此茶や町じやア、ちつたア人にもつらア
 みしられたおれが、二才子供のするやうに、こゝの
 女郎にゆびをきさせたの、ほりものをさせたのと、あ
 だなうきなアたてられちやア、人なげへかほが出せね
 へは、とつよみおれへど、さけ「おめへさんのはらアたち
 なはるナア、みんなむりたアおもはねへけれど、わた
 しも又うちあけていわれねへぎりがあるけれど、も
 ふこうなつちやアいはねへけりやア、おめへさんがい
 つまでもうたぐんなはるから、マア一とをりきいて
 おくんせへ、そのわけゑへは、ソリヤアなるほど人
 の口だから、いろがあるのなんのと、やうすをしらね
 へもなアいはふけれど、これにやアだんゝわけのあ
 る事、おめへさんにいわねへけりやならねへといふ
 は、こゝのことさ、おめへさんもしつていなはる、お
 つめさんと勘さんさね、此勘といふは勘太郎とて、此邊
に名だかきとなりものなり、だ
 んゝの義理づくで、喜のさんと茶屋のむすこ也、いろ
 ごとになつてくれろと、のつ引ならねへわけゑへさ、

此間勘さんがいふにやア、幾丸さんとおめへのわけ
 もしらねへおいらでもねへ、それをしりつゝたのむ
 のだ、もしおめへがいやといやア、いく丸さんと手
 ぎれをさせるほうもあるのなんのと、むづかしいこ
 とをいふから、まづしやうちのかほであいさつはし
 たが、いつそ此ことをおめへさんに打あけていはふ
 かとおもつたが、もしひよつとおめへさんのかんし
 やくにあたつて、若たんきな事でも出來ちやアと、あ
 んまりおもひすごして、かくしていたゆへ、おめへ
 さんにはらアた、せたり、わつちもいろゝとくら
 うしたり、とうにうちあけていつたらよかつたらう
 に、いまいふ通り氣短かなおめへさんゆへ、今までか
 くしてほんにくやしい事をした、こふうちあけてい
 ふからア、もしかんにんしておくんせへ、とだんゝ
なみた
共にいふ、
 さてはおつめが悪心にて、おのれがしかけし色事
 の出來ぬゆへ、おさけとおれが手ぎれをさせんと、
 はかりしこと、おもひあたつて、幾丸も大に心お
 れる、おりしも先程より、いろゝと氣をもみしゆ
 へ、おさけが持病のしやくぐつとさし込ミ、ウンと

そり返る、いく丸もはつと驚きいだきおこし、胸先へ手をさし込んてかいほうするに、なをも差込みくるしむてい、折ふしあたりにも水もなきゆへ、幾丸は手をさし延、まくらもとのてうし引寄せ、ひや酒をぐつと一口くちうつし、わが身にひしと抱そへてかいほうするに、少し心づきしや、めをひらき見れば幾丸ゆへ、おさけはうれしく、すぐにいだきつく、幾丸も今さらにはなせの聲と共に、おさけは屏風引廻す、是より跡は只みす紙のおとのみして、寂々寥々たるねやのさま、漢の武帝楚の襄王が聞もかくやあらんと、作者も筆をとめてよだれを流すのみ、

かくて伯亭は、さいぜんよりねもやらず、あまりたいくつさにそつとおき上り、火ばちへすきはしをおりくへて、さげのかんをしながら、ほつたてみ、ていく丸がねやのやうすをうか、ひ、△かくするうち、あるに、いく丸がねやもひつそとじづまりける、△はや萬戸にさけぶ雞の聲々、や、しの、めちかく、伯亭はよもすがらつまらぬめにあひ、あくびまじくらさかづきをとりあげ、すりりふたのくひのこしのし、たけをつま、伯、トキニあすは八町堀の定會、あんでくひながら、

廿六日はアノ會ト、これも、と云ながら、手帳を出しくりか伯、モウ夜があけるかしらん、とのつそつ、ついでついで、あた

わるからうせへ、おれがおきて、聞やアしめへし、いかげんのうそをつかつし、といるのある事がしれて、いくり心でいふ、いく丸はぐつと平氣で、いく「ときに伯さん、いふべのねやのむつごとを、じつにき、てへの、がらおきあがり、みづ、いく「伯さん、一べへのんでいこうじやアねへか、伯、それもよからう、いく「そのてうしを、伯「アツト承知、おれがおしやくをしやう、いく「足下のそでがまつくろだせ、伯、ほんにどうしたか、たばかり、はしをくへて酒のかんをした、てうしのすみがつきしをそれともいはれず、おきて、きいた事をしられたかと、少しせき面

く「伯さん、一べへのみねへ、伯、イヤおらアのむめへ、夕部兩ごくで呑で、又こ、でのんだから、いく「ハテぐでんになつても、朝のさけはさめらアナ、なんでもさした、トキニ伯さん、夕部はだへぶおかめがおめへにあつたの、しかしそこがやつぱりおめへがいろいろ男といふものだからサ、とおもいれくわれる、伯亭もきかれしかと、少しせき、この折から、伯亭があいかたのおかめ、眼をさまじみれば、伯亭も見へぬゆへ、おき上り小へんにゆく、おさけも同じく小へん所にてあひ、二人一所に來り、せうじのかげに、このことなき、ふたりしが、あまり伯亭がうぬをいふゆへ舌を出す、明がたのともしびきへのりて、せう、伯、おさけさん、誰に出す舌だ、へ、てもちふさたなり、いく「きのどくゆへ立て雨戸をあけ、

りの客も羽づくろひするてい、のき下をね、伯、だへぶあかるくなつた、と戸を少しあ、伯、コイツアもう、我霜中の衣を射るといふ時分になつた、とおびをしめなを、しはをりなきへきて、せう、伯、幾さん、もふおらアけへるせへ、コリヤアどうだ、ねつから無人島といふもんだ、コレいくさん、おらアけへるせへ、おめへは定て居るこつたらう、いく「ウ、ンたれた、伯さんか、伯、サアけへるせへ、どうするのだナ、いく「マアはいんねへナ、まだはるへじやアねへか、伯、いく丸が「コイツアくれエせへ、とあかりを、殘燈無、焰影憧々だ、とい、ながら、いく丸がきたて、殘燈無、焰影憧々だ、がまくらもとへくる、いく「マアすわつて一ぶくのみなへ、さけ「伯さん、そうしたもんでもごせへすめへ、マア一ぶくおあがりなせへし、と一ぶくつけて出し、いく「伯さん、夕部はこうせへにおむつまじかつたらふ、伯、いめへましい、とんだめにあわしやアがつた、しかし手のある女だせ、あれでよばふといふのだ、しみをいふ、幾さん、おめへこそ夕部は、韓雲孟龍のちぎりだらふ、いく「ナアにおれがほうからつき出してやりやした、よこつたらアおもいれいやといふほどくらアしてやりやしたアな、伯、ならふならくつても見たへが、つき出すはお

「ア、だへぶさむさにみがいつてきたわへ、さけ「おかめさん、とんださむいねエ、伯、モウ人の鼻から、けぶのでるやうなさむさだ、幾さんこうもあらふか、つく息に秋の名残もしられけりだ、いく「ナニヨウいわつしやる、サアござりませう、と立あ、これじやアつちうちか、てんつ、のみや神樂で、へへろうといふ見へだせ、伯、それでおもひ出した、せんとどのちやわんはどうなつた、いく「此中ありやした、あんまりきうになつたから、公の所へそふいつてやらなんだ、それについて大笑なはなしがあき、伯、その咄マア道でさ、やせう、とんだおそくなつた、サアあいびねへ、いく「マアまちねへ、たびをへへていこふ、おびをしめなが、けさアだへぶさむひ、アレみねへ、むこふに霧のか、つたけしきやア、べちやアねへ蛤のつゆといふもんだせ、といふところへ、ものほしの下をむきみうりが「ばかばか、とほりか、り「伯、いく「二人がかほを見て、

猫謝羅子終

跋

化物の棟梁一ツ目の傍、三股を西南にみる所に、猫股屋舗あり、未爪を隠さぬ新造猫より、化そうな年魔猫まで、みなちよつかいを出して、客をひきかゝんと欲す、御勤は眼玉の替る二六時中、十二兩に定めあれど、西行法師が猫の白銀二片を投て、女三宮は猫を繫絲の釣をとれど、客は三毛猫三兩の釣をとらず、上氣の猫は緋縮緬で頭を結び、物前の客は眞綿で首をしめられる、地色とねこの聲聞ば、女房をつめてにやん房といひ、夫婦を延してぶうくと約束す、たまたまのら客來りて、茶屋のつとめを引みるとす、これはを舊鼠かへつて猫を喰といふにぞ、我弟鹿馬輔、かの猫茶屋の意味を書付て一冊子となし、鼠半切のはしにかひつける草稿を、猫の毛の関するに、紛ひにあらぬ本は丈、きなる哉妙なる哉、嗚呼猫狐ならず、必ず隣有、軒をならべて五六軒、三とせ馴染し猫の妻、もし戀しくば、三絃の音だにこぬ此樓上におゐて、能猫を養ふ人、猫その恩をわすれて、反て養ふ人

をくらふ、四方の俠客猫を愛するとも、よく是を顧て、猫に家屋敷をひかる、事なかれと、予猫のひたひ程なるあばらやに、日なたぼこりしながら、牛房ちりのしりゑに序す、

千差萬別識

南門鼠序

北廓の屎所は牀障を隔て、八町の封疆よりも長く、南樓の屎廁は重屋に連て、百歩の殿山よりも高しとは、金々先生の謔言にして、知る人ぞ知る世界の洒落、其拾瀝史に嘗て予が言あり、臣曠東山灑落は糞ほどあつて、しかも失屁の如し、此に鹽屋通人、品江の娼臺事を穿に、誠珍織秀綱にして、谷山麓の溺愧桶の淺き口元より、後地の糞壺の深き底までを挿して、頓に一部の小冊となす、嗚呼糞街の牛屎も糞と成の奴作、正に可感の彗震也、時を見て石落と言輩は、未南門の内溝雪隠を不知犬屎にして論にたらず、又屁の中落と嘲仁あらば、尻首を口滌也、后屍を嘗させむや、此糞を喰への奈愚嚇言にあらす、眞に眼に屎を踏だら鈍憶ならんと、予屎擱に毫を采て、唯此書の正味のいみ有事を考所の口に立て、エヘンと咳拂をするものならし、

申春へうひ戌の方にむかひて大小便せぬ日

大田舎一圃吐

自序

聞説、いつ來なんすの捨言葉に、明後日と紺屋めきたるは啞ら敷して、未馴染の薄俵をしのぶ、然りといへども、かさなる首尾にいつしかきぬぐの別をおし、み、互ひの袖を絞りに染、藍天鵝絨の逢ぬむかしを潮來節によせてかこち、鐵御納戸の堅き誓をするに及んで、身もまかすべき實かと思ふに、花田染のうつりやすくして、忽元の白地となれるは何の事ぞ、それは浮氣な水淺黄といはん、是思へば子供遊びの女夫事におなじ、若其しんにはいらんとならば、丁子茶のば、つ子成共、はやそめ筆の初の座敷よりして、咄しの手爾葉の藍見るちやとならんおもむきを、硯の海に筆をそめて、今や南門鼠とよばしむ、

染物屋にゆかり有

紫の色主述

男藝者之部

女藝者之部

岡安小三郎	常磐茂藏	文字仲つる	治てる	吉なを吉
浅井此吉	老松庄五郎	豊しの大	吉み	つくめ吉
西村三藏	杵屋彌吉	若しげゑ	ん駒	吉竹吉
於猿彌重	豊竹牧太夫	よふ豊八百と	ら豊	吉吉
中村清吉	杵屋圓次	たよたみ久	吉かの吉	
目久保久藏		そよます磯	吉かつ	
中村榮藏		吉次みの吉も	とたか	
中村長次		ふさ留次り	んるん	
白屋宇十		さき里吉も	んか	
杵屋錦三		豊みき春吉か	う文字きん	
杵屋久次		いよ増吉文字ゆり	八十吉	
中島松藏		うたとき今	吉くら吉	

南門鼠

鹽屋色主著

閑に居て騒が敷は楽しみ易く、騒がしきに居て閑はたのしみがたしとは、美濃の支考が獨樂の本意にして、根岸三ノ輪の隠居所とはまた異なり、爰に南遊と云へる者ありけるが、商家に生れながら其道にうとく、連歌俳諧に心をゆだね、赤羽根の邊りに別荘をしつらへ、爰に閑こもり、言の葉種にしをりして、敷島の道のまだ見ぬ奥にも、遊里のあらんことを尋いざさらばと云へる翁が發句には、御殿山の雪見もなつかしく、降つもりたる雪のあした、つれづれなるまゝ、火燧に居ながら、むだ書きなどして居たる折りから、潛戸を明けて來るは北庵、北「今日はお宿にいらつしやりますか、南遊イヤア是は、朝から何んと思し召てお出なさつた、お歸りがけかへ、北「イ、エ何ニさ、宗十が所へ茶入を見せ置きましたから、取りに參りますのさ、南「此頃は留主な筈だが、北「左様さ、るすかも知れませんが、南「きのふ私が所へ、餘所から金海の茶碗を持つて來てみせやしたつけ、よかつたが、いりも

しねへからかへしやした、北「あなたには有ルからいらねへが、それは見せたい處があつた物を、南「ハテ残念だつたね、トキニおさむかつたらふ、火燧へおはいんなせへ、北「左様なら御めんなせへ、御机の上のはアノ總評かね、お點は出來ましたかへ、南「イ、エまだサ、北「其御手本わへ、南「八町堀りのさ、北「ホンニ千かげ様ンの御短冊が有ルなら一枚イ下さりまし、南「ありましやう、見て置いて上ゲよふ、と咄して居郎來る、東「サテくよく降りました、先今日は、トキニ北庵さん、大きに間違て御目に懸りましたんだ、北「さやうさ、いつの儘であつたつけ、南「其筈サ、東「んも遊び所がちがふからさ、北「イ、エサ、誰であつたか、宿の内でお見かけ申したといひやしたわへ、東「よく出來合を言物だ、南「今日は是から、どつちへぞお出なさるのか、東「イ、エ、こなたへ參つたら、誰ぞ來て、有ふと思つてさ、北「そんならどこぞへ出かけるつもりだね、先御供の用意でもしざアなるめへ、東「なにさ、南「何ニさといつても、なきにしもあらずだらふ、東「ホンニ今參りがけに、千丁にいましたら、高輪の御屋敷へ行と申ましたつけ、あなたへも御

言傳をしましたつけ、北「花鳥様へかね、東「さうさ、南「けふははいかいでは有ルまいの、東「どうだか、北「花鳥さまも俳諧はおすきた、ホンニ此間あがつた時がおかしうござりました、誰のか扇があつたから、私がおかしく、世塵が來て居て、何にか讚をしやした、其扇を初山さんがみさしつて、女扇を五六本よこさしつて、是へ何ぞかいてくれるとの事でこまつたのさ、仕方がねへから略畫式の内ニ覺へて居る圖が有から、夫を書いて笑つて仕舞ました、南「イ、イ、と笑ふ所へまた表の、南「こんどは誰だらふの、東「勝手の方へまはるよふだ、北「そんなら方角屋だらふ、南「ウ、そふだわへ、と言つと、小僧、小「旦那様高輪から人が參りました、南「ウ、西助なら、こつちへ來さつせへといや、北「東さんも來てゐさつしやるといわたし、小「ハイト行、入、西介「御免遊ばしまし、是はどなた様もお揃ひあそばして、マツ旦那此間は、南「北「サアこつちへはいらつし、西「ハイ、東「さんさつそくながら、お渡し申ものがござりますが、東「イ、爰へ出しなせエ、西「是は旦那のと、ハテナ有りましたく、そして口上でも、夕部も雪が降つたに、

なせお出なさりませんと、いつてくれろとおつしやりました、南「ドレ〜、爰へいつ所によしな、おれが見る、北「どうりでけふ出かけなすつた、南「エ、ト、爰はなんだよめねへ、ウ、此間姉の方へも申遣はしたことを、東「ドレ〜、見せな、と引たくつ南「コレサもちつと讀せなせへな、エ、ホンニ、北「だれだへ、西「ナニサ新松のお政さんさ、北「そいつはい、取組だ、東「女郎のふみも人にみせるのは、先キへ聞へてふはむきな物さ、西「左様でござります、南「エ、いふやつさ、西「サテ〜、雪のせへかさむふござります、南「本に酒にしよふ、西「夫では私がねだり申たやふでござりますね、北「ナニサい、のさ、おいらはさつきから、氣が付いてゐたけれども、南「そんなら早くいへばいいに、東「そふいつても、北「庵さんは氣が付くよ、北「うさアねへ、南「小僧やア、小「はアイ、南「初に味噌漬を焼て、おかんを付ケろといや、ソシテ富岡へ行てナ鍋を一ツよこしなせへといつて來や、小「ハイと行、是よりいなくさかづきも廻る所西「御詔へ物が參りました、北「ホニニ宿だと、五十文もふけられる處だ、西「又悪口ばかり、北「うなぎではもふけがすくねへのふ、東「宿で

は鱧はどふもよくねへ、南「銀藏が所がい、はな、東「臺やはどこがい、ね、北「何でも川村さ、西「いかい事ござりますよ、北「村田か村の屋か十七屋か、ソシテ伊豆屋、橋本、しのぶや、山口、龜甲屋なぞもい、のさ、南「本宿の方迄くわしいね、北「大きにさ、西「イ、エ又ちがいやした、北「そんなことをいつても、大見世から小見世を懸けて、何屋の次が何屋だと聞いてみなセエ、南「ソリヤア誰でもしつて居るのさ、西「そんなら十八間の内、表二階に窓のない内が有りますが、御存でござりますか、南「おいらはしつて居ルはへ、西「マアだまつてお出なさりませ、東「ハテナ、氣が付かねへはへ、北「い、かげんなことをいわつセエ、南「是はどふだ、品川通のやうでもねへ、西「モシうそなら、氣を付けてごらふじまし、北「一チばんおれをへこましたな、其代に茶屋のあらすをいつてやらふ、先大の女郎の九がけ拂ひは當りまへだが、わるくすると小の女郎で、二朱とるなぞはふてへせへ、西「夫レはそふおつしやりますな、人にも寄ります、北「マアそれもよしだが、六百文拂の新造も、並に取るだらふ、西「コレハ御客の方で、損もいかぬことだから、よふ

ござります、北「まだ〜、藝者ではひどい、東「そんなにもふけの有物かね、西「ナニそんなにもふかる物だと、私共も土藏でもたてますはな、北「もふからねへ、其筈さ、一步の内チから藝者の方へ八百八十文拂ふからさ、南「餘慶たんとでもない半分たらずだ、北「うさアねへ、東「げい者の取ところは、夫レが正味かへ、西「まだ其内から、會所へも百五十文出します、北「そして口を懸ケに來た人には、一人で十二文宛遣るの、かけ集にも十六文か廿四文とられるの、南「げい者も一ツ計り賣て居ては、つまるめへ、東「左様さネ、北「所を茶屋が拂ひしねへから、よはるだらふ、西「ナニそんな事を、東「そふしたら藝者が出まいね、南「出ねエぐらいか、仲間へ何屋なら何屋さ、かけがたまつて拂らひがないから、一向出ませんと札を張て歩行はな、東「そふして困らせるのだね、北「そこでとめられた時、客が呼ぶとでも云ふと、若者を頼んで見世口に、掛で貰らひやす、其代に勤と一ツ所に拂はせるけれども、西「そふおつしやりますな、勤はげんきんかちつとの都合はしねへではなりません、東「夫も尤だ、北「其都合は切手ニ掛合ておくから、卅日迄はい、はな、正月の

内は猶い、はづだ、東「なせエ、北「客人の方からは、仕舞金をば先へ取つて置て、旅籠屋は、南「十一日勘定の事か、西「とんだ事を御存だ、北「其くらゐな事を知らねエでどふするものか、若し其内會所の積金の内から、廿四文づゝ引手が取れるはさ、南「左達てんぎが居ル時分には、よこさなんだげな、西「さやうさ、此前焼の時なんぞは、帳面がやけたから知れねへと云て、とうとう無勘定にしました、東「づるい手合だなふ、南「今では雙義も心ぼそいさ、北「夫レだからお熊なぞをば抱込で置はな、東「女でもこわゐのなるふ、其マア雙義と言人は何んだネ、西「大見世の店頭でござります、南「あれはい、かぶだなふ、どんなにしても日一兩は取ルだらふ、北「大きにさ、暮なんぞ淋しひとときでも、十八間んで六百程づゝ商ひが有ルと云フから、是が先六六三貫六百文は這入だらふ、東「そいつは何んの錢だ、北「ソレカ、それは女郎一人り賣れると、六文づゝ、巴屋が取のよ、東「そいつは大きな事だ、西「其上に藝者方の理くつも這入りますはな、南「何ンでも雙義が株が一チ番い、北「あそこの家名はさなだ屋とすればいい、西「ナゼエ、北「六文錢だからよ、南「おきやアが

んなせへ、東「はやらせやしよふ、北「アノ人を除ては何んだらふの、西「旅籠や質屋でござりましょふ、南「ホンニしちやではどこだらふの、河内屋なんぞが初筆だらふ、西「大和屋ね、道明伊勢十か萬屋、東「萬やは増本の親類のか、西「あそこの女郎衆が、しちを置内でござります、北「大松の女郎は、向の松井といふちいさな米屋へ能やるよ、南「そして大松とし本が道明、西「三浦屋に湊屋かい勢十でござります、イエもふ質を置に不自由なのは高輪さ、みんな宿迄持ッて参ります、南「加田村はどうしたの、西「近頃はあんまり取ません、北「加多むらで思ひ出した、あそつから先は、錢相庭がねつからさまらねへよ、南「其筈さ、宿場なもの、東「さまりと云へば、藝者はいく組といふが定メだね、北「三十五組さ、東「そして、女郎の髪結も仲間でも有かね、西「イ、エ、そふでもござりませんが、あれも這入内がきまつておりますのさ、マア増本へはゐるお喜代杯が一チ番通りだらふ、ソシテあそこの内へは、お百も参ります、南「ソリヤアお八重が姉のか、西「さやうさ、南「常磐屋もあれだらふ、西「ふじ屋もおきよさ、大叶がおちせ、鶴屋もお喜代

にお吟ね、白木屋は覺へません、北「とし本がお仲お千世さ、南「むら田屋は、西「お喜世にお縫、東「大松は、西「同じことね、三浦屋がお千世、湊屋がおきんに、是は外のお喜代、北「増倉がお仲か、西「和泉屋がおきさにおよし、それから新松がお吉で、其外はおぼへません、東「藝者で今能出るのは誰で有ふねへ、北「げい者はいつでも出るのは出て、出ねへのは出ねへが、女郎では誰だらふ、南「夫も極ッて居るが、マア初りからいつて見な、西「坂のほふからかね、マア初りからめにして、あそこでお千かさま、富士屋でお照さんね、北「大叶で三津花、鶴屋でお類か、白木屋では附わたりのお龜、おふく、よしもとが元巻、そのなぞだらふ、南「村田で菊野井に此春か、こいらが品川中のお頭だらふ、北「大松がお竹、おしう、玉ふさか、三浦屋がお袖、湊屋がお角、増倉が菊川、西「和泉屋でおあきさま、常磐屋でお八重様計りさ、東「新松はおれが知つてゐる、其扇ニおまさだらふ、西「さやう、南「いなさつたね、北「そこで千代本だ、西「千代本はおきわさまサ武藏屋は、エ、トござりません、北「津の國がしげ里、千代づる、お年といふ物だらふ、南「増本が巻衣、

桂木、東「ソシテおれがひるきの小糸だらふ、西「お綱さんもきつものさ、ほんにお前さんがお出なさる時分も、いつそ惚ていなさるましたつけ、夫レだから今でも私が参りますと、そつと聞なさるますよ、東「又能そんな事を云よ、北「どふいふ氣だか、あきれるだらふ、東「夫レと云へば、増本の茶番を見なさつたか、北「私シらはいきやせなんだ、西「清吉が道の寶といふ題を出して、ハン／＼と云ふ落がおかしかつたとい、やしたつけ、南「大坂の寶でねこと云落があつたそふだが、それよりしびんを出した茶ばんの方が、聞た處が餘程案事がい、はへ、西「樂屋落は其方が能ふござります、南「品川の咄しを聞に付ても、今年に成ッても、ねつから女郎買にかねへよふな心もちだ、西「左様さ、此頃はお遠々しい方でござります、北「私シなどもいかねへが、此間々村田のこの春が所へ行大盡に、引摺れてまいりました、南「この春が處へ行大盡とは誰だ、北「夫芝のさ、南「ウ、知れた、そふしてどふした、北「先其晩は男禁制で、つる治、お艶、大吉、豊八百に照吉に今吉といふものでしやれやした、東「今吉といふのは誰だつけ、西「惣助が娘でござ

ります、漸々此正月の二日から出ます、東「どうりで知らなんだ、北「其夜はなり納つて仕舞やした、處が翌の朝になると、男げい者共が聞付て、宇十、彌十、久治、榮藏、清吉と五人押掛て来て、まだ寐て居る處を起て、唖しくつて成りませなんだから、大盡も大キに困りやして私シに言には、みんなを南へでも連れていつてくれるといつて、金を私シに預けて、一ト唖喧で座敷を切上げて、みんなを私にあづけて、大盡はまた寐て仕舞やしたのさ、夫から橋向の新桑名屋へ参りやしたところが、こつちの行よふがはいから、まだ身じまひも出来やせん、其内酒を取に遣つて飲初メてゐると、程なく仕度も出来て出て来た、所が三人は馴染さ、初は私と宇十と榮藏さ、夫レからお定りの通り盃もすんで仕舞と、大酒を始めてみんな呑倒れて、しよふ事なしに床へ引取てしまいやして、ぐつと一ト寐入ニ七ッ過迄やらかして、漸々目が覺て、サアかへらふとみんなを起したに、宇十が一向おきやせん、私もみんなも下へおりて、清吉を以て宇十をまた起しに遣つたら、宇十が云には、おれわ今夜居てやらねへではならねへといふから、そんならゐるがイ、と、

清吉も歸りをふにすると、宇十がモツトまつてくれろといながら出て来て、それに付てチツト頼みてへ事が有と、鏡を一面と浴衣を一枚持て来て、どぶぞこのつをまげて、其錢をよこしてくだせへと云から、清吉も氣味がわるひから、こりやアどふしたのだと聞いたら、宇十がいうにヤア、今夜は都合がわるいから、いらねへていつたら、女郎が是を都合に遣て、居てくれろといふから、おれもまんざらでもないから、ゐる氣に成つたのだとい、やすによつて、清吉もそのつを懐へ入れて持て歸つて、一貫二百文と借て、持せてやつたさうさ、南「こいつア何でも其日の色男だの、北「イ、エサ、そこにおかしい事が有やす、宇十も初會から女郎にそふされたものだから、其後段いつて遣つたそふさ、夫レから外の手合も又いつた時、宇十に女郎が立引をした様子を聞くと、初會の晩宇十でも居てやらねへと、其女郎は前の晩客人をしぐちつて、大きにしおきにあふ所だつたとさ、夫レがくるしさに、惚た貌で立引をしたのだといふしりがわれて、宇十が大きにくやしがつたと云ふはなしが有りやした、西「こいつはおかしうござりましたら

ふ、南「イ、都合にかゝれた中がおかしい、「四人」アハ、西「時に私は、モウ御暇に致しませふ、アハと笑ふ、また参る所がござりました、南「マアい、はな、みんな北町へでも行ふはな、北「そして今からどこへゆかれるものが、東「歸るならかへりなせへ、是はやらねへ、西「煙管をかくされたり、はなかみ袋をかくされるといふめに、久しく合まなんだ、南「晩にいつ所に行が、じやアねへか、西「そんなら流しましやうか、北「そうさ、南「今茶が出来る、東「ホンニはらがへつたよふだ、西「あんまりお咄が面白さに、外の用事は置いて、マア落付ませふ、北「モウ御飯をもつて來ればイ、南「出來たら持つて來やしやう、東「ホンニ此後は、高輪は繁昌だそふだの、西「左様さ、南「此間文史が咄して聞いたが、餘程居るそうだ、北「前の手合もゐるかの、西「居りますのさ、南「美しいのでは菊治、八重吉、雛治なぞだそうさ、北「菊治は氣の違がつたのが、西「それさ、まだ八十吉、竹杯といふものがござります、と咄して居る折から、茶も出來事と成、北「楊枝を一本くんせへ、東「サア、北「ナニ一本でい、東「一本楊枝はやらねへものだといふから、南「よくいふやつさ、西「どこでも能申ことでご

ざります、北「モウ腹は能成ルし、是から色事の咄してもしよふ、東「色事もうそでイ、北「なせ、私シだつて、そんなに捨た男でもねへ、南「大きにさ、本にどこの内だつてか、おめへと一座の時、不仁のうちでは、坊さんがまだい、といつた事があつたつて、北「カウ能い、なすつたね、おぼへて御出ナセ、南「ナニサ、こりやア虚言だ、ごめんなセエ、東「唯はすむめへ、西「私シなら濟しません、北「イ、エサ、又きめる所が有りましよふわな、南「夫レはそうと、松坂のおれが色事は、たつしやかか、西「随分おたつしやでござります、東「何んといふ女郎だへ、南「ナアニざつとしたものさ、北「おめへに惚た女郎なら、こいつもすごゐやつたらふ、西「すごゐといへば、イ、咄しがござります、東「聞きてエね、西「新伊豆屋の客人で、大松のおしうさまの所へいかつしやるのさ、南「そんなら名は、新さんとかい、はしねへか、あれはおみきと色事なはづだが、西「さやうさ、そこで又錦大和から、やつぱりおしうさまの所へ行客人がござりましたが、其客人には、あの子もまんざらでなく思つてゐさしつたそうでござりませふ、或日新伊豆屋の客人

が、屋鋪の勤で晝からござつて、旦那衆をば歸した跡で、藝者杯も大勢呼んで、どんと嘔うかひで居さつしやると、彼錦大和の色男がおそくござつて、とんと其曉落合ましたのさ、夫からむづかしく成つて、何んでも座敷を貫はねば立ねへと大揉だ、處がせんたい錦大和の方が無理なれども、女郎衆も惚た客の事故、座しきへ入れてエから、伊豆屋にそつと咄して見た處が、合點しませんから、女郎衆も大きに困て、茶屋がくれねへ様子を、錦大和の客人ニはなすと、ソリヤア虚だ、貫つてもらはねへ事有ルものかといふから、おしうさまのいふには、此正月も相應にためにもなり、又三月前も有事だから、そんなに押ても、茶屋の前へ對してい、にくひと言と、猶々憤つて、そんならあつちの客計りために成て、おれはためニヤアならねへかといつて、一圓ひませんのさ、夫レから面倒になつて來て、そんなら伊豆屋の客人に近付にして呉ると言出すと、みんなの言ニヤア、そふなすつてはさうざう敷事でも出來ては、わるふござりますから、およしなざるがよからふといふと、その客人が、決して騒敷はしねへ、只近付に成つて、おれも心よく酒でも吞て

エから、どふぞマア懸合ッてみてくれろと、おとなしく出て来たから、そんならと茶屋と茶屋との咄し合になつて、伊豆屋も客人に右の次第を咄してみた所が、伊豆屋の客人の言には、そんなら大方おれに近カ付に成ッた上で、座鋪も女郎も貰はふ了簡だらふが、随分こつちにもまた了簡も有ルから、是へ御出ナせへといつてやるがい、と、伊豆やに云付て遣ると、其通りをさへいつて申ますと、唯今夫レへ参りましやうと、錦大和の客の方から、挨拶をしてよこしますと、そこで藝者の三味線も止ッさせて待ッて居ル處へ、カノ客人があがつて來ますのさ、マッ爰で御茶でもお湯でも一ッいたゞきましやう、甕、コレハ氣が付カなんだ、東、ドレ、温斗してやらふの、西、ハイハイ、是は憚りさまでござります、北、爰で大取ッ合イにならふと言やつたの、西、夫レから互ひに、つる通りの挨拶も済で仕舞ますと、今來た客人の申には、扱此様にお近付になりますれば、マッ今晚は笑つて仕舞も付クませふが、かさねての處でござりますが、逆も此儘お別申ても、女郎の方でもすみませうまいが、何ンにしても六ヶ敷ものでござりますツサ、又此後私が

見立替にでも致か、あなたが外の女郎にでも、なすつてくださるかと申ものでござりますが、爰の處でござりますツサ、あなたをお見懸ケ申て、御頼み申事がござりますが、お聞き入レなすつて下さりませふかと申されますから、伊豆屋の客人も、夫レは随分何かは存ませぬが、おつしやつてごらうじるがよふござりませぬ、私が身分に出來ますことならと申し、又さきの客が申には、左様なら御言葉にあまへて申ましよツサ、外カでもなへこにいふ遊所では、都て御存の通り、何ンの役にも立ぬことを、ヤレ立引だの意氣づくのと申物でござりますが、其立ッ引をあなたへお咄し申も、おかしいものながら、チトした分合で、私も今と成まして、爰の内でアノ女郎を見立がへに致したといわれましては、朋友の前へゐくにも立ッ兼ます事がござりますに付キまして、是非今晚御近カ付に成りましたをさいはひ、お貰ひ申さねば成ませんが、御聞譯なすつて下さりませうかと云ト、伊豆屋の客人もさだめてと思つて、夫レは随分御心やすい事だと思つて、如何様共致しませうと申し、御らふじるとふり藝者も揚て置ますし、其外取

寄ました品もござりますれば、是を持ッても歸られませず、藝者もあけて歸しますも氣の毒なり、私も實はと申と、只今迄の遊びを無にして、外へ参つてもおもしろくもござりませんツサ、併しながらお互ひに御相談づくなら、しよふもござりましよふと申し、又かた／＼の客人の云には、あなたの相談とおつしやるのは、どふ致々せばよふござりますといふと、伊豆屋のが申されるには、私も手前の買ております女郎を、あなたへあけてみれば、是から高輪へでも歸つて、洒落るより外に致し方もござりませんツサ、そふしてみますと、藝者もかへさねばならず、外カにむだも出來ると申もの故、夫レでは私も迷惑でござりますツサ、夫レより一向早く申てみやふなら、此座敷へ今日の入用を掛て、賣渡しに致せば、藝者も一ツも餘慶賣ると申物、あなたも押て貰はふと思し召からは、其位の御了簡はござりそふなものだ、しかしそふは申もの、金づくならいやだと、にげもなさるめへけれども、そこは思召になさるがい、と申ものなれ共、此座敷に置いては、百兩か、つたともふしても、御もらいなさらずばなりますめへが、そんなわか

らぬことは申せん、何でも今日か、つたと思召程、遣はさるがよふござりますツサ、それも直段が付ッにくいと思し召なら、三十兩にしてあげましよふから、夫レで能は御返事をなさりましと、つゝばなして仕舞と、こつちの客人も貧君ひんぎんな人でもなし、大勢の中ちゆうでさういわれたものでござりますから、いかにも承知致しました、只今右の御挨拶を致しませうとそこを立て、夫レから金の才覺さいかくを試みた所が、持ッ合が十九兩しかないのさ、夫レから茶屋がはたらいて、やう／＼の事で三十兩と出來やして、すぐに其金を渡して、先座敷を引ッたくつて仕舞ましたのさ、そこで伊豆屋の客人は其金を取ッて、其場を見る蔭もななく逃て、新造買とへこんで仕舞ましたのさ、サア二階の客人は、夫レから大さはぎにどん／＼とすると、もふ夜もふけたものでござりますから、藝者をかへして床も納ると、また伊豆屋の客人が、あるた藝者を呼んでさばぎ出して、夜が明けてもさはひであると、兼ておしうさまと中のわるひお竹さまが、夕部の様子ようすを聞いて、逆も女郎はまづく成ッし、早く見切ッて金を取ッたうちの如才のない處に惚て、其客人へふ

みをつけて、夫から色事となつたと申すが、何ンとモシ愛いらでござりませう、南、北、ウ、イ、東、成ル程五歩も透ねへとは、其人だらう、北、向の人をせき込せて、金を出させるうちが、感心したものだ、南、お竹が惚たも尤だ、如在のないどふしだから、西、夫からといふものは、始終お竹さまがふぎでござります、夫で今年も十一日勘定にも、大松坂は二番通リでござりました、南、どふりでお竹は客が有ルといふ事だ、北、十一日勘定の二番はどこだったの、西「鶴屋が六百十三で、一番でござりまして、大松が二、夫から増本が三でござりました、東、成ル程増本は、いつでも四とはさがらねへ、南、藝者は誰だったの、西「一チがおかね、二が里吉、三がおりん、四番目が文字仲でござりました、夫からはしれません、南「文字仲はば、アでも能賣ルやつだ、北、其筈さ、座敷がい、東、したが下鄙をやめればい、南、おれが異見をいつてやらふ、北、時きに東さん、い、時分に成つたせへ、西「さやう、サア御支度をなさりまし、東様も新武藏の御部屋をみるよふに、左り勝手にすはつてお出なさらずと、お立ちなさいましな、西「モウ

がちに忘れた事はねへか、西「大佛屋の相對死を御聞なさいましたか、北、染井といふ女郎さ、南、モウそれ切りか、西「サア出かけましよふ、

南門鼠終

跋

道中記に曰、日本橋より品川へ二里半とは、知れた事なり、然どもいまだ南驛の巨細をしらずして、一夜泊の旅客も附出しの乗掛に、初音屋が駕籠を追越し、札辻の反魂丹を求るといへども、大木戸の牡丹餅數を喰ねば、高輪の十八町も、牛の小便とともに永し、邂逅足の近きに、腫痘踏出す客人は、懷殻尻となつて、駄賃帳の繰結に困れば、飯盛立の挨拶おのづから悪く、初て旅の艱難を知る、於、茲寵愛子には此小冊を見せて、しかして後遊びの本陣に至らしめむと、鹽原主人に一ッ宿遅後て、問屋場の硯を借て記す者は、

玳瑁樓 甲羅照よし

小「ホンニ夕べも旦那のいゝなはるにや、氣色がわるか内へいくがい、みんなの前はおれがい、様にいつて置く、そして仕廻のことなざア、ちつとも案事めへによ、お組があたまのものをうつても、引はとらせねへといつてくんなせへすが、あんまりもつてへなくつて、猶更いろ／＼な事をかんがへて、どふぞとおもふけれど、いふ折からおもつて、其吉是も自まへのげかんば「おたみどんおかたじけ、どふぞ歸りによせばへよつて、さつきのわけ道をよく咄して置てくんな、お客のほふでへんげへになつたとつて、下げた札がひかれる位なら、今迄げい者はしねエ、其位な事迄おさしづにやアおよばねへ、ずい分承知していやすツサノ、そして用があるならこゝにいやす、わがらぬ小言をいながら、おいなさん、小「其吉さんうれしむ、はやく上ンねエ、其どふしたな積しやはい、かへ、おぼさん寒うごせへますねエ、小「けふはい、よ、おめへ今迄どこに出て居た、其けさつから野花屋で呑つゞけさ、袋「あんまり酒も呑みなさんな、どの子も苦勞だぞ、小「まつさをだせ、そ「利に入たさ、袋「そのさんがきたから、おいらは一寸とくが感じ様のより合へいつてきま

しやう、そ「アイ、わたいがいるからいきなせへし、小「か、さん其序に、こりやう鷺屋へほふり出しておくんなせへ、そ「どこのだ、小「藏印さ、そ「けふくるはづじやアねへか、小「かのかの、そ「ウ、小「夫で今日ことの外心あしく、折角御いらせ候ても、御咄しもできかね候故、明ばんと書たのよ、袋「そんならいくによ、其さん居てもよかア、はなしてやつておくれ、そ「あんじなはるますな、わつちがいやすから、袋「ナニサぢきにけへります、と出て、そ「ホンニ夕べの半兵衛さんへの文は、坂多やの爲どんをたのんでやつてもらひやした、シテ今夜きなはるのか、小「そふさ、そ「たのしみか、小「んんにや、そ「あつかましいそふはいかねへニヨ、あしたの晩は猶おたのしみだ、小「なせ、と少しか、此子アなんのこつた、よしておくれ、そんなごさげんじやアねエはな、そ「ホンとふにか、さんの苦勞も休まり、半さんのためでもごせへすから、ちつとは承知の顔で、此中わたると相談の通りにしてみさせへ、小「さつきもか、さんのいつた事なざア、しんに涙のこぼれる程案事てくれるし、末色のおかみさんだつても、わつちが年季でいるうちいゝなはる

にやア、早く自前になれ、そふすれば親の内ちへ、寐どまりもさせやすむ、たとへ夫でなくつとも、おれが氣に何ンにも如才はねいが、又それでは部屋のとりにしまりもわるくなるト、わたるが十五の月見から出て、五年がうち、これ程も不足を言ひなはつた事もなく、ソレおとどしの大病の時も、難しが谷の御帳護符、大師河原の厄よけ守り、黒畔と赤裏の稻荷はんエ日參をして、夜もろくに寐なはずに、寐冷へをしめへの風を引めへのと、マアホントウ引の親でも、こんなにならぬはるめエとおもへば、あんまりありがたすぎて、獨で泣た事が度々あつたによ、ソレでわたるがおもふにはの、モウ少しでもいたづら浮氣らしむ事はしめエ、どふぞ新妓衆の異見でもいつて、二階の仕附でもする様ならば、ちつたア旦那の氣休メにもなるふかと、心にびんと錠をおろして、去年の暮迄道柴の露程も、通情ちたらしむ事はしやせんのだが、ふつと幫間に出た半兵衛さんに思ひ付たが惡縁で、わたるが方から頼んでよび、一度が二度ト重る程、ドヲおもひ直しても思ひ切らず、あげくのはては半さんに迄きづを附けて、今は八瀬川町にひかげの身の上エ、

朝夕の事につけても、サゾつれエ事やしやくな事もごせエしやう、そのうへ四ツになる子迄ある中の、おかみさんノ心にもなつてみなせへし、マアどのよふにはらが立ふ、これといふも皆ンナわたいが心ひとつサ、是を思へば神も佛もねエのか、ナゼ罰があたりねエ、いつそ死んだなら、今のつらさアしめエのに、そ「ホンニぎりばかりでもつた世界だが、ソノ大恩のある旦那はんも、おめへ獨を杖にも柱にもとたのしんでいなはる、か、さんのこともしもの時は、ソレ忘れしまつ程半さんのこつたから、口元なわたるらが異見も、わかちも聞入ちやアくんはるめへが、けれどこゝが兄弟分のよしみとおもつて、此中から言つた事を、ちつたアもつともと聞てくんなせエし、ナルホドいやでもごせエしやうが、そこがやッぱり半さんの爲と、みんなへの禮奉公だと思ひなせエし、しかし眞にこつた時は、部屋に居ても手にものが附ず、外のお客はみるもいやになり、爰で勤ればいゝがと氣が附ても、ツイ寐ごかしてしまつたりして、茶屋めへのあしくなるは、誰しも子供衆のなれエさ、ソノつらさをこれエるが、苦界といふのでありましやッ、こ

どん、小いなさんに内しよで、一寸來ねエといきな、ソツトヨ、半よしなせへ、ねエしよでちよつともこけらしる、羽おりでもかつて、サハ〜としやれていきやシヨウ、嬢ソレでも、女帳場に銀藏さんが居やすが呼ぶかね、半ヲモしれエ、嬢來るとき蠟そくを廻しねエ、女アイ、と出、花、ホンニあやにくナもんだね、嬢去ればナ、たつた一ト足違へニヨ、梅、今少シはやからばカネ、女コレサ銀藏さんよしねエ、いけすかね鼠だぞ、銀ヨツボドい、男のはづだが、なせかミンながいやがる、と云なが、コレはモシ半さん、一別已來一昨日、半サアどふもいへねエ、一ツ呑な、銀チトお押へ、半マヅ、と盃を、銀ふさりましたか、マツ呑め、花「わか草摘すてられて、銀中車ふる、女どもサアつぎヤれサ、梅ツグ、銀ホンニまだ皆様へ、御挨拶つも申サなんダ、おはつにおめに掛りました、梅、きつしいやれサ、銀サテもし今ばんも、私妻がまた鴻の屋で喰ひ酔まして、只今よふやく寐かし付て参りました、其かはり私獨でふたり前しやべります、時にこりやアなんのこよりだね、花、あて、みな、銀ハ、ア先のこげたノが火廻しのこより、輪かきかねト云ヤツは、目

と口と考へました、ナントモシ皆様お揃で、けしもからざる野夫の根ト、いふ事をなさるましたネ、嬢、キツイ聞たフウ、夫はさつき石川屋のお客さ、市ナルホドお京さんの聲はがふぎにかんばつた聲だせ、ペチヤアねエ、かるわざ芝居の附太鼓といふもんだ、嬢、なんのこつた、藪からぼうのよふに、ソリヤアきのふからかんげいたしやレか、銀、市どんか、市さんか、コレは大きにおみそれ申やした、ナゼかけふは一向にめがみへねエ、と云なが、女、コリヨウ續な、半、蠟そくは最期におよび、銀、穴をされなザウ、なる程よふござりますねエ、とつ、半、千柳もまた一ツあるヨのう、銀、出來そふで出來ぬエやつでござります、嬢、ドウモくれエ、とまた一ちやうわ、市、半さん、わつちがきのふ新皮下開て來た、れエ年の新ばん飛きりと云ヤツを、一ツはなしやしやう、と手のぐい、ちよいと肩にかけ、しりを少しマツ燭でエの上の丸イものが云ニヤア、每ばん〜あつゐるを流しやアがつて、夜ッびて寐られるもんどやアねエ、今宵はグツと町へいきの、大じやにしやれて下の丸を寐かすめエト、少し意地わの工みで、ヒヨいとぬけて出やした、そこで上エの棒は、日がくれるや

くれねエに、例の通りサツ〜と出燈ッし、下々の方へぐつと流れるやツを、側に居た子供衆、アレサモウと云ながら、口びらで小杉を四五めへ程とり、シツカリふいて聲をふるはし、あつかアねエかつ、大せい「ホホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ、おもしろくもねへ、ナソノ聲をふるわせずともこのつた、銀、コリヤアよつぼどい、市どんにやアチトすぎもんだ、銀、少シツグ、そりやアかふいつちやア何んだが、江戸がわの船頭と、堀の送りッばなしをこいだりイ、ひきで真崎向崎のよしごの中で、かつばの尻をかいで居るのたア、ちつと違やす、嬢、お客も船宿衆につれるもんだよ、と半兵衛、市「此中真ッくらな晩に、乙女橋の下を小船で通りやすと、橋の上から市ヤイどけへ行と、わつちが櫓拍子を聞つけて、呼んだお客が有つたが、ナントすごゐもんぢやアねエかネ、と咄す折から、「小いな細おりの南部島はん、先は、廣きやつ、裏おり、錦の帯を結びさげにして、切立の眞ッ白なゆもじに氣をわるくさせ、障子の入口で少しあたりを見ては入、左の手でかんざしの先をさし、梅、花、小いなはん少し右の足で着もの、すそをさし、梅、花、小いなはんわりイねへ、小「アイサ、と、銀、モシどふでござへます、一つ上ましやう、小「お盃は、嬢、ナせい、じやアねへか、呑なせへしナ、小「けさ指をけがをして、い

つそ痛みやすから、花、あぶねへ、と顔を、半、ハテかはつた指が、能ちやうどされたもんだね、夫ぢや定めて腕のほうにも、火事のあつたこつたろう、小「トウの事さ、半、と、愛がしんぼふ處と平氣な顔で、「道理でさつき本鮒町の當ばんで、ふんとんとしやうき頭の纏が、出て、はや鐘をくらはしたつて、小「おめへの胸でか、半「ナント、嬢、銀藏さん、なんぞにぎやかに弾ねエな、銀、ソウサねエ、ちつとひきやしよふ、あんまり高エ藝者にあたる、チツト借ナせへ、と、うめ吉が三味、ハ、アお張けへが出來タね、と、菊岡か、梅、インエた、たみ横町サ、銀、甚藏もよく張やす、と、うたつて、くんなせへ、花、水かがみか、嬢、びんづるがい、わな、「花、メリヤスわすれてはうちなげかる、夕部かな、ひとつのきはにありながら、夏の日暮し雪の夜も、格子のそとに立あかし、おもふかもわぬへだてなく、半「ホンニ世界におれほど、こけを初めたものもあるめへ、内に居ても此頃ぢやア手にものが付ず、鍋釜いかけか醜屋の、釜前の面をみるよふに、あつくなつて居てもつまるめへ、是もならるの汐前を、乗ッきり様がたらねエセエか、どふぞ法をきりけへて、大道勸

化のせりふぢやアねエが、今日がおいとまごゐとせざアなるめエ、そふしたら馬糞の牡丹餅と石地蔵を、抱て寐ためが覺るだらう、「小さいのふたをすみ紙」お京さん、わたるは夕べとんだイ、夢をみたから、いつそけふはうゐて居やす、「牛兵衛が」半、浮世といふものは、面白へよふなはかねエもんだ、鋸できつてもきれぬ縁のつなも、紙一枚で赤の他人となる、昨日兄弟分の盃をしたなかも、けふは直に胸元へでは庖丁がおんまいもふすと云も、元が他人からおこつた事、こりやう思へば、今迄お袋に苦勞をかけ、勘當されたもけつくうれしい、「だれに見しよとて白粉の、けはひ化粧もあだし身の、もみの頭巾に世をしのび、人目おもふもア、そんじやへ、「鯉」ヤンヤ、「とひとりてほめて」ぎを弾、「小」さつきからおかしくもねエ事を云並べなさるが、ソリヤア半兵衛さん、おめエでもごせへすめエ、シタガ今更愚痴を云なさる氣なら、わたるがほふにも云事が、「姫」モヲい、はな、何のこつた、マア一ツ呑なせへし、「小」吞と寐たくなるからいやサ、そしてモウいきやしやう、「姫」サウサのふ、しかしまだイ、じやアねへか、「小」ねつから能ねへのさ、「と立て一かふ半兵衛が方をば、」

見向もせずに出て、その吉「ヲヤたれかとおもつたら、大和屋の源どんか、かんにんしてくんな、マダおぼこ娘だから、「とすてざりふ」半さんよくおいでなさるましたね、後に鳥渡おはなしがあるから、さみしくツとも寐て居ておくんせへし、「半」こ、じやどふだ、そ「わるしさ、「姫」ソナラぐる廻しにして、お納めにしやう、と一ッ盃を廻し、女中はたばこ盆へ火をとり、げい者は三の絲を返して箱へいれ、「姫」半分は半兵衛がさげたばこ入をしまつて帯へついで、大せい「サア入らせられましやう、

癡なお客の悪言は、得て言たがる穴のあな、その根を聞ば、隠所よりも聞る心、通り名の情知は、言ずに聞へるなる子の鈴、先のさき迄見通の、鏡に比しき明る心、

はん藏「としは三十八九四十位とみへ、色淺黒くてつぷりと肥り、せいかまり高からず、随分ながみのはしり過たいる男なれども、どふか當じはやりの口、へいの中にかんているお方に、少し似たばもあり、是にて御さつし、いづれ金はうなる程ある風俗なり、衣裳付け、結城の藍島の上着を、屏風へはふり上げ、ほんば太織の黄色な大島の下着、羽おりは上田の三筋立の、こりくするやつをた、んでそばへ置、松本仕入のかみたばこ入、岡崎の眞が張たいも張の白のきせる、てつかい仙人と云身ふりにて上ををあを向き、世界をぐつとすそにのみこんだつら付にて、こく府をふいて居る、尤床の廻つた體にて、さやがたに葉のよふの夜着はたいんだな

「小いな左の手をふところから出し、襦袢のはんざりて口をふさぎ、右の手で高つきのいまさかなを、むしやらやたらにつ、ついで、」は「コウなんのこつた、人にばかり口をた、かせて、ろうがへ病に萬歳をみせたよふに、あじにさげすんだ面アするがどふしたな、へその下たアしらみでも喰ふか、人をつけにした、「小」なる程おめへのい、なはる事ア、少しもぬけめなく、よくわかりきつていやすが、夫ぢやアあんまり出ナさりよふがつよ過やす、わたるらがよふなお心よしは、松風亭とやらに、荒神さまのおゑん馬が、くいつみの大ばん小判といふものに、かるく出なせへし、「は」ナニかるいのおもゐのと、舌切すゝめのは、あが、つゝらをしよつてほふそふみめへにいきやアしめへし、ばか、「は」つとあばか、「は」しるか、ちつとだまなせへし、「は」つとあ「コレだまれたアなんのこつた、ひつへかしの紙で張た辻ばんに、二文たどんを入たやつを女房と名て、お、ばく、おやじが、はなうたをとめるせりふか、あんまり安くとりあつかうなエ、かふいつちやア御大そふだが、雷の足のうらから地震の天窓の上の事なら、土用干にこまる程、腹のうちにな、みこんで、是一ッ御存なへといふ事なく、ソレ八幡の社料は

いくら納る、何屋の總花はいくら、わり花二階花はどふこふ、何屋のなる子はどふゆふ音するの、そして鳴子のねエうちがあるの、見通に平ラと高へがあるの、どこそこへは二町まちものがたんといくの、寄場の爐は何シ尺あつて、何時にひけるの、赤町は一時おそゐの、勘定はじめも赤町は風呂敷だの、化茶屋のきり身は、いつでも鯛とみせてさわらだの、平目とみせて鮫だの、玉子焼へは豆腐を入れるのと、こいつらア一寸した煙草のうちの咄だが、ナント世界には行わのたつたもんだらう、そのはん藏様を、二寸にたらねエ口先でなげよふとは、猪牙が親船だ、もつてへねエばちがあたる、出なをしにするがイ、「小」おめへもあんまりでごせへす、蠟そく箱の書付をみるよふに、おつにむづかしくからんでい、なせエすが、夫ぢやアいくらしても、わけ道が付やせん、ちつたアおめへもかんげへて、コウ、云りくつで氣がすまねエから、おれが心のはれるよふにしるとか、いつてくんなはりやう、なんぼわたるらがよふなしがねエもんだつても、よっくおめへのきのすむよふにしてみせやス、けれど只わけもへちまもなく、しかんなはつち

やす、ホンニおめへの心ざしやアしんでも忘れやアし
 ませんにヨ、は「とき」モウごぶぎに夜が深た、おし
 付け松坂のうら白か聞へるだろ、小「あした迄流し
 にしなせへしな、そ「早く歸れといふ事か、小「きつる
 しやれさ、と云ながら、帯も上着もとつて屏風へひっかけ、あんど
 んをかき立て、角の方へかた寄て、夜着の下モのほふか
 らもぐり、なんだナ、もつとこつちへよんなナ、ヲ、寒
 る、の聲のみ、風雨并白の屏風、あつくなつたね、折から階下は
 船毛の、かめ「半さん、お屋鋪の旅立とやらアどふな
 さいやす、おつかけでもよしかね、は「ホンニそふだ
 つけ、是を忘れちやア大そう動、か「藥罐なしス、小「か
 めどん、まだるなすつてもい、じやアねへか、は「ム
 ンニヤけへろう、とはれおきし、ソんなラさつきいつた
 とおり、用があるなら文でよこしなせへ、そしてコ
 レ／＼も大事にするが、わろくするととがめる
 によ、聞せたがる、か「けふは平ラなぎだから、ナン
 ナラすぐに閑迄のんなさればい、は「コイツアがふ
 ぎに奇妙だ、ソんなラやつ、けて下し、小「コレサ、そ
 しておめへいつ来る、あさつてわたるが迎出ている
 にヨ、かめ「これもおもちよろしだね、と云ながら二「は「起
 ばんはたれた、女「ハイ私、もふかへ、まだおはよぶご

ざるます、は「早くもねへ、内河を出るといつでも夜
 が明るヨ、女「さよふならおちかゝるうちに、ハイ御機げ
 んよふ、ソんなラかめどん、小「おさらばよ、と云残して
 上り、裏座敷をうそく、のぞき、障子のやぶれから、また階下を
 あんどんのむだ書を目印には入り、屏風を明て、半さんサ
 待どふであつたらう、おきなせへし、とゆり、半兵
 衛「ナンダやかましひ、小「寐ぼけていなはるか、わた
 るだアな、半「ナニわた屋だ、わたやにやア用はねエ、小
 「じれつてへにくいぞヨウ、とつ、半「いてへはべらば
 ふめ、とむつくと起きななり、手に當るきせるを、尤でござへ
 す、サツ腹が立やしやう、委細の譯はさつき、其吉ッ
 さんに聞ナすつたらうが、かん忍ならざア、ぶつとも
 た、くともしなせへし、だがマアとつくりと聞てく
 んなせへ、おめへマダこの内にも、残りがあるじ
 やアねへか、ソレそんな事や正月の事も、今まではで
 に仕付くなつたもんだから、さぞ今の身になんた
 ちやアと、わたるが愚痴かアしらねへが、ホンニ寐た
 間も忘れた事はなく、その吉ッさんの異見に付て、エ
 イヤツとこしれへた此金で、どふぞ早く爰の拂をす
 ましなせへ、半「ソんなラさつきの指は、小「それさあ
 んまり野夫らしひが、わたるが心意氣だどつてくん

なせへし、と小杉の間から、紙にくるんだ指を出ス、「知るめへ
 と思ふが大きな痴だ、さつき裏二階の入口で、始終
 の咄しやア残らず聞た、其手は喰ねエふてへあまた、
 と又もきせるを、小「かげて聞なはつちやア、それも尤で
 ござへすけれど、あれはまつかな似せもの、梅皮の干
 たのさ、是此指は心のうちで、おめへにやる氣できつ
 た指だ、どふヲ、ぞかんにんして、もつて居てくんな
 せへし、コンなにおめへに腹を立せるも、みんな私
 が身の上エのあべこべになつたからさ、ひよつと此
 末どふしてもいかねエ時は、死ぬより外は、と跡はなみ
 聞へず、是においてさすがの半兵衛も、前シてへ爰の内もあ
 大きによはり、只うつ向てガンマリ、前シてへ爰の内もあ
 まり現金だ、ヨシヤ今おめへが日かげの身でも、二十
 ヲそこらのはした金を、濟みすましの出来ねエ事も有
 やすめへ、半「いくら手をくらはしても返詞もせず、
 宵からろくな茶ものませねエ、しかし是もみんなこ
 つちに引けの有ルからだ、小「ヨウござへす、そりや
 う聞ちやアモウつちやアおけやせん、何もかも
 すつぱりと奇麗にした上で、茶やをかへなせへし、ナ
 ンノ爰ばかり日はてるめへし、コウおめへ寐なはる
 のか、おきなせへし、寐かしやアしねへ、とむりに夜ぎの
 中へわり込、

まだ帯もとかずに寐ていなすつたか、男世帯と云も
 のは、半「おきやがれ、女房氣どりもあつかましひ、
 小「アレサ、その手をこつちへ、半「かふか、折ふし隣座敷
 へて、せん頭「舟が出来やした、客「なん時だの、夜明の鴉
 「ガア／＼、と船いき、「にくまれ口がアレ鳴くわいな、聞
 せとむなる耳に手を、八幡の鐘「ゴラン、客「鐘はいせ屋
 か松本か、

跋
 予が朋友擔柴堂の主人、眼は尾花樓の月の鏡にひと
 しく、心は望海橋のよりも長く、口も八町手に三十五
 頁の書を著し、名て是を嘉和美多里と云、一此洒本
 尊を閲る輩は、いかなる魯愚の權七も、鈍鐵の鑪鞴に
 入て、須臾寶劍となるがごとく、能惡女の開難を逃
 る、夫れ遠きものは沙汰にも聞け、近くは買てごろふ
 じろ、嗚呼無窮面白と云爾、

土橋 嘉和美多里終
 創山亭主人誌

甲子夜話序

御誂の染り安き晒柿御浮氣、五人前の揃着は、三人で
 三步失る痴惠となる、千柳點の妙句に當り、五人寄て
 は則七十五夕の是痴惠也、其出處の愚さは一なれど、
 人心不同如面、皆夫れに色取あり、乃至黄染の
 布袋の腹滿々たるも、染込の能藍豆青に、小頸をかた
 げし思按の胸、洗ひ曝の水淺黄と流れ、二世も三世
 も薄めまじと、極印の盟ひは、赤起請よりも猶濃く、
 毎夜北の稻妻の手の白きに招れ、雷ぬ身の無情、迷
 の雲のはれがたく、花色廓に通ひの締も算用不_レ合、
 其家も売々押門、卒には雁金の淵に落り、跡へも先へ
 も色替ならぬ、御注文の眞黒の下染、左之通りと云
 云、

追々跡より染明る日の青陽

梅暮里谷峨自序

目録

- 安野平兵衛 座敷の契話
- 極印千右衛門 傾城代々春
- 雷庄九郎 悋氣の争
- 布衣市右衛門 林の睦言
- 傾城九重 眞の仕打
- 雁金文七
- 傾城喜代川



甲子夜話

梅暮里谷峨著

○安野平兵衛、極印千右衛門、座敷の契話

商客甲子を祭る事、福を得ん事を思ひて待、娼妓損を
 せん事をおもふて色客を待は、いつのころよりの言
 傳もなく、面々つらきをふせぐまでのうさはらし、う
 わきも實の餘情とて、寄集るは奥州がざしきなり、玉
 葛、おめへさんがたはうら山しい、そのよふにみんな
 がおいでなんしたから、大黒さんにごちそうなんし、
 わたくしのはこられねへといつてよこしたから、大
 黒さんにうらみをいゝした、大黒をおめへさんのは
 どこのでおすへ、おう州なんだかか、さんのくれた
 のでおすは、玉葛、ちよつこりとして、よふおすねへ、
 たしか代々春さんのは、懸地でおつしたね、代々春、ア
 イサ、千右衛門「それがおかしいと、だしてはねへ、此
 めへをれがきたとき、たんすのひらきへ、大こくを
 かけたはい、が、ひらきをあけると、かんじんの大
 黒は、ドロくでかけをかくすやうに、うしろのほう
 へいつてしもうと、禰や何かに、備へものをするうち

がい、代々春「もつてへねへ、いもじはあすこにはお
 つせんものを、よう悪口をおい、なんす、千、よくし
 かるやつさ、平兵衛」とかくどこのも、しりに敷たがつ
 てなりやせん、奥州「よくおめへさんがたは、尻にしか
 れておいでなんしそうなふりだ、千「それといふが、
 こ、あきの風が吹てきたからさ、玉かづらさんが庄
 丸を思ふのを、分てやつてくんねへな、代々春「あんな
 い、事をおい、なんす、あんまりたしなませておく
 んなんすな、おう州「口さきでばかりたますが、なせそ
 のよふに流行いすねへ、代々春「わたくしなぞは、うわ
 きのせうたいをみると、き、はしいせん、千「ワット
 こんやははらをたつめへ、大こくさまはわらふがお
 すき、平「ヨイ、ワイ、千「うさアねへ、玉葛「お
 めへさん方の戀いさかゝるをみても、おもしろくおつ
 せん、いつそいつてねへせふ、平「寐すにとつちりの
 むほうさ、アノ市はどうした、おう州「床へいつて、は
 なしておいでなんす、いつそおめへさんがたとちが
 つて、やさしうおす、平「とんだ所へとばしりがきた、
 千「市がとこばいりも久しいもんだ、のろいのをろし
 うりは、まだおれが方からださぬはづだがさ、玉葛「エ

エあつかまじうをす、サアおやすみなんしへ、千どつこい、そうはならぬみやこの八重櫻、玉葛花がちらもひさしいものさ、おう州「マアよおすわな、それでも庄さんは、こられねへといつてよこしなしたから、まだあきらめようをすが、文七さんはなんともいつてよこしなせんそうで、喜代川さんも心待にまつておいでなんしたに、かんじんの文さんはおそくつて、角左衛門さんがお出なんしたつて、ふせうぶせうに仲の町へお出なんした、玉葛「たしか今きたのは、喜代川さんの伊平次さんでおつした、おう州「それごらうじいし、いろ／＼な唐人がめへりいすものを、おめへさんも、ちつと人の氣をさつして、そのようにくよく／＼思ひなんすな、玉葛「きのえ子のばんに、そんなじやまがいりひすと、いつそ氣にかゝりいすねへ、平「人の事まで、うつちやつておுகಾಗಿ、玉葛「庄さんもあんなことをいつてよこして、いつでも外へゆくがすきでをすから、また其の手じやあねへかともおもしろい、す、平「ばかな、そりやああんまりかんが附すぎる、その時こそ、おもしろいへこませてやるがい、玉葛「そんなことをいふと、たつたひと口さ、

代々春「そうもい、なんすなへ、おめへさんがたのいちまきは、どこの女郎衆も目をつけておりひすが、わけて舞鶴屋の女郎衆は、いつそほれてい、すとさ、名もき、いしたが、平さんののは龜菊さん、おう州「庄さんのは手越さん、玉葛「千さん、おめへさんのは舞鶴さんといふ、千「しんぞうか、おきやアがれ、ヲ、おそろしいこと、新造にほれられたには、こりたものよのふ平公、平「そうだつけのトわらふ、玉葛「ナゼへ、千「色男咄をしてきかそう、マアき、ねへ、さるところへ二三人で、しんぞう買にいつた所が、市がしんぞうがおれにほれたりくつよ、市も如才がねへから、ちらとみるとぐつとせうちして、床へおさまると、千公々々とよぶから、なんだと思つていつたら、おめへのたのみの事を、此子にいつたら、啞だといふから、それでおめへをよんだのだ、なんぼ男の口からだつて、こふゆふことをい、だして、ふせうちでは男がたつめへを聞てよふ／＼とけ、た、ねへどころか、はじをかくりくつなら、首をく、つて死でみせると、何氣なくいわねへけりやアならねへ義理でいふと、市がいふにやあ、そうありそいな物だ、おれも思ひおもつて

あげた子を、おめへもうつくしい女郎衆をか、へていながら、おれが女郎をおれにとりもつてくれろといふは、よく／＼だらうと、腹のたつのもた、ずに仲人するを、今さらふしやうちでは、おれまで男がたねへ、これからはおめへ、ちからまかせにしなせへといつて、市はどこへかはづしてしまつた、ところがよく／＼みれば、おれが新造よりよつほどわるく、せひもねへ事とは思ひながら、のりか、つた船と、いろ／＼口説ても、ヤレおめへさんがたは、云やわせてなぶるのなんのと、どうしてもふせうちゆへ、こぎもがいて、もふよさうと思ふ所へ、おれがしんぞうがきて、ヲヤきやく人がとりかわつたよとむりにつれてゆき、跡できけば、その子をつかめへていふにやあ、コレなんにもい、なさんな、おれが見立てあげた子を、げんざいおれが友達にぬすまれ、おめへの客といへば、傍輩の女郎衆に足をつけられる、あんまりものをしらぬやつだから、はらをたつていやア、くらやみの恥をあかるみで、つまらぬものはおれとおめへばかりだ、そういふやつらに、何も義理をたて、みせる事もねへから、こつちはこつちではじめて、あい

つらへの面あてにおれもくるから、おめへも其氣でよびねへと、とふ／＼だましおとしたそうだに、かんじんのほれたれたをれが、手をむなくかいるも、どふやらこうやらい、ようにされやした、玉葛「おりふしは、そんなめにあいなんすもい、のさ、平「その次をおれがいこう、去る内へこれも四五人連でいき、おいらんに少々あたりがあるから、をればかりはしんぞうさ、かれこれすんで床になると、一座の女郎がきて、おめへさんをとりのつてくれろとたのまれへしたと、何かなれなれしくいふから、おれもおいらんの理屈であらうとは思ひながら、マアちやかしていやした、それじやアわたくしがすまねへと、よつほどきていふから、そのくらゐにいふことなら、よもやモウわらつてもい、かをい、もしめへ、そしてたれだといつたら、おめへさんもしつておいでなんす人さ、つれてきいせうとい、跡は、けふはいかなる吉日と心でよろこび、もふおいらんはきそうなるもので待て居ると、はづかしそうにくらいつころへすわるをみると、一座のちいちはんわるひ、とうもろこしに目鼻といふ顔、疱瘡跡面のちつとばかり前髪

をちらかして、人のわるひ女郎だ、千「こりやアたいへんの春駒だ、玉葛」それからどふなんしたへ、平「ぞつとしたが、まさかいやともいはれず、其晩は人目があるから、いゝさゝるわいに口ほこでしまつたが、それぎりでは、中へはいつた女郎のめへが氣の毒ゆへ、文と二々人連れでいきやした、尤文に其女をかわせて、やつぱりうつくしい初會の新造をあげると、なにがよりたかつて、そのしんぞうにおもしろおかしく酒をのませ、酔ておいて文と入れかわりさ、そのときばかりは、さぞ女郎衆はせつなからうと思つた、たまたまこんなめにあつて、いやとおもやアばかしく夜がながひに、ア、せつねへこと、ふつと隣の床で何かいふから、耳をすましてきくと、此新造が文に大ほれで、どふぞもちつと平さんは、かいらすにいてくれ、ばい、ねへとは、ありがたひみことのりね、千「おきやあがれ、それだからおたがいに、たま／＼事は油断がならぬナア、平「さふおもつていれば大丈ぶさ、おう州「あきれて物がもふされんせん、ねへ代々春さん、代々春「あいさ、よりによつてぬしたちのよふな、うわ氣なものにほれるといふも、やくそくごと

でおつせふよ、千「いつそきのどくだの、代々春「しりいせん、千「ホイ、玉かづら」にくいのう、庄さんもア、だよ、千「コレ／＼、はなしをしてさへ、少々は氣のはれるものだから、庄が大いなることになりそくなつたはなしをしてきかそう、玉葛「サアきゝいせう、おふしう「玉かづらさんがいわうと思つて、千「すいぶんいつてもいゝ、さる出入屋敷の衆につれられていつたのさ、玉葛「おめへさんがたのはなしには、きつひさるのいることだね、どふりでよく女郎衆をかきなんす、千「ちやなら咄すめへ、大事のことだ、玉葛「ごめんなんし、だまつてうけたまわりひせう、代々春「だいじのことともいゝね、千「マアだまつていやな、代々春「むづかしいね、千「エヘン／＼、もつとも其旦那もなじみかして、おいらんなぞも出向ひ、たい／＼藝者で、茶屋は大らんちきのうちも、なにか其おいらんが、庄にへんな様子さ、玉葛「おめへさんも、其時おいでなんしたかへ、千「初會はいふにおよばず、うちまでも庄がたのみでいつたから、正銘のはなしだ、平「せう／＼あつひばんだ、玉葛「ナアニ、千「それから庄が小便にゆくと、跡についで其おいらんが、次の間にまつて居

て、マア一ぶくたべなんしと、たば粉すいつけのどさくさまぎれに、手をにぎつたり口をすつたりしたさうさ、彼是すんで、どや／＼と女郎屋へ行と、いつか其旦那のさし圖で、おれにも庄にも、うつくしい新造があがつているし、ア、不都合と庄も思ひながら、そのばんはそ／＼で、あくるばん二人づれでいつたところが、其おいらんに、四五人客が落やつたけれど、それも仕方がねへから、おいらんのしんぞうと、見たてがへをくらわそうとはかつたところが、其しんぞうが庄にほれて、つれてきてくれろや何やかで、旦那がそのしんぞうを出した譯かして、はなはだそこがむづかしい様子ゆへ、かいつてあんまりいつては、かんをつけらるゝもとひと、マア其晩はそのしんぞうをかつて、なんぞみつけて、ぶう／＼で引かへようとおもつて居るうち、おいらんが何くわぬかほで、よふおいでなんした、わたくしのはなせつれてきておくんなんせんへなぞといふうち、火をとりにやり、其うちせう／＼いちやつきなますで、すつたりすわれたりすると、こいつもかんをつけたかして、そ

う／＼あしをとがすると、どふもあのとをりでおすから、いさゝるはかいておめにかへせう、そのとをりはからつておくんなんしといふところへ、しんぞうたばこの火を、うや／＼しくもちきたるをみると、ひよいと飛のき、今直に書ておきひすから、おつ、けとりによこしておくんなんしの約束もほゞすきて、連のところへのふみをとつてきてくれると、しんぞうをとりにやり、間の唐紙をあげて、今夜はなんでも、いじのきたねへことをしてはならぬから、爰を明ておいてくれるといふ、おらがの地色でもかせぐのか、かたきし寄りつかぬゆへ、おれはいゝが、のちにこまるめへといつたら、そりやア内藤宿のとうがらした、めつたにそばへよりつかせることじやアねへといふところへ、庄が新造が来て、ナゼこんなにあけなんしたへと、ふみの事はいつこふさたなし、庄もがつてんがゆかぬかして、ふみはどふしたときくと、おめへさんのをかげでしかられへした、世事だからア、はいつたが、此客人の落合た所で、どふふみがかゝれるものか、おめへもこんなことは、さしはからひなんしと、こんなむりばかりいゝなんす、そして手めへのしんぞうかなんぞのように、人をしかり、せ

んてへきやくがあると思つて、おふきな顔をするの、ヤレいちがわるのと、かんのんへ朝参り時を見るよふに、いろ／＼ならべているから、庄も氣はみじかし、そんならなぐさむなと、ぐつとくるけしきをみると、どうなんしたと、いつそしんせつに背中をさすつたり、さすられると氣がかわつて、例のみれんをあけつばなして、おれに見せるうちが氣つひ、玉葛、そしてその女郎衆のほうは、どふしゐしたへ、干、まだ關いうち歸ると、おめにかゝりたひことがあるからそつ／＼きてくれろと、ふみがきたけれど、庄はいくめへといふをむりにすゝめてやると、おめへさんほうらみなものでをす、夕べはしりなんすゝをり、おりあしく客人が落合、アノ子も氣をつけるから、しみじみはなしもされんせんから、かいてあげるものを、とつくりと見ておくんなんしといつたに、ナゼあのよふな事を、いつてよこしなんしたときくと、なんでもこれにはやうすがあるうと、だまつて庄もきいてゐると、おめへさんのお出なんしたは、此間が始ておすが、仲の町で度々おめにかゝりひしたゆへ、なれなれしくはづかしひ事もいゝした、それをアノ子が、

文をとりこよふといふのを、なんのいかずといゝ、世事だからア、いつたものよ、どこへもいかずに、そこにいろといつてはなしなんせんを、無理にきひしたともふしひしたから、わたくしも腹がたつて、そんならひと、アノ子の居るめへで、づん／＼に引裂てみせへした、其事をもふしいせうと思つて、あくる朝もかへんなんすなら、とめ申ておくんなんしと、たのんでおきいた、アノ子はいろ／＼とめもふしひしたそうだに、聞かれなんせす、ナゼおかへりなんしたといわれ、庄も始て新造にはかられたことをしつたれど、ちつと意地のきたねへ事をしたゆへ、晝のことゆへなれば、いづれ晩にと、齒切れのしねへことをいつてかへり、直に晩に行と、玉葛、わがりひしたかへ、干、わがりやあわかつたが、とんだ事がわかつたよ、玉葛、なせへ、干、りきみきつておいらんのいふにやア、あの子をだん／＼ぎんみいたしいした所が、おめへさんもまんざらでもねへさうだから、きとをうしてやつておくんなんしとさ、玉葛、いゝきみでおつしたね、平、是がほんの寶の山へいつて、おもふさまつみこんだ船が、破船したよふなものだ、玉葛、そ

れから其新造衆のところへ、いきましたかへ、干、どのつらをさげて、と云ふ折から、新造、おいらんへ、今庄さんが舞鶴屋からお出なんした、玉葛、それからどうなした、新造、みんなは來て居るかとおき、なんして、今行からそういへとおつせへした、玉葛、アレみなんなし、さうだものを、はやくいつてつれもふしてきや、干「サア、大ごとだ大ごとだ、これよりやきもちのほや／＼はじまりさよふ、平、カチ／＼／＼、

○雷庄九郎 愠氣の争

庄九郎「ナンダ、河豚の北をくらつたよふに、ごうぎにふくれるせ、玉葛、ふせうしておくんなんし、わるひのはむまれつきでおす、庄、腹を立のがむまれつきなら、辛子かきをいゝたてにいゝ、おもしろくもねへ、酒でもものむべい、コウ／＼袖の、一ツつぎや、玉葛、つぐめへぞ、庄、エ、いらざる、うつちやつておきやな、いゝからつぎや、禿兩ほうのかほをみ玉葛、よしやといふに、庄、そんならだれもたのまねへ、手があつてひとりのまア、とてうしなとりにかゝると、玉葛、よしやといふ羽根がはへてとばア、いくらでもあたけろ、なんともおもわねへ、けへれといふのか、歸つてみせるは、玉葛

「どうともなんし、ナンノ酒も、はらさん／＼のんでおいでなんしたろうに、のみたくはねへはづでおす、庄、そんな糞の熱にるよふに、ぶつ／＼するな、いふことがあるならいへ、又いわれねへ事なら、さつぱりとするが、いゝ、わからねへことあきれへだ、ナンノかいるべいかいるべい、とナ玉葛、舞鶴屋へやることはなりいせん、庄、けへるぐらいで、どこへいかうがいらぬおせわさ、玉葛、ゆくぐらいなら、どふともわけをつけてお出なんし、庄、譯とはどうわけをつけるのだ、きれてくれろといふのか、望ならきれてやろう、そんならきれたぞよ、とゆくをむながら玉葛、すみいせんすみいせん、庄、ふざけるな、われがまわり氣も久しいもんだ、よさねへか、このべらぼうめ、とニツ三ツくらはせる、玉葛、そらほど憎くば、どうともなんし、みんながお出なんしたに、おめへさんばかり、こられねへといつてよこしておきながら、舞鶴屋へお出なんしたじやアおつせんか、それも一度や二度ならかまいわしいせん、つゝひてお出なんすには、なんでも譯がなくつちやアなりいせん、庄、譯があるなら、わけがあるにしておけへ、なんでもねへ事に、ヤレあすこへいつたから

どふだの、ヤレこ、で咄したからこふだのと、いけう
 るさい、こういふ身のうへでは、旦那がたへついで、
 どんな所へもゆかにやアならぬ、たとへどこへゆこ
 うと、それつきりこねへなら、うらみをいふも尤ら
 しくもおもふが、おれがこういふきでじやうすをつ
 かひ、よふ／＼はづしてきてみれば、こ、いま／＼し
 い事をいやアがる、玉葛、こつちでもうわさをして居
 る最中、外の内でもある事か、舞鶴やへお出なんした
 事だものを、いわねへでどふするものでおす、庄、コ
 レよく聞けよ、假染にもモウ三年來るぞよ、其うへ
 年季も少しだと、互ひに云ひ約束をして、女房にせう
 なるうといつたは、うそかほぐにするのか、玉葛、反古
 にするぐらいなら、氣はもみひせん、庄、それみろ、そ
 ふいふうんづくだ、始終は女房にもなるうといふも
 のが、そのようなうは氣なやき餅どころかへ、それ
 といふが、手めへのむさい心に引くらべるからの事
 さ、そんないやみはおらアきらひだ、うれしくねへぞ
 よ、ハテわきの内へ、十日二十日居續をしようたま
 よ、かたくやくそくした手めへに、見ける女がある
 ものか、ばかめ、此こはにて心とけ、玉葛、そんならわた

くしが、わるうござりませう、ごめんなさりまし、庄
 「そうありそうなものさ、アレとなりのむつまじい事
 をきけ、

○布袋市右衛門 床の睦言

九重「アノ子、此ちう田舎のか、さんがきいてね、市
 右衛門「ム、そりやアよかつた、久ぶりで逢てうれしか
 つたろうの、九重「うれしいや何やかで、色々なはなし
 をするうちに、マアまあおき、なんし、わたくしが
 とうとが、いつそどうらくでなりいせんとさ、市「そ
 りやアわりいこつた、さぞ親たちは心遣ひだらう、九
 重「それでわたくしに跡をとらせてへとつて、もふ年
 季もすこしだから、相談にきいたとい、すから、
 びつくりしいした、市「そりやア弟が不埒なら、跡を
 つがざアなるめへ、九重「エ、モウ、よしておくんなん
 し、ばからしひ、市「田舎といふものは、かてへもの
 から、手めへがいかねへけりやア血筋がたへよふ、九
 重「おとうとだつて、まだとしがいかねへから、おし
 つけなをりいせうし、と、さん、か、さんもまだわか
 し、まだ妹もおすから、どふともされへす、か、さん
 のい、なんすにも、と、さんがさうい、なんすから、

相談にはきたが、ながい勤のうちなれば、定めてい
 いかわした男もあろう、それをむりに引さいて、ひよ
 つとひよんなことにでもなつては、かへつてなげき
 のたね、せめてはこれまでの禮に、手めへのすいた男
 をもたせてへと、おれはふだん思つて居るとい、な
 んしたから、い、しほにして、おめへさんの事をく
 わしくはなしいしたら、さういふ實氣なお人なら、始
 終見すてもなんすめへ、すいぶん大事にしてよび申
 せ、またと、さんへも、折を見あわせはなしておこう
 と、か、さんはせうちしていきなんした、市「ヨ、よ
 しく、マア一方はわかつて、親父どの次第で、日本
 晴のか、あといふものだ、九重「それだからおめへさ
 んも、いやでも見すて、おくんなんすな、市「そりやア
 氣遣ひするな、人も知たおらが組の戀中、その替り
 にもし間違のあるときは、不了簡なことをするも男
 づく、九重「そんな事なら、どうともなんすがよふお
 す、エ、モいつそ寒ひばんでおすね、市「アレ喜代川
 さんが、とんだ酔てかいつたよふすだが、いかすとい
 いか、九重「よふおすよ、

○雁金 文七 傾城喜代川 眞の仕打

喜代川は酒に呑ひ、仲の町よりよふ／＼かへり、いづれの座敷へやら
 いるさやく角左衛門は、たいこけいしやをひきつれ、喜代川が座し
 きにて大 野田角左衛門「喜代川はどふした、しんぞう千代川
 さわぎ 「いつそたわいな、いきなりに下へ寐なんした、角
 「それだから呑な／＼といつても聞かれず、なんと思
 つたかアノよふにのんだ、たいこ「おいらんも、旦那が
 御酒がおすきなり、あなたゆへに氣をゆるして、あ
 がつたものさ、ばんしん波のつ「アイサ心やすだて、つ
 いのみなんしたのさ、角「それでも仲の町をあるひて
 きたがふしぎだ、たいこ「それといふが、心持よくよ
 わしつたから、およそころしてのむ酒ほど、毒なも
 のはござりません、わたくしなぞも旦那のおざしき
 では、内でのむ氣もあんまり蟲がい、かね、角「そつ
 でなけりやあ、なぐさみにならぬ、波のつ「あれでも吐
 なんすがくせでおすから、胸にあるうちは、いつそせ
 つながらんす、角「そんなら目のさめるまで、いごかさ
 ねへでおくがよい、波のつ「それでもおめへさんが、さ
 みしうおすせうかと、氣のどくでおす、でもなく、たいこ
 のうちでく、たいこ「サア／＼ねつこなしの大しや
 れ、大さわぎのはじまり／＼、トコトシ／＼、角「お
 ひ出した「さみしくもなんともない、△は、酒によふたる喜

代川わかいほ「伊平次」マアきつよいよいようじや、なせそんなにのんだのじやな、喜代川「角さんで仲の町へ出ておりにしたら、おめへさんもしつておいでなんすをり、またか、さんがきたないなりをしてきいして、ちつとむしんのやりよふがおそいとて、みんなのゐるめへで、いろ／＼悪口してはぢをか、せへした、あんまりがいぶんがわるうおすから、やけのみにつひのみいした、伊平次「ナンノ、ほんのおやぶんといふまでのことじや、おまへがあんまりか、さんあしらいにしてじやから、そばへおるわへ、喜代川「それでもなんぞといふと、おやだ／＼といつておどしいす、伊「そのたびにめんぼくないとて、そのよふに酔ては、かんだがたまるまい、喜代川「むりのみでおすから、いつそせつのおおす、たま／＼お出なんしたに、わたくしが心にもなつておくんなんし、いつそじれつとおす、これといふも、みんな人のせいだとおもやア、くちおしうざんす、伊「そのよふに氣をもんで、泣となをせつない、マア氣をしづめて、薬でもものむがよいぞや、喜代川「それでもおめへさんは、内が出にくうおすにたま／＼お出なんしたに、此よふでいつそじれ

つとうおす、伊「よいよ、だまつてひと寐入ねるがよひ、喜代川「それでも、たま／＼お出なんしたものを、伊「ハテまたいつでもこよふわさ、喜代川「ほんでおすかへ、伊「ほんまじや、喜代川「それであんどしいした、誰ぞいるかの、伊「コレ／＼、ゑろうむねがわるひをうじや、耳だらゐもつておじや、新造初川「はんぞうでおすかへ、サアおもどしなんし、と出喜代川「エ、モ此子はばからしい、ぬしのめへでそのようなことができるものかへ、はづかしらしい、伊「ナンノゑんりよはないぞや、喜代川「アレサ、そつちへもつてゆきやといふに、波のつ「それじやアもどしなんせんうちはせつのおおす、下へつれもふしてゆくがい、伊「なんのかまいはないものを、波のつ「それでもはづかしがあげなんし、初川さん、權七どんをよんできなんし、初川「アイ、波のつ「いつそお氣のどくざんすねへ、伊「ハテゑろうよふてじやものを、しかたがないわひ、波のつ「コレ／＼權七どん、下へつれもふしてくんなんし、喜代川はわかものかたにか、リ、喜代川「波の津さん、い△よう／＼いざなわれゆきざしきは、喜代川「波の津さん、いつそうれしうおすにへ、あとはい、よふにしておく

んなんし、波の津「おあんじなんすな、サアおしげりなんし、と出文七「なんのこつた、とんだよつたようにきいたがうそか、喜代川「おめへさんのほうへきいせうと、いろ／＼氣をもみした、文「ふたり客があるそうだが、たれだ、喜代川「おめへさんもしつておいでなんす、やしきの角さんに、伊平次さんといふ、めつたにお出なんせんきやく人さ、おめへさんはしりなんすめへ、文「かみがた言葉のか、喜代川「よく知つておいでなんすね、文「こたくさんな客だの、ためになるきやくは、どふしてもちがう、何事も金の廊だ、喜代川「ナゼおつなことをおい、なんすへ、文「イ、ヨ、うつちやつておるておくれ、喜代川「せつかくこうしてきいしたものを、何がふそくで、其様にふさいでおいでなんす、ちつとうき／＼なんしな、文「ふさぐすじもすこしはあるのさ、喜代川「ナゼへ、さあ／＼おい、なんしおい、なんし、文「どふでいわねへけりやアならぬことだから、いふのさ、喜代川「なんでおすへ、文「もふ爰の内も、こん夜ぎりこられねへ、喜代川「「エ、モじらしなんすな、なんの事でおすへ、文「じらしではねへほんのことさ、きよ川「マア譯でもおつしての

ことかへ、文「わけといへば、手めへにあんまりほれたからのことよ、喜代川「そりやアわたくしがことを、あて、おつせへすのかへ、エ、うるさくなん／＼したの、文「そうでもねへのさ、コウ日に／＼にきのふけふとあつくなるばかりで、かんじんのすることもしねへじやあ、肩身もすぼまるし、手めへのまへもきのどくだ、喜代川「そりやアとくしんづくだから、いじやアおつせんかへ、文「なんぼあいてへづくでも、永く來るうちは、あれやこれやとみくらべにされ、あれほどの事は氣がつきそうなもの、これほどの事はしてもい、と思ふ所より、次第々々にあらがでて、あいそふをつかされ、つき出すばかりにされるより、足もとのあかるひうち、手をひくがい、情のねへよふだが、このいろごと、いふものは、見きりがわるひと、あとへもさきへもめへりがたした、きよ川「ナゼ思ひ出したよふに、其やうな事をおい、なんすへ、おふかたこんやの客人たちを、腹もた／＼せずとめへしたから、それで其やうな事をい、なんすのでおつせう、これも人のためですること、おもつておいでなんすのかへ、文「ハテわるいがてんだ、實はのりた

や玉の輿の世の中だから、ソレてめへがまたなんとか思つて居るうち、わかれば憎くもおもわず、逢た時にも、あつひさむいのすて言葉ぐらひわかけてくれよふといふものだ、もつともてめへが喜代川でなく、名もねへ女郎なら、何もそう用心するにもおよばねへが、錢金づくでわかれたと、いふ評判があつちやあ男がた、ねへ、喜代川成程はたらきのねへわたくしゆへ、そう覺束なく思ひなんすもむりでもおつせんが、わたくしも人にしられなんしたおめへさんを、人だのみをしてよびもふしいすぐらひでは、なんぼわたくしの様なものでも、覺悟のうへの事でおす、今おめへさんに、ていよくつき出されては、人中へ顔が出されへせん、いやと思ひ詰なんした事なら、是非もおつせんから、なんとか丁簡するぶんの事でおす、文「なんぼ其様に手づよい事をいつても、角左衛門がやかましくいつたら、おれをよばれめへ、喜代川「ぬしばかり客でもおつすめへ、文「すれば内所でせくはひつせう、其時はどふする、喜代川「たしか心はわたくしのでおつしたつけ、文「ム、其言葉をおつせん、なよ、喜代川「わたくしはわすれることではおつせん

から、おめへさん此耳を明ておき、なんし、つかへり耳をひ、文「馬鹿アするな、いたいわへ、

跋

直諫は愚齒らしく、諷諫は通なり、北堂のあまき教、高堂のながき面、吝嗇奴の辛きまで、委く味えたる梅暮里谷峨、酔も甘もしてくつて、而後糞精汁の醜きくらしかたを知ば、膏梁の養はざるを恐る、是足をしるの則富るにあらずや、されば此表題の甲子夜話たる事、臍の下へ落着て考べし、

直賢木彦述

甲子夜話終

惠比良濃梅序

謀を本問の中に回し、勝事を座席の外に表すは、娼妓の度量、番新謀士となつて、弱兵を克指揮す、鋪着の陣笠隊伍を亂さず、中正街の出張、駈引に依て向數萬騎の大連累、貝鐘雜戸一手と成て、黄金の爪牙を激といへども、勝に乗て通則は、遂に宅眷落城に至る事あり、美男首僂して偶座をなし、醜夫ふられて忽に敗走す、名代の人質を出して擾合をなす、倚舌の跋扈、斜に行忍の一騎立は、帯紐を解く裸武者、深窓の血戦、座鋪の對陣、作者の陣笠組、素見物の衆群に順ひ、ヨイ／＼ワイ／＼、アリヤ／＼／＼、空叫の凱歌をつくり、廓中に入て是を看に、勝て甲の絡を締る者、萬金の利を得るにやあらん、猶好士の指揮を傳へて、娼女を生捕手管、俠客を打捕手練を繼、其勝劣を此に誌す、願くは御見物加勢を得て、おぶさらん事を待ものならし、

于時寛政十三載辛酉孟陽吉旦

十遍舎一九

惠比良濃梅

魚鱗鶴翼之圖

附出初陣之時此
備也、先鋒有挑
灯持、中軍前後
兵、弱克勝強之
勢、恰無人如
行、又抱兵有左
右、防生醉人也、

新造 禿 若者
新造 禿 遺手
新造 娼妓 番新
新造 禿 禿廻 若者

第一 料理茶屋勢揃之事

附リ酒代割合之事

第二 番場忠太謀生醉事

附リ横寸賀寸平調若者事

第三 謂三里橋神伸滑稽事

第四 梶原源太生捕娼女事

附リ口舌強勢之事

第五 佐々木高綱被三抓居事

附リ娼妓貞節之事

惠比良濃梅

第一

去ほどに梶原が郎等番場の忠太が其出立、花色郡内の小袖、紋さやのあわせ羽折、かいきの裏の付たるをちやくし、ぱつちのすそを小みじかくひき上ゲたり、ついできたるは姉輪の十郎、黒つむぎの小そで、鶯八丈のはをり、何もしほりの手ぬぐいにて、頭をくするくつ、みしは、土ぼこりの用心なり、是も同く横寸賀寸平、ふとり島の小袖、こげちやのぶつさきばをり、此一人ばつちなしの尻はしより、膝栗毛を飛ばして、大磯の廓へいそぐ道すがら、先いきやすめに一ッばいしかけ、いきをひをつげんと、料理茶屋へづゝとはいる、茶や「おくへいらつしやりませ、十郎はき物はこゝにおいてもよいか、茶や「宜しうござります、忠太「なにがある、茶「御酒をあげますか、寸平「そふさ、さかなは、茶「小ざかなでもあげませふか、忠「にざかなはなんだ、茶「ひらめでござります、忠「其外に何があら、茶「平でござります、忠「それはなんだ、茶「ハイき

りにみ松だけ、くわるみつばなぞと申ものでござります、忠「そふしてまだ何がある、ちや「ちやわんもの、忠「それは何だ、ちや「鴨の玉子とち、忠「まだなんぞあるか、ちや「ハイあちのしほやきかふくら煮、おすいものもござります、忠「そのすいものはなんだ、ちや「ハイつみいれ、忠「それにしよふ、酒はよいのがあるか、ちや「ハイ、忠「直段はいくらだ、ちや「一合廿四文と八文、忠「まだよいのがあるか、ちや「ハイ三十二せんのは、ぐつと上酒でござります、忠「そんならそのよいのを、こふと一合五勺ばかり出してくりやれ、ちや「かしこまりました、と立て行、ほどなくたけ長の鉢巻し、十「ばんば氏おはじめなさい、忠「先おてまへから、お席順に、十郎「しからばおどくみをいたそふ、ヲト、ト、是はつよいおしやくな、寸「あつたらものを、とふろのはんしあいたにあつた手が、忠「ときにこゝは、近頃のみな出して、こぼれた酒をふく、忠「ときにこゝは、近頃のふしんだ、寸「よほどひろいの、間口はいくらある、女「三げん半ござります、寸「そふだろふ、宿賃がよほど出よふ、と何のせわにもな、忠「ときに是計りではのめぬ、なんぞ肴を申付よふ、十「いかさま、なんぞよふ

ござろふ、忠「コレ、したしもの、よふなものを、少し計もつてきてくりやれ、女「ハイ、とたつ、十「きやつうつくしの、おくの瀬山どのによく似ておる、寸「ときに是は、とてうしのふた、今少し申付よふ、と手をた、ほどなくしたしもの、とてうしを見て、女「女の顔に梅ぼしのはつてあるを見て、寸「おまへの顔に何かついておる、ドレ、ととりに、女「是はづゝうのまじないでござります、忠「めいよう屋敷などでも部やがたが、折ふしあのよふなことをいたす、さてはづゝうのまじないだ、解せた、寸「時にこのおさかづきは、もふきこうでおつもり、忠「横すがはどふだ、寸「酪酊々々、忠「デモ御順に、寸「なんでもお銚子ぎりさ、さかづきはおさまる、忠「書付をもつてきやれ、女「ハイ御酒が三合に、こふと百八十文でござります、寸「すいものはいくらだ、女「十六せんづゝ、忠「よし、此内三人ながら、うちふとこるへ手を、寸「これからつかはそふ、忠「よふござる、と手ぬぐいにくるんだ、ソレとつてくりやれ、女「ハイ、とかそへて膳の、忠「サア参らふ、寸「これはおせはになりました、茶や「よふおいでなされました、

第二

扱大磯の廓中には、三方に堀をほり、高塀をつき、左右深田にして、前には五十間、三きよくの道をひらき、土手八町をかまへたり、梶原が郎等ども、よき敵もがなひつくんで、高名せばやといきりたつて、大門の内へすつとは入り、十「ばんば氏、きこうのおなじみはどこともとだ、忠「まいづるや傳三郎かたでござる、寸「拙者ははじめて罷越たが、さて、繁華なことでござるの、忠「いかさま寸平子は初陣だろふ、サア御兩人とも、こふござれ、両がはの「チャンラ、と三人そこく、にけんぶつ、新造竹里「ヲヤ忠さん、おいでなんし、ふりしん大せい、ヲヤよくお出なんした、若者「いらつしやりませ、とつれて、忠「いつしよにしておいてくりやれ、とこのものを、若「あなたも御一所に、寸「これもか、わいてわした、サアこれから、やわらだぞ、ときもの、すそをまくり上ゲ、どきり、ととほ、きを持出、忠「さん、此あいだはねつからいらつしやりませぬ、あなたがたよく、十「ヲイ、寸「ナニカ、きさまはこゝのわかいしゆか、若「さやうでござります、寸「コレははじめて、又是からおせわに預ら

ふ、とあたまたから一文いら
 忠太が うちがはしきりやういたつてよし、尤としまだけけはでを
 あい方 かついろがたちにて顔も至て細し、やり梅まだ十七八、至つ
 る、ばかりの目もとかはいらしく、うちかけうはきも
 ひぢりめんにて、ひときはめだつきりやうよしなり、
 若「ひとつめしあがりませ、忠姉輪初なさい、十」し
 からは、うけほして、あのお子へあげてくんない、若
 「ハイ、とさしづにまかせて、やりむめがたへとりつぐ、寸平はじ
 しくおもひどころ、十郎に 若「ハイあなた、と寸平が前に盃
 先をこされむつとじて居る、 忠「サアどなたも、火鉢をそこ
 し、大きにふくれ返して居る、 忠「サアどなたも、火鉢をそこ
 へあげよふか、かつ「ナニわたくしらアよふざんす、
 十「イヤこのほうへ申うけよふ、ちわざく火鉢をもつてた
 てすはる、寸平はいよ／＼こうはらがつて、むしやう 忠「寸公
 にさげばかりのんでいれども、とかくふさぐ様子なり、 忠「寸公
 どうした、うち「ほんにぬしばかり、そんなにはなれ
 てお出なんせすと、もつとこつちへおよなんし、寸
 「どふしたか気分がすぐれぬ、忠「ひとつのみなさい、
 十「ヲット寸平子へさそふか、寸「きここの盃はいや
 だ、十「こやつみどもをさらひおるの、寸「ヲ、さらひ
 だ／＼、十「ハテそふいはすとのみなさい、とさかづき
 寸平が膝にあたつて、盃 寸「コレなにをする、ぶしつけ
 はうつむけになると、

な、遊所だからだまつてはおるが、十「イヤさま、
 おかしなことをいわしやる、寸「何がおかしい、武士
 たるものが人にさかづきをさすに、なげほふること
 がござるものか、十「寸平子はもふたべよつたそふ
 な、寸「拙者がいつよいました、十「酔つたから、そん
 なたわごとをいわつしやる、寸「何たわごとだ、イヤ
 身どもそんなこときいておるふうでないぞ、とだん
 高に、十「イヤそこもとも支配がある、申分があら
 ば、宿所へかへつて申されい、いかていにも承らふ、
 寸「なにすいさんな、とたがひにひきぬかんと、このあた
 こしともあつたことをわすれ、おつかない目付をして、たが
 に顔を見やつて、帯のあたりを握こぶじにてさぐりませ、このさ
 さうと立ぎへがする、忠太いろ／＼と宥めて、忠「これさ寸平
 どの、あね輪氏とは竹馬の友ではないか、それにど
 ふしたものだ、寸「イヤそれでも、あの男は盃のさし
 よふをしらねへ、盃のさしよふを、せん／＼十郎が、三ば
 さしたるを、むねに、イヤサ盃を、さすすべをしらない
 おもつてくどくいふ、イヤサ盃を、さすすべをしらない
 おとこと、同席をいたすもいやだ、みどもはもふ歸
 る、忠「ハテサ、まあよふござるは、寸「イヤ歸る／＼、
 とかけだす、忠「まづ／＼、寸「イヤ／＼、忠「ハテサ、
 忠太おし止め、忠「まづ／＼、寸「イヤ／＼、忠「ハテサ、
 そふしたものではない、コレサ／＼、ソレあぶない、

うしろの火鉢に薬鐘がある、寸「イヤ／＼薬鐘のさし
 よふもしらない男に、つきやうことはいやだ／＼、十
 「ナニ薬鐘のさしよふを、寸「ヲ、サ薬鐘を、イヤさ
 かづきだ／＼、此内忠太、廊下にて笑つて居る寸
 平が相かたへ何か吹込むと、さつそ
 づくに承知して、寸「もふかへる／＼、かついろぬしやアな
 んざんすへ、マアこつちへお出なんし、寸「いやだ
 いやだ、とつ、ばりかへりし大の男を、ちよいとつまんでとう／＼
 いやだ、ひきすつて行、どうやら、こふやらいかたのさしきへおさ
 まつて、やう／＼なりがしづまる、ひとへに忠太が
 あいかたに、はかりごとを吹こみしゆへなりけり、
 兵書曰、忍は一字千金の法則なり、故に初會此一字
 を以て、内守を密に保べし、能是を守者は、敵地
 本間の床に臨んで高名をなし、能守ざるものは、孤
 拔身を握て打捕べき相人も見へず、硯蓋のつまみ
 喰も、段々残すくなになり、空しく兵糧に盡て敗
 北すべし、

第三

り、はや夜も更行まゝに、たいこもちの口も干上り、
 藝者もばちにてあくびのふたをするじぶん、硯蓋に
 はしそのみと九年母のはしつぼのみのこり、燭臺の
 下には、ゑびのからの山をなし、たばこぼんは、は
 や紙くす籠の出みせとなりぬ、尻にはかけて、舟
 宿もおいとま申せば、薬鐘あたまで打ふつて、茶や
 のてい主もたちかへる、跡はひつそり、本間に床も
 おさまりて、つぎの間にはしんぞうかぶろが、火鉢
 をとりまくむかふ座に、ゑど神里橋「ヤアの子が、
 もふこぎ出したせ、番新八重梅「けしからねへよ、ソレ
 火鉢がありがたいすはな、としきせしんぞうが居眠りするを起
 そうの帯へ、下ぐ、りのひもを、す、りきやういつのまにか、このしん
 けて、むしやうにひつぱりながら、里「おさるはめでたや／＼
 な、むことりすがたものつしりと、コリヤあるかい
 な、皆々「ヲホ、ふりしん「およしなんし、すかね
 へりきやうづらだよ、とひもをひきすつたなりに出てゆく、
 せなかなちめ、しげ梅「源さんはどふなんした、や、お
 火鉢の側へより、よりいした、おめへさんは松さんかへ、しげ「ナニい
 つものぢいづらがきいたわな、わたくしやア、も
 ふ／＼いやで／＼なりいせん、そしておかしなほ
 ひのする人さんでおざんす、里「ハテいまごろは、客

もすへねへものだが、やゑ、そんなでもあの客人は、いつそおめへさんのことを、しんせつにおつしやりにすによ、里、おめへがなんぼきらいでも、むかふじやアはれているから、あんどるなく、しげ「せめてりきやうさんのやふな、ちうぐらゐの男さんすとい、けれど、里、ヒヤアこいつ、中ぐらゐとはぶしつけない、それでもやゑ梅さん聞てくんねへ、せんど夜あかしの時、なんでも此しげ梅さんをいけどるつもりで、あぶらげのやうなふとんを、やうくはへつけてきて、ざこねとやらかした所が、いつのまにかおいらんを、ふとんの外へぐつとけだして、こやつて大のじなりじやアねへ、天のじなりになつて、ねなすつたとこを見ちやア、あきれておざがさめたアな、しげ「ヲヤうそをおつきなんし、そして天のじなりたア、むづかしくおたとへなんすの、里、ハテおとこなら大のじだが、おめへたちやアかうげへをさしていなさるから、ソレ天のじなりだ、それも辨天さまの天のじだから、そこで臍の下に、はす池がありやす、しげ「ヲヤよくいろ／＼なことをおつしやりいすよ、人のこたアおい、なんすけれど、ぬしもこのあへだは、廊下にふ

んぞりけへつて、何もかもだしなんして、いつそざまぐねへなりでおざんしたよ、里、ほんにその時ア聞てくんねへ、なにがらうかに、こやつてねて居るものだから、客人なんざア、ハイ御めんない、おきんだまをまたぎますなぞと、いつて通るやつもあり、又きやんな手やいと見へて、おつなことをいつたはな、おいらが兩手をはらの上へあげて、あし計りぐつとふんばたがつていたのだから、なんだこいつアやろの澤瀉みるよふだとさ、そのまたあとからきたやつがい、くちよ、こいつアなんだ、板の間へふさりやアがつて、やろうのかまぼこじやアあるめへしとさ、しげ「ヲヤ、ヤ、ヤ、ヤ、此内びかくと光るきものをきたる、花ざきさんがおつせへす、さつきからまつているになせこねへ、はやく来てあしでももんでくれるツサ、里、ヲヤぶしやれなやつだ、やゑ、そんなでもぬしが、よくかわへがりなんすそふで、いつそはなざきさんが、あめへなんすよ、里、ナニサ、おいらアこつていふほとけしやうなり、それに色男といふもんだから、あれにやアかざらねへ、どけへいつてもりきやうさん／＼と、やゑ、ねつからい、てがお

ざんせんねへ、里、おきやアがれ、しげ「そんなでも、りきやうさんにはほれていなんす人がありいす、里、だれだ、しげ「ア、ね、と耳に口を寄せて、み、つとう、とかけ出、里、このあまア、かぶろ、サアおいでなんし、とたつひやうしに、帯の間からきしやこばら、里、アイタ、、、ヲヤきしやごをふんづけた、ハテきしやごのふりそふな、天氣ではなかつたが、と出て行、

第四

此座敷の客といふは、梶原源太、身放埒にして勘當をうけ、母おやがほまらがねのしをくり、大磯へ入びたり、今はてう人どうせんの丸ごし、是をもつけのさいわいとしていらくもの、相方は「梅がえ」、尤ふかき馴染にて、取おとしてもはなれまいと、漆をもつてかためたる、本かた地の戀中なり、源「ヲヤさつきから氣がつかなんだが、疊のおもてげへがよくできたの、梅、おめへさんよりやアましでおざんす、このあいだア中の町へもさつ／＼とでかけいす、源、うそをいふせ、梅、うそじやアおざんせん、だれにでもきいて見なんし、源、そりやアい、くめんだ、ちつとかりてへの、梅、いせやのはらひはどふなんし

た、源、きのふこけへくるとき、まづ半分やつておいた、梅、ソリヤアよくしなんした、源、なんでもい、鳥がか、つたと見へて、このあいだアおめへのかほが、とんだいき／＼としたよふだ、梅、ナニそんなでも、まだいつそくらうになりいす事がおざりいすわな、源「なにが、梅、おめへさんのことが、源、おいらがどうした、梅、どふなんしたかしりいせんが、なんでもわたくしにやア、ものをおかしくなんすから、それがいつそ苦勞ざんす、源、何をおいらがくしたへ、梅、こんなにたげへに行末までも、どふしてこふしてと相談しやつて、来ておくんなすおめへさんにも、お似合申しせん、たとへばどんなことをいつておきかせなんしたとつて、あいそふをつかさよふなわたくしじやアおざんせんものを、なせうちあけて、はなしてはおくんなせんへ、源、ソリヤア何のことだ、梅、おめへさんのお身の上の事ざんす、源、なるほどこりやア、どふも外聞がわるくて隠していたが、そんならおいらが今のみものうへを、梅、とふからしつておりいすはな、せんども内しやうで、わたくしをよびつけおつせへすにやア、きけば源さんは、親ごのかんど

うをうけていなんすといふ事だが、もつともひさし
いなじみの客人なれども、そふいふ身になん／＼し
ちやア、もふふけへこともあるめへから、てへげへに
してしまふが、いと、それからいろ／＼と、いけ
んがましいことをいつてきかせなんしたけれど、わ
つちやア、なにそふでもおざんせんそふさと、いゝま
ざらかしておきいた、ないせうへさへ、そふいふ
ことがしれいすものを、それにおめへさんは、私へ
はなんともお話なんせんは、おうらみでおざりいす
よ、源、イヤそれはな、ひよつとおめへがあいそがつ
きちやアわりいからと、かくしていたもまんざらな
こゝろいきじやアねへわな、いつまでもこうしてき
てへからのことよ、梅、ナニこれほどほれきつており
いすものを、そんなことなりやアなをの事、是から
でも人に見くびられなんせんよふに、なにごともそ
うだんづくにして、おめへさんの御つがうのわりい
ときやア、又どふともしかたもおざんしやうが、そ
のかわり今までのよふに、はでに何かをしなんしち
やア、しうは二階をとめられなんすよふになりい
すから、それはおめへさんのお心にありいしやう、

とかくこのうへとも、お心づけへをして、おわづら
へでもでぬよふにしておくんなし、それがいつそ
苦勞になつてなりいせん、源、ナアニそんなことア
きづけへなしき、おふくろが承知のまくで、何時で
もそふいつてやりやア、あづけたものをとるよりや
ア、こゝろやすといふもんだから、てへ／＼今は、
ほんに御苦勞なしのおみのうへだ、梅、ソリヤアまだ
しも、おふくろさんのおかげでうれしうおざんす、
ひよつともふこけへお出なんせんよふになん／＼し
ちやア、わたくしやア、もふ／＼いきてはおりいせ
ん、ふびんだとおもつておくんなんし、と少し目が
じんてくる
源、コウ、それでもふおいらが心は、打あかしてしま
つたといふものだ、是から又おめへの、かくしなさ
ることをいつてきかしな、梅、ヤ何を、わたくしが
かくしいしたへ、源、何をかくしたもきがつゑ、佐
佐木がことを、コウするめへと思つていよふが、何
もかも承知のすけでいらアな、き、やア此あへだも、
死ぬのいきるとさわいだそふだが、どふでこつち
はそのじぶんだと、かくこはきわめて居るもの、こ
ふ又のろまにされる程のとがはしねへわへ、梅、成程

四郎さんの事は、おめへさんには隠しておりいた
が、是にやアわけやいのあることでおざんす、源、ナ
ニわけもへちまもいるものかへ、うぬがものをかく
しだてする根性骨で、人のこたアヤレかくすのなん
のと、やかましくいやアがる心いきがわからぬわへ、
梅、ソリヤア一通りにお聞なんしちやア、お腹がたち
いしやうが、これといふも、おめへさんゆへのこと
でおざんすものを、源、エ、なにをいやアがるへ、梅
「マアおき、なんしな、勘當の身となん／＼しちや
ア、今までよりかアなをのこと、都合のわりいことも
おざんせうし、わつちも又おめへさんゆへにやア、い
ろ／＼しがへもしつくして、都合のわりい事ばかり
で、ソリヤアいわすとも、さだめししつていなんせ
う、此うへともおめへさんが人に笑われなんせんよ
ふと、わたくしが胸ひとつで、どふぞこふぞといろ
いろにおもい、すから、それでつがうのために、四
郎さんをかいてやるのでおざんすものを、いかにわ
つちらがよふなはかないもんだとつて、あんな髭づ
らにほれいすものか、い、かげんに腹をお立なんし、
あんまりばからしうおざりいすよ、源、もふそれでい

か、よくしやべるあまだア、ほれねへものがなせ
みあがりをして、四郎をよんだへ、梅、そりやアおめ
へさんの様にもおざりいせん、そこが手でおざんさ
アな、今宵も四郎さんが来ていなんすから、どふぞ
もうちつと氣永に、見てゐておくんなんし、今にわ
つちがこゝろいきをお目にかけいしたら、それこそ
あやまつた、かんにんしろとおつしやりすよ、源、馬
鹿アいへ、それまでだれが待つて居るものだ、ふて
へあまだア、どふとも勝手にしやアがれ、とすつと立上
り、帯を締め
す、梅、もしへ、おびを締てどぶしなんす、源、どふ
するもんだ、けへるのだ、とすつと出て行んとするを、しが
みついてひきとめる、ぶつてもた
たいてはなればこそ、涙とともにやう／＼と引すへて、云はうと
すれど胸いつばいにふさがりし、持病の癪氣に身をたへ、ウンと
ばかりにそりかへる、さすがの源太見てもいられず、かみいれより
薬とり出し、かみくだきてのませるやら、水よきゆよとひとりうら
たへ、ともしきをもみかきほうするうち、やう／＼ときがつき目を
ひらき、源太が顔をつくんと、またも涙にふしつむ、今はふび
んとおちらしく、い源、コレ、こゝろもちほどふだ、今
のやうに云つたのも、ひつきやうはかはいさがあま
つてのことだから、かならずこゝろにかけねへがい
いよ、梅、おめへさんがそふいつておくんなんすりやア、
もふ／＼それでむねがはれいした、わつちがこゝろ

におもふだけは、どふも口ではいわれいせん、今におめへさんのうたがひをはらして、おめにかけいしやうから、そふおもつておくんなんし、源「こふいつちやア、どふかのろいねを出すもんだとわらわれよふが、今おめへに見かぎられちやア、ほんに死んでもいきてもだ、こふまたはれさせてくれる事はねへ、さりとほうらみなもんだせ、梅「おめへさんがそのくちで、又ころりつとさせいすはな、いつそもふにくくつてなりいせん、源「マア其つもりで、四郎がとけへいつてやりな、梅「もふいきいすめへ、源「それぢやアわりい、サア／＼はやくいつておたのしみなせへ、梅「まだしやくがほんとうにおさまりいせん、ちつとおしておくんなんし、源「ドレ／＼、こ、か／＼、梅「ヲ、い、きみざんす、そふいつても、かはい、男だのふ、としがみついて、い、源「アイタ、コウ見ねへ、これが今おめへのませた薬だ、梅「ヤ／＼なんざんすへ、源「錦袋圓をのませよふと思つて、うろてへて観音さまのあたまを、かみくだいてのませたはな、梅「ヤ／＼ばからしいのふ、と首うちへからみついたな冠着る。りに、ふんの上へ轉けて

作者曰「これからが又ごうぎな癪だろふ、互に深き戀中も、名にたちばなの年増にはまる源太が鼻毛は延候、抓のめされて氣をもむなと、廻し座敷の後陣にひかへし佐々木が思ふも、己惚なり、なんでもおいらが色おとこ、イ、ヤおれだとおもつている、こ、が則女郎買、あそびはやはり遊ぶなれば、啞も誠もあなた任せ、どふでまゝにはならぬよの中、妙々、

第五

梅がえがひとり客は、さ、木四郎「こよひは源太に先陣をしられ、そのみは名代をとつて後陣へ廻り、角行燈のうすぐらき所にちんを取、かわりのふり新をちよるまかしてくれんといぢりかける、四郎「コレをふつれなくせずと、こちらをむきなさい、ふり新「アレサ、およしなんし、四郎「これがよされるものか、新「ばからしうおすよ、ひつこくしなんすと、聲をたてへすにへ、四郎「はてやばな子だ、いふ事をきくと、なんでものぞみのものをつかはすが、新「それでも、おいらんがしかりいす、四郎「ナニおいらんがしかるものだ、エ、ふつくりとして、いつそからだがぶは／＼

する、コレハたまらぬ、新「アレサ、ひげでいとふすはな、エ、ひつかきなんすな、いてへつめだよ、と聲高にいふ、此内梅がえ、煙草入とみすがみを手にもちそへて、つまとり、かんざしにてつぶりなかきながらはり、梅「なんざんすへ、そう／＼しい、新「四郎さんが、どふもなりいせんわな、梅「馬鹿らしい、いぢめておくんなんすな、新「ソレ見なんし、とそうそうに出て行、むめて、しんぞうのれたあとを、三ツうつてこれこゝろ、客、梅「あの子の首すちとまくらの間へ、細いうでなぐつと差込み、梅「あの子をどふしなんした、四郎「どふもせぬ、梅「それでもあんなにおほきな聲をしなんしたものを、おめへさんも氣の多い、そふいふ事じやアわつちがどんなにおもい、しても、はりやいがおざんせんよ、四郎「ナニサ、此方はきさまにぞつこん執心だものを、始終のところは、妻にでもいたそふかとぞんじておるぐらいの事だから、うわきな事は致さぬ／＼、梅「そりやアほんとうにかへ、四郎「實だ／＼、梅「だましなんすと取つきいすにへ、うれしいのふ、とひげだらけなほうも、べたへかぶりつき、しへ、さつきに八重梅さんが、これは、番新也、おめへさんにお願もふしいしたこたア、どふしておくんなんすへ、四郎「なにか金子の事か、随分承知いたしたが、しかなしながら約束の通りは、こゝろもとないが、是非半

金はいかよふとも手段いたそう、梅「ソレ見なんし、おめへさんが實のねへせうこでおざんす、なんぼいやしいつとめをしておりいすわつちらでも、こんなこたアてへ／＼いわれいすもんじやアおざんせん、たがいにほれやつているふかいななじやア、何やかやこんなことも、相談をいたしたいすもんでおざんすから、それでおめへさんに、おねげい申いすも、一通りの中たアおめい、せんからのことでおざんすものを、それにおめへさんは、そんなに氣の知れたことをおつしやりいす、ほんとうに又實があんなすなから、よくむしんをいつてくれた、それでこそてめへのこゝろいきが知れたと、いつておくんなんしてこそ、わたくしもうれしうおざんすものを、五匁や十もんですみいすぐらへのことなら、おめへさんへおたのみもふさすとも、どふとも都合はいたしたいす、もふいりいせんから、そふおもつておくんなんし、四郎「イヤサ、そふい、なさると、此ほうははなはだいたみいる、しからば十五もんめ用立ましやうから、きげんなをして、どふぞつかつてくだされ、梅「ヤバからしい、もふいりいせんわな、廿匁なくちやア、ど

ふもなりいせんことがおざんすから、それでそふ申
いたしたはな、それじやアわづかな事で、わたくしが心
づけへをしておりいすをも、ふびんだとおもつてお
くんなんすおこゝろはねへといふものでおざんす、
わつちもおめへさんたア、ひさしいおなじみだとい
ふのでもおざんせんが、ほれていゝすゝゝろからは、
千ねんもなじんだ客人のよふにおもつておりいす
故、それでいいにくいことをもおたのみ申いすもの
を、ちつとはくみわけておくんなんし、なせ男とい
ふものは、そんなにこゝろづよいもんだのふ、とかちり
火のやうな顔をおつつける、四郎もふよいゝゝ、そふいわれてはい
ちごんもない、あやまりいつた、梅、そんならわつち
が申いした通りを、四郎ヲ、サ、承知々々、梅、やすう
けやいにうけやいなんして、おだましなすときゝ
いせんへ、四郎きよごんはいわぬ、少々はこゝに
もある、あとは明日さうゝにさしこそふ、まづこれ
を、と紙入より梅「そんなら今に八重梅さんがきなん
ししたら、あの子へわたしておくんなんし、とさすがは晝
とらす、こゝがいろきやそしておめへさんは、なせおびを
してゐなんす、きうくつらしい、ドレといてあげ

いしやう、ヲヤむすびめがしれいせん、とあまりげんき
いたしるしがじきに見へる、四郎むすびめはこゝだゝゝ、
客はなんとも気がつかず、梅「ドレ、おめへさんの手をおとりなんし、だのはこむす
びにしてあるを、ぐる四郎コリヤ腹がしまる、よしなさ
ぐる」といって引張る、四郎「コリヤ腹がしまる、よしなさ
いゝゝ、とじしんにいいて、ついでにふんどしを四郎「サアこ
れでよいか、梅、おめへさんはでへぶ、むなひげとや
らがあんなんすねへ、とんだおとこらしくていゝも
のざんすよ、四郎「これはちかごろ御挨拶かたじけな
い、だいじなくば、ぐつとこつちへよりたまへ、梅
「こゝかへ、とひつ、もしへ、四郎「なんだ、梅、うれしい
ねへ、ときやくにはおびをとかして、そのみは
此兩人鼻とはなとを突合せしは、あだかもかけ鯛
のごとく、鱒ある男一匹も、汐先にむかひし黒鯛な
らで、此道にはいづれ白い歯を見せぬはなし、猶此
鯛の片身をくすねて、作者が木箱のねすみ入らず
に隠しおくも、イデ後篇のお看といふ時、ずつと
出すつもり、マア何にしる腐ても鯛、ちとごさつた
と見ゆる目元は、人の心をうごかすやつ、嗚呼此鯛
のこけとなること、慎ずんばあるべからず、

惠比良濃梅終

後序

青樓の通言曰、オタンチンざんす、ネコざんすの唱
は、揚屋町へ通ひ京町へかよふ、色男もおたんちん權七も、かよ
ひ廓の仲街、花の盛の景色を見ては、禿にあらぬ芳野
も跣足、雪の詠の白妙には、煩惱の犬も狂ふて遊ぶ居
續面白し、しかはあれど辛氣辛苦の苦界十年、客は
待宵の行燈に、鬼灯ほどの丁字頭を喜び、秋葉燈を見
ては、言はぬおもひの胸の火も、迷へばくらき眞の
闇、吉原計月夜とは、悟つてあかるきと客意ならん、
其有増の餘情を穿ものは、一九といへる僕が戯友、は
づかしながらすがゝきを弾り、口三絃のチンチャ
ント、筆を此に置事しかり、

若松亭扇光述

跋

此柳巷にてげぢといふは、梶原が事を謂にあらす、さ
れど彼にも其名あり、仍て娼婦を嘗ちらかす、此艶男
を究お蟲とやいはむ、嗚呼克むしにあらすや、終に借
金の斷、食言も後より露るに至つて、みす紙のひと重
に捻附られ、連子の外へ打捨られて、再び五分縁の
二階を踏事能はず、是に於て佐々木が定紋の四ッ目
屋を用るとも、娼妓仰向て天井の板を算へん、只此畑
には金の生る木お義男を、移し植ん事を願ふ、されば
錢は朝日の彌陀の光を奪ひ、金は九郎助稻荷の木の
葉よりも澤山なり、此に十遍舎一九なるもの、偶南
鏡一片限に遊んで、則二朱だけの差しや禮を書く、是四文
錢の二本棒、はなつたらしの甚鋪にあらすや、此馬鹿
者が後馬に乗つて、予も又爰に馬鹿をつくす、夫で御
見物の御慰になると爾云、

於三十遍舎机上傍

十雨亭雪曉誌

やまあらし自序

山嵐と題號するは、康秀が古詠を慕ふにあらず、一日街上に、豪猪といふ優揚戲を見るに、畫工異獸を丹青し、内に猪一蹄をつなぐ、是の冊子に相似たり、ナゼナラバ、文面に古文の看板を出し、不佞種彦木戸番となつて鐵鏈を鳴らし侍るてふなど云ふ和語を號ばして、俗眼を惑すといへど、實はかの豚にして、人を化す術もなく、人を嚙害も無し、讀んで易なく、讀ぬで事かけずと、大半二が徒のかた老爺に譏んを恐れ、看板に空言なしを、龜の毛をもて筆をゆひ、兎のつの屋にしるす、

川竹の流にゑんある藪醫者
第は、唐と日本のごもく言葉、枕
も向ぬ北へ行と吉原をさみす
一るは、浪人者の武者氣質、咄ば
とんだ間違のほつたん、
代時草 茶店段

◎第二
脱カ

神と佛の色事に女房がやきも
第ちは、御七五三温ゆふてつま裏
らぬ八功德池の水かナ輪、を
三とせばわれる茶わんばちやの
世店 別房段
説話、

いづきんくの
酒取物語 とめて 菜葉蝶
つとめするみは とまる
常々愁憂
春待屋室咲 第一番目
花兄屋梅太郎 二たて目

やまあらし

一、淺草の段

安養世界の太立物、天堂の親玉株、觀世音菩薩の御誓願空しからず、東都の東北、つみ淺草の精舎は、參る人ありもどる人あり、桑門あり武家あり、萬葉家の歌人は、とわたる雷門を這いり、儒者は鬼形連鼓と、王充が空言を思ひ出し、神道の夜講聞おやちの徒は、龍雷の口傳としちごさひをいひ出す、それが中に風の神が袋もつさまを見て、一ト人者の背中をけがす身振なりと笑ふは、佛工もあづからざる所なるべし、老女が池の願ほどきに、竹筒てふものへ甘酒をいれてしづむるは、屈原をとむらふかと思はれ、鳩の豆うる女が、楊枝うちながら棹をもて鳥追ふは、高鳳が書をよむに似たり、おいくが評判銀杏にのこり、因果地藏の縁記は、丈八お駒に演説す、粟島の前にゐざりも居ねば、熊谷稻荷にあつもりを賣るそばはなし、小町も奴婢につかふべき娘、喜撰の茶を汲み、ひかる君も従者とすべき息子業平橋をよぎる、藤屋巴屋を

始め、軒をならべ棟をまじゆる料理茶屋、はしごのと
ん／＼やむ時無く、かまもとの湯げさつと立つて霧
ふかきに似、孔明が矢も爰にとり得べく、そうどう
この火わら／＼ともえて、良秀が不動尊をかく下書
ともなりなん、河豚の鐵砲は冬をさかりとし、どじよ
うのおどりこは橋町の群をいづ、松江の鱸を潮にし
たて、首陽山の蕨蛭子爰にゐまさば、はまやきをく
らひ、琴高も爰に來らば、ほそびきをあぢわふべし、
夕岸のあちは、兼好が聞ば尊とがらん、生田川のあを
くび、函谷關のかしはめんどり、三千世界をごたませ
にし、無いものとはは鯨の丸やき、白魚のあら煮ばか
りならんか、かゝる繁榮の鬼にかなぼう、頃は三月
空うらくとして、千里に雲の立居なく、二十軒の茶
屋が床几に腰打かけ、あれこれとむだ云ふて居る男
は、もと本所邊の息子株にて、名を梅太郎と云ひ、う
ちは諸國狀さしに狀たつぷりと、けこみに金網をは
り、店のことこの顔は、おほへぬのがあるぐらゐな
れど、このあいだはちともうせんのみにて、春の日
の長きをこゝにくらすおりから、同じ茶やに這入る
は、おさだまりの町醫、俳名を春夕といひ、もつとも

たいこもち半ぶん、駕にのる時は唐本をいれ、うち
 に一抱子がかな本をよむたち、不佞足下實にといふ
 口癖もつともしげし、梅太郎が顔を見るや、梅さんこ
 れは古いやつだが、しやば以來だねと腰をかくれば、
 梅太郎も笑ひかけ、いつ見ても元氣はいひね、春夕さ
 んおめへにはちつとあいたかつた、アイわつちもさ
 ト、かく云ふは一體この梅太郎、さるうちの室咲とい
 ふ妓と、龜鶴のちぎり淺からず、此風聞を聞かんと
 の事なるべし、春夕は新渡の扇で、袖口からあふぎな
 がら、其事さ、こねへだ公の妓の所へめへりやした
 が、せひ足下を唱導して、格子迄來てくれろと云ふ事
 さ、そして玉章をことづかりやした、何か急用だそう
 だと、ふくれかへつたはな紙ぶくろをさがして見て、
 ホイこいつお矮屋の机上へをいてきた、梅君子足下
 不佞の草庵へ駕をまげなせへ、そんならそうしやせ
 うと、如真ごのみの煙筒を長づへ入るところへ、と
 ろく〜とお屋敷と見え、二三人通りかゝる、春夕は
 ゆびざして、ホ、ウいづれの深窓にや、實に絶世の佳
 人だ、だれに銀帶をゆるす、こいつはきがわりい、べ
 つこうのつくり物と、小まぢがけの下年もとひはあ

どけねへ、扇は澤村曙山か、成程こゝいらだらう、義
 之が墨跡、小倉山莊の色紙よりありがたいの、イヤ
 又あとからとしまぐるせ、とふねすみにもちやむく
 はすこしくすみすぎて、火鉢から出そうだ、ものおも
 ひすがたで、百度めへりのさしをかふは、不佞が註が
 ありやす、まづかれが良人が、きやつに戀々してゐ
 やす、そこでそれが病根となつて、陰虛火動の症だ、
 賢腎丸をもちひても治しがたははへ、ちかまさりが
 してどふもいへねへ、實に沈魚落鴈のよほひだと
 いふを、茶屋の女聞ちがへて、何ちんがらくがんを
 とりました、わりいふくだ、こつちへよつてゐやと云
 ふもおかし、よくいろ〜な事を云ふ和尚だと、うち
 つれだちて出れば、春夕はしやべりやます、ときに梅
 さん、一笑の説話がありやす、足下もしつてゐる、そ
 れわつちが二丁目の妓の、べん〜だらりでもつま
 らねへから、一點の赤心あらばと、なんだいをいひ
 かけやすと、一夕閨中にいつてから、見なんしとかな
 んとか云つて、燈下へおのが玉手をさし出すと、不佞
 が名をほりやした、そこでしんせつはうれしいが、お
 らあしよせん死ぬつもりだと眞顔でいふと、甘んじ

て刃をうくべしといひやす、予藥王樹はつたへざれ
 ど、なんでもかれが胸を見すかすに、昔の五漣點で
 はねへが、どふもさふするはづは無しと思ふやささ、
 雑戸等が風説をきくと、われに臥具をあてがふ心だ
 そうさ、そこで足をひいて、京町へ新造買にいつた
 所が、木人石女にものがたりするに似て、こおろしが
 店アかりるか、ろうがいやみが床をとるやうに、暗い
 とこばかりうれしがるからはなせねへさ、何二丁目
 からは、今來いのばんに來いのと、ひとり子のほうそ
 うを受取つたよりは、もうちつとうるせへを、うつち
 やつておくと、後朝に不意つかまりやした、おさだ
 まりの振袖で、どふでもするがい、とぬからぬかほ
 で、河東なるもならぬもすしめのとうなつていや
 したが、とう〜大ごんを少々むさばられやした、な
 どとせきこんではなすに、梅太郎はうい、ありが
 ていあるやつさなどと、あいづちを打つて居る中、は
 や新寺町邊へ來る、東どなりはかぢや、西どなりは
 門口に、池上永代千日講の札をうち、くちぐろとめし
 籠につんであるは大工と見え、この間が春夕がうち
 にて、表出格子三尺のひらき、うちは小僧一人、もつ

とも梅太郎は、たび〜このうちへもきたるゆへ、
 甚こゝろ安くあいさつなしに上へあがり、そこら
 見廻し、ホ、ウのり入れの腰張は、目錄のぬけがら
 か、髪結床なら津川うまるといふ所だ、貸本やが小冊
 の袋、てへげへ役割が定つて居るからい、床の間
 は澤庵か、こいつあこゝろもとねへ、もり口ぐらゐの
 ものだらう、和尚も少し道具家だから、十ぐらゐのし
 かもこのべとおめにかけたらう、春夕は此うちたばこ
 ぼんへ火をいれて來り、もうわらをたきかけるせ、足
 下もでいぶ口がわるくなつた、と机の上からふみを
 とつてやる、梅太郎受取つて、うすやうづりのほう
 ろのしをりになつてゐるからい、春夕はうしろの
 ほうから、あたまをいつべんなで、梅さん私がよみ
 やしやうか、しかしちくせうめと云ふ、私註がへ、
 だけよけいだす、おめへの妓も實にいつ個の墨客
 だ、どけへ出して松花堂と見えやす、今日のはせき
 こんで書いたと見えて、からくさのやうな字がある
 せ、それで弘安の年號があると、池上から極が出る
 など、しやべるに、梅太郎いつしんによんで居て、や
 かましい和尚だと小言を云ふおり、おもてから御め

んなさいまし、表町のいせやから参ました、只今一寸お出なさつて下さりまし、ホイ、こいつはいかざあなるめへ、おめへ直に薬箱を持つて行つて下せへ、梅さん其處に雁皮紙があるから、なんとか返簡をかいとおきなせへ、となりのかぢやで、不動様の夕立にあふやうなおとをさせると、おきみやげのしやれを云つて出て行、梅太郎はあとに残り、小僧どん茶をくんなと、二口吞でふみをひろげ、あふぎをあごへあて、こゝをしきつてこうせると、云ふ身でよんでみるに、この日頃せかれて居る梅太郎を、隠してあげることあらはれ、新造にさげるのこしもとにするのと大もめゆえ、いつそのくされくらがへとふてお、せ、あすはそんじよそこまでさがるから、しよせん生きて居る心はなきとの文てい、扱はわれ故と、といつかいつの思案の所へ、春夕老人は在庵かねと、表からぶらぶらはいるは、こゝのまたとなりに劍術やわらの道場を出し、古學もちつとよめ、じまんにおもてをたけごうし、内をやはらだ、みになし、あしたいくさが始まると云ふやうに、汗水をたらせども、小人に店賃をせつかれ、蘇秦張儀がべんをふるつて、いひわけ

をするもおかし、イヤこれは梅太郎様、春夕主人はおるすかねといふに、梅太郎も折節こゝの内にて心安くせし故、先生今日はおやすみかと笑ひかくれば、ハイ今朝愛宕へ小太刀とり繩の額をあげまして、それから須臾休みましたとは、つきもなき話なり、梅太郎も世事物故、心のくつたくをかくし、そう申せばおまへさん方は、そんなおもしろい物をおさしなつて、腰がおもくはござりませんか、ナニサ、幼少よりさしつけておれば、左様も存せんと、四角ばつて答るに、梅太郎はわきざしをとつて見て、しかし私どももさして見たふございます、こいつがあるとなつたし舟と假橋で、一文かばいができるし、この事を三年早くおもいつくと、おやに苦勞をかけません、時に先生、夕方からはなはどうでございます、先生ふしんそふな顔で、上野飛鳥ならかくべつ、夕方から花とはいづちでござるなと云はれて、さつても箱根からこつちに、皿屋敷といふ出見世が出たれば、野暮のせり賣もはやるそうだと、こゝろにおおしく、何よおまいさん、町の事でござります、エへ其町とかなんとか申すは、吉原の字ではござりませんか、イヤ帯刀いたした

もの、参るべき地でござらぬて、廓はけぶりの色とも書、花と柳の巷とも見えまして、かの色のみをことと致しと、なにやらむづかしい事をならべたつる故、梅太郎はだい／＼こうに、本店の娘のおどりをほめながら見るより、もふちつとあきが来て、私どもはそんなことは、何だか聞いてもわかりません、四角な字でよめるのは、口と云ふ字ばかりでござりますといふを、いねぶりを仕ながら小ぞうが聞いて居て、梅さんへ、私も此間四角な字を一字おぼへました、梅太郎はきいて、こふときさまの四角な字で知つて居るは、蘭と云ふ字か雷の字をたこで見たから、小ぞうまじめで、イ、エそうじやアござりません、太夫さんの障子で、こぶすと云ふ字をおぼへました、

二、心中の段

野良頭に孔雀染させられたる花鳥心客は、迦陵頻伽の雄の如く、伊左衛門が述懐もこゝに止なん、○をもつて戀とすると、源五兵衛が執拗は、江陵の意氣地を知らぬのか、そもさはいへ今臍子のふる事まれにして、萬客へもよろしいよふにもつてまいるは、たとは願人坊主の御鬮に、凶の出た事も無く、淺草市

の手桶に、死といふ字の書であつた、めしなし、商賣がらの空語なれば、だますももとは實なり、錦の被羅綾の襦、天よりふらねば地よりもわかず、皆客の懐が當なれば、くらうざんすとい、つまりいせんとい、しんに聞いておくんなんしとうつとふれど、訓解すればくれるの一言に止る、夫を聞くを客共大盡共いはんか、花と柳の街のにぎはひ、ことふりたればさらいにわす、空手振のれんの染色にあかるく、修行者暗にせきよう日をおぼゆ、春の日もはや吳竹の、ふしみ町を見れば、大きやかなる提灯茶屋の椽に禿犬にからかいおるは、何れの妹妓色男にあふてふ、眞猫のほち／＼ならんと、樓のいと心悪、其中にかたかたの棚は、一斤々々のとつくり所々ならべ、行燈には袖の梅、うで菜ありの書つけ、飛行油妙ふり出し、御鬮はみがきのかけ札ある賣人家より、雛妓のあはたしく走り出るは、地色の屈文のなか宿なるべし、子供のひつぱりおやち客の羽織にすがり、ばアさんのみせ先、あそんでいきなのしりごへにやはす、客をさしてあの子といふは、にさいへのはむき、女郎をさしてばアさんと唱ふるは、年増へのしこなし、若者

とのいざごきは、よひあがりの間違なるべく、七福神の寶づくし書たるかべに掛りある三味線は、琵琶ならぬぞさんねんなれ、寂寥たるかげみせは、煙草の火うすさびしく、時ならぬすがきに、しほ花ふつて格子をたゞき、門に附木をたくあり、しよく臺にみす紙をもやすあり、おまんまどんかみくすの錢をかりられ、大ふかしと化れば、かんざしとんで肴一斤と替る、八ッ打つて内所へのいとまごひは、時札かわり過退し、しまひ札のへがざるは、未金のたらざるなり、じゃけんだのふの流言は、大町にもきかず、折ふし向から來るはいさみと見へ、茶文若衆にかつばはきんもつと、つらの内へおしかくし、上瑠璃珠數さらさらとおしもんで、八やらう見や、あのあねさんは味噌こしで買た豆腐か、白こはめしのもつそふきているせ、跡から來る今一人、格子の前へ立留り、四角ばつたつらに、白あばたがあるから、おきやアがれ、せいくらべなら横にきなせへ、かけつくらならころげるがゑ、などぞめきあるくはわるし、さもやうやく、世間ひつそりとしづけくなり、稻荷の神燈かすかに殘る、此頃あたりの裏にびやう打の腰障子を

たてしは、這入口にぬり下駄二三足、亭主はとでしてくらがへ證文を書いてゐると、表から同じはたけの男一人、八ッ七ッぐらゐとみへて、ひせんの跡のある子を連、親方内にかと上へあがれば、女房茶をくんで出すを、一ト口呑んで下におく、時に親方こねへだ咄しやした奉公人はこれでござりやす、サアこつちへあがりなと云はれて、榎木箱のあげ板の上へすれば、女房すゞりぶたの餘りのくわへと、蓮根を鼻紙へのせて、これでもくひなとあいそうに出すを、だまりんでかぶりをふり、涙ぐんでゐるは、かあいや年一ぱい二兩ぐらゐの奉公人なり、モシあのせんだの奉公人も、とつておくんないやしな、江津へていしにやつておきやしたが、あすかア四切の二締じやア、くわへていてもおさまりやせん、もとかたあらつておきやしたが、ふみ玉なぞじやアござりやせん、此間寅平なぞア、川へふつた女が亭主もちで、もをかたからはれてぶつ、かつたうへで、二年をもらおふと云ひやしたつけが、どうしやしたか、亭主は證文をまきながら、フ、そりやア藝者證文でへつて居る女だろ、おめへその江津なア近地へふんねへ、五切

の四貫だせへ、ふせとちがつて廻しがねへから、かずはさがらねへが、ぬすみもちだアありやす、ソシデあつちにはぎやかさ、尤八ッむかへめへだが、せんどあちへよつて見やしたが、札がきれていやしたと、かつにのつて咄せば、おもてから來た男も、喜世留をまわしながら、そんならそうしやせうかへ、亭主は火鉢のふいごをいごかし、おめへ直ぐ金をかりねへけりやア、四ッだアな、うわはがてへへ金の利にひけやす、中どこが五日に五百、上どこが八百サ、三味線も一ト勘定百五十で立派よ、など、商賣向の咄しにみのいる處へ、二階からおりる男は、このの内へさがつてゐる女郎の客にて、そうおうに心づけもする故、マアよふごさいやすなど、捨言葉ありてかへる、さて此客を送つておりた子供四人あり、一人は楊國忠が肉障にもすぎもの、ふとつてう、細腰を專とする楚王も、かぶりをふるやせ容、まさのかづら計にもつて、千早振てふ髪の毛のはげしは、まみへを矢筈に引、米かみへ梅干をはり、此内へこきでんのきいたのは、年二十一、色青白く、草たばねの白齒は、春待屋のむろ咲と云ふ花魁なるが、梅

太郎とかりそめならぬ中となり、夫がくらがへの病根にて、この内へさがりてゐるなり、是も今の客のちそうになりしとみへ、楊枝をかへでしたながしへほり出し、どうこの鐵嗅き湯でうがいはする折ふし、表のかたを小聲にていたこの下の句ばかり「蓮のうてなのあら世帯」、此歌むろ咲の耳へ入るとひとしく、ア、ラあやし、男の鼠なきして、てうづのふりにて表へ出、梅さんか、かのおとこ、室咲、コレシイ、是をきつかけに此道具ふんまはすと、
本舞臺三間の間かき落しの土手、此上に常磐津連並よくならび、よき所見合、石の地藏、釣おとしの柳きれいにすへて、淺草田甫の體、蟲の聲一ッ鐘にて道具おさまる、
ト向ふばた／＼にて梅太郎出る、あとより若衆二人、吉といふ字のはんてんにて、六尺棒を持、花道の中ごろにて、
□ 梅太郎、
□ 大門口からかんばつた、
△ 一むろ咲はどけへこかした、
△ 一 おいらにわたして、

一かんねんしろ、

トぶつて掛る、ど、兩人をむかふへ追込、引違て
又ばた〜にてむろ喉走り出、梅太郎につき當
り、びつくりして顔を見合せ、

梅
一そなたはむろ喉、

一梅太郎さん、

「ちりて行く、うき世におもひおく霜も、いのちも
消ゆるあだし心も今は又、はなれぬなかの梅と室、
義理となさけの中たんぼ、うち連立てあゆみ来る、

中略
せりふ

「せかれた時のかなしさは、一寸と咄すもたちかく
れ、いつか世間をいろ〜と、ほんの女夫とならざか
や、この手をしめてしめかへす、それも格子がじや
まになり、心でむなぐら取がちに、かへりも千代喜は
よさんせと、一日あはねば氣にかへり、文のふうじの
上書は、男の筆にしのお摺、道のくになるあさあら
し、

トむまいさいちうへ、このあたりの口き、らし
き男、稻村のかげよりとんで出、みつけた〜、
殺しはしねへ、また所のやつかいだ、それだから

こゝを、心中地藏とわりぬ名を付た、ふうのわり
い、せんでへ心中がはやるそうだ、大方此間しん
だもこなた衆たらう、

三、かこはれの段

一寸とした事がこうじて芥川、梅太郎室喉は、とめて
のあるを幸と、廓の方へもわたりをつけ、本町の本
店へは、昔とつた木根川の叔父をたのみ、これ切りの
ねがひも、母は耳へたこがいつてとりあげねば、思き
つて親父へぶつかりしに、そこが子故に迷ふ夜のつ
る、ついた錢は一文ヅ、指でおしみて、玉祭のせうじ
ん落に、初松魚くふよふな性質なれど、それですむ
事ならばと、ちぎ箱に似た物取出してのさばき、なん
とどてつ腹をえぐつたらうとの、叔父の高まんに梅
太郎もよろこび、室喉がかたづきは、近所のでまへ親
父の心、は、きのありとは知れて、先とふき別房の
身分となり、風雅でもなくしやれすぎた跡は、せうこ
となしの山の宿とか山谷とか、所はしかと忘れたれ
ど、先木戸ぎはに雨ざらしの梵天、土藏二戸まへは、
鏡の如く通りの人がうつり、梁に燕の飛かふは、柱ふ
とく棟高く作りなしたる典當鋪にて、扱その隣に神

道者、門に注連繩引はへて、何某の國にて神司なり
と云ひはやせば、かのしちやとくらべて見れば、すめ
る天とにされる地ほどの違ひ、こゝにおかしき説話
は、此先にお耶輪と異名をとりし女妓あり、元來龜王
が女房にもあらず、其因縁を尋ぬるに、近會旅僧の
圍人となりしが、桑門の僧から出山の釋迦に似たり
とて、夫よりして釋迦の女房の縁をとりて、耶輪陀羅
女の下略なりとぞ、此おやしゆかの神道者と男女交
合せし事を、かゝアの釦女命ほのき、て、いきのはた
たちにもなしかねまじきおももちして、野郎よはは
りのやきもち、こゝとは八ッの御耳をふりたて、聞
いても居られず、朝夕の飯にはおわれ、神風の伊勢
屋よりは、流のさいそくにおそれみ〜をもふすと、
手にとる鈴もならぬしんだいの、おもに、こづけと
食客の卜者、表へ出て人の當卦本卦はうらなへど、己
が身に幸福の至らざるは、机をうつて嘆息し、今日は
曇つて人があつたらぬと云ふ事は、天けんかまふく
てとひがかまらぬと云ひ、雨が落てくれば、サア水は
れたとのことは、己が要とする神相要書、梅花心易
にも見當らずと、こゝの間にろち口ありて、這入口に

孫店一軒、ない袖のふつてくらせぬ放鳥賣、おやぢが
向の鰻屋の仕出をみて、不審に思ふも尤なり、そもそ
もこの裏は、圍物又は茶屋土弓場の女なぞ居故に、玉
ぞろひと云ふ處にて、孔雀長屋共辨犬長屋共異名せ
り、這入口はせまけれど、真中に空地ありて、かぎ
一、てんこう、のり吉など云ふ札八九枚もあり、かの
むろ喉は、本町より男女五六人もつけおかれ、あき地
をすぐに小庭となし、裏でこそあれ造屋の創意、茶房
が、りに備後の五分べり、蘆蔭の仰塵、さらし竹の椽
頬折まはし、圭竇には鼈甲地錦をからませ、鳳尾草
玉簪花をあいしらいし、石盤は青苔衣に似てねうち
あり、床の間に碁局、象戲盤、玉琴、三絃などならべし
は、一體潔癖とみへたり、室喉もよふ〜七夜のと
きの名のお町とあらため、急に白徒めかすとすれど、又
どこやらにざんす言葉がやまず、氣の大きいは、あら
錢ならぬあらがねを、塊のごとくつかへば、喜譏議を
商賣にするかみさんのあつまり場所となり、けふも
朝からつめかけるは、長屋中で鐵棒のおなると、仇
名をとつたたいのおしやべり、亭主はもと肴賣にて、

今は夜かごと商賣をなし、夜晝かせぐよりは、貧乏の足早く、日なしは二七のふた口をちかみ、米屋は晦日のていせりを乞ふ、九尺二間はお定りのかんりやく枕見るよふに、焼印のある戸のかたわらに、鯛のかしらの残りしは、伍子胥が専門の面影を思ひ出し、隣へだつる壁は、おきやがりこぶしの尻ッべたよりうすく、釣佛壇には院號の無い戒名が三四まひ、異うちだとゑりつけたる徳利に、三文花そなへしは、内損で死だ先の佛へのはむきなるべけれど、飲酒戒をやぶれといはぬ計の仕かた、冬はかまや炭團に寒をしのぎ、夏はあがりのはなへつゝい邪魔になり、いびつに蚊帳をつるもおかし、されどこのおなるは、我あるじ顔にて、るすになれば買食ひのみかんの皮を、ねて居て紙屑籠へほうりこみ、是目をふやささんためばかりにもあらず、頭かくして尻までかくすつもりなれど、流しの瓜の種へ、さるほうで水をふつかくると同じたぐひなり、扱亭主がもどれば、おめへ足ついでに水を汲みなの、降りそうだから干物をとり込のと、あだかも奴僕の如くひつゝかひ、おらア一日かせぐものだ、手前其ぐらゐナことはしてもいゝと

いへば、おなる大きにいかり、エ、てめへもしこなしすぎた、おきやアがんなせへ、あぶらむしこそはいれ、へつついと戸棚もおれが物だ、お前のもナア、へやこののうてを見る様に、ほりものだらけのはんでへばかした、かついで出て行くも大笑ひだ、おめへそしてあしたけへすといつた裕はどうした、ナンニはたらきもねへくせに、おきにしなせへなと、こはだかにのゝしり、何誰の良人はどふだの、くれがしのだんなはこうだのと、まゝ子いびりをならべたて、あげくのはてにはつかみやつて夫婦喧嘩、仲人はもちろん店うけ迄驅出す事、月の中に指を折つくすべし、たまゝ裕の丸洗ひをあてがへば、百足がわらじをはき、蛙がはらの灸すへるよりおつくふに思ふなど、このともがら裏屋にはまゝあるものなり、おなるは上りはなから聲高に、おさんどん又居寐りかと、捨言葉をいひながらあがれば、お町は提灯屋で定紋をかゝせたおごけをかたづけ、ヲやおなるさん、よくおいでだね、なんだかいつそさみしいよ、さんや廣島へ茶したしをかけやナ、今日は何をおごりやせふ、モシ今迄大きな聲をしてゐなすつたね、よくわたし

どもまで聞へたと、一ぶく吸はて出すと呑みながら、なアに着アよんでみやしたのサ、あぢはのぢめでたけがねへから、いけなから是でもいゝが、つけへものだからよそふといひやしたら、内てくふにえへをかへといゝやすが、こいつもどうらんでくへやせん、是はしにがひなり、あの肴屋もしみつたれになりました、おやゝわたしどもは、あぢといへば一色だと思つていゝしたがねへ、おなるは鼻の穴から煙を出しながら、むしがれいにまでかんそうだのかしまだのと色々ありやす、しゝみを買ふとおもへば、せんにちなり川のうちでも、ほり下はこまけへが、いつちうまいね、夫はそれだと、わたしが隣の小間物屋のお杉さんね、せんでへちいせへやしきのおまんまたきだつたそうさ、そりやうかくそふと思つて、商賣上の真似をして、一ッばかりあるほり物を見せびらかしたり、湯へいくとしも湯をも、ていねへにつかふうちは大笑ひだね、そふしたとつてあの子なざ、けびきつてゐるから、長屋とはつちやア見へやせん、夫におかしいは、房州生れだからださふだが、子を寐せつける時、なんだかわからねへうたをうたふが聞へ

やす、などいへどこのおなか、元は長屋の土妓にて、線香の灰のあるゆるりに、かゝつてゐるかんすでしも湯をつかひ、しつぽを切つた錢で、おでんあんばいよしをかつて食つた中間にて、煙草をのんで喜世留をおくにも、雁首がふさると、鼠なきをすることなどあり、お町はにつこり笑ひながら、成程世間にはいろゝゝなものがあるねへ、またわたしどもなざア、あかりをかくそふゝとおもつて、てへでへ心づかひをしひすが、どふかするとしんめうをおはり云つたり、馬鹿らしいが口癖になつて、しかられますよと云ふに、南無三口がすべつたと二度氣の毒になり、なアにそりやアじきになほりますと、いひましくないをして居る處へ、噂をいへば影とやら、小物屋のお杉、お賑やかでござります、おやゝお町さん、今日ではへおおやつたね、大方ゆうべ旦那がおこまりで、研ぐらゐはじよぶだるふ、おやゝいやだねへと、なんの事か知らずに云ふもあるやつなり、おなるはだんまりで居たりしが、コウお杉さん、おめへよんべやどろくといひやつたの、おらアよく聞いて居たせ、何さわたしらが所の松さんは、此間はきてもふ

れたそふさ、からつきし内にやアゐやせん、そりやア
 なにもやくのやかねへのと、云ふ處じやアありやせ
 んが、がきや子供のねへじやアなしで、わけをいひや
 したのさ、おなるはすこしはなへかけて、何おめへ
 のちわ喧嘩も久しい物サ、此時お町は手を一ッ拍、お
 やうらやましいねと、あどけないもそれしやなり、此
 かみさまもかく云ふはまけおしみにて、いつたい屋
 敷につとめて居る中より、芝居咄しで今の小物屋の
 足になり、おばこのゆづりの柳茶うらに金糸紋、飛金
 もくろの帯ぐらゐは持つて来りしが、夫も典物と變
 じ、一年は二度のしらはに土弓の出女となり、今もい
 ぼぢりまきになると、丁金のおれたをさし、四寸的が
 煙草入となつてゐるなど、かゝる中なれば、人よりは
 りんきふかく、たとへ火の中水の底と、焼豆腐やく
 やふな文句も、いひ合しならんか、おさんは煮花を持
 て、はい出来ましたと出すを、お杉はうけ取、ヲアあ
 たまがごみだらけだよと、ふいてやりながら、おさん
 どん、お前まへざしへうきが出たよ、びん附をぬつて
 火であぶりねへ、おめへいくらでかつた、フウ八奴
 か、かたの字ハ、じやア高へ、力りき重じゆう五分、がものはつちや

アねへとは、勸學院の雀なるべし、かく三人のしやべ
 ること、朝市のせりものは物かは、この處いつこう筆
 にもかきとれず、既に日天心に至り、行かふ路次下駄
 かしましく、米つきは越後の山にあせを流し、横木割
 はけやきのしたに一身の力をあつむ、あき人の聲さ
 まんくにて、「ふるばねおもちやと、りかへまじよ」
 「らうのすげかへ」とりかへ茶わんばちやでござい
 お町はにばなを吞でゐたりしが、おや〜いひ所へ
 きたよ、茶漬茶碗をかわねへければならねへ、さん
 やよんでくりやアな、おなるひつとつて、おめへさん
 はいつでも、物のかひよふが人がいひ、わたしがつ
 けてあげませうと、臺處へいで、コウおめへをちらな
 ァいくらだ、そつちのあいっきのいひのよ、茶わんば
 ち屋はわらごみをとりながら、二百五十でござりま
 す、それちやアたかへ、百三十二文にしな、すこしし
 あんをして、なんぞおしたのもでも、ぬりもの、し、
 きせたの、田舎へ廻る久しいしやれた、そふいわすと
 まけな、など、お杉と二人に云ひまくられ、もう
 少し御了簡を、捨せりふに逃げいだせば、どふいふは
 づみかドブ板へけつまづき、むざんなるかな石へあ

たり、四百のどんぶり六百の皿、ちりものこらずわ
 れてしまへば、おなるは門口に見て居たりしが、お町
 さん〜、あの茶わんばちやがまけねへばちで、ころ
 んだとおもひなせへ、わつちがねをつけたも、みんな
 われてしまひやした、お町はびつくりして、そんなら
 わつちがい〜と云つたもかへ、おなるはあいしれた
 ことさ、お町はしあんのありそふなかほで、ほんにか
 はねへでよかつたねへ、

此末の原稿、皆尾とは妄説、かけこの無い所は、此
 小冊おきに入り、書房の米匣をうるほさば、後篇は
 いかなることや著、こゝでしまふがナソレ狂言の、

山田 安榮
 本居 清造
 伊藤 千可良
 岩橋 小彌太
 校

やまあらし終

徳川文藝類聚第五 終

徳川文藝類聚第五

此書は徳川文藝類聚の第五巻に属する。其の内容は、徳川文藝類聚の編輯者である早川純三郎の著述である。其の内容は、徳川文藝類聚の編輯者である早川純三郎の著述である。其の内容は、徳川文藝類聚の編輯者である早川純三郎の著述である。

徳川文藝類聚第五

徳川文藝類聚第五
早川純三郎
山田文彦

大正三年十一月二十日印刷
大正三年十一月廿五日發行

(徳川文藝類聚第五)
非賣品

編輯者兼
行輯者

早川純三郎

印刷者

高橋赤次郎

印刷所

東京市京橋區新榮町四丁目三番地
國書刊行會第一工場

發行所

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會

不許複製



圖書汗行會

東京市京橋區新富町三丁目三番地

圖書汗行會第一工場

東京市京橋區新富町三丁目三番地

高爾衣夫

東京市京橋區新富町三丁目三番地

早川蘇三

圖書汗行會分賣部

東京市京橋區新富町三丁目三番地

非賣品

(早川文藝雜誌社)

大正三年十一月廿五日發行

大正三年十一月二十日印刷



